

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』 翻訳と注釈 (2)

中 沢 敦 夫

富山大学人文科学研究第 77 号抜刷

2022年8月

翻 訳

## 『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈(2)

中 沢 敦 夫

### 【ウラジーミルはブルガール人討伐遠征を行うが和を結び帰還する】 [№ 85]

[132] 6493(985)年。

ウラジーミル [06] は、自分の伯叔父<sup>1)</sup> ドブリニャ<sup>2)</sup> (Добрыня) とともにブルガール人<sup>3)</sup> (болгары) を攻めるべく兵を進めた。〔自分は〕船に乗り、他方、馬で川岸を進むトルク

---

1) この съ... уемъ своимъ (伯叔父ともに) は *Лер.* では съ воемъ своимъ (自分の軍兵とともに) となっている。この *Лер.* 固有の異読は [№ 54] でも見出すことができ、*ун* の意味が理解できなかった *Лер.* 系列写本の写生字による意図的な改変と考えられる。マルーシャの兄弟がドブリニャであることは 970 年の記事で述べられている [ノヴゴロド第一年代記(1) : 注 351]。

2) ドブリニャはノヴゴロドの代官 [№ 75] としてノヴゴロドにいたはずだが、ウラジーミル公が遠征のために特に動員したのだろう。ノヴゴロドの軍兵も率いさせていたと思われる。それだけ、重要な意味をもつ遠征だったことが分かる。

3) 「ブルガール人」(болгары) は *НМ* ではここが初出で、これに続くブルガール人によるイスラム教布教使節の記事 [№ 86] とのつながりからも、ヴォルガ川中流域のカマ川との合流地域に広く居住していたテュルク系のいわゆる「ヴォルガ・ブルガール人」(волжские болгары) を指していることが自然であり、この理解が通説になっている。これは、11 世紀成立の修士ヤコフによる『ルーシ公のウラジーミルへの記念と称賛の詞』(Память и похвала Русскому Владимиру) の中にウラジーミルが「銀のブルガール人に打ち勝った」(сребренны болгары побѣди)[БЛДР Т. 1: С. 322] との類似の記述があり、ヴォルガ・ブルガールで銀が採取され近隣に輸出されたことから、アラビア語の銀(нухрат; nugrat) が冠されて Нухрат Пълхар (銀のブルガール) と呼ばれていたことによっている [Мадуров 2018: С. 26]。10 世紀 60 年代にハザール人の国家が衰退すると、この地域を支配する独立国家を形成し、この 10 世紀後半から、1236 年にモンゴル人に征服されるまで自立した勢力として、ルーシとは戦争や交易の関係を保っていた。*ПВЛ* では冒頭の民族地理誌的序文の中に、「ルーシ人のところからヴォルガ川に沿ってブルガール人のところ、フヴァリシ人 [カスピ海岸の居住民族] のところに行くことができる」(из Руси можеть ити по Волзѣ в Болгары и въ Хвалисы)[ПСРЛ Т. 1: С. стб. 7] とあり、これに拠れば、ウラジーミルの遠征行路はドニエプル川水系からヴォルガ川の上流域に入り、ノヴゴロドから来たドブリニャの部隊と合流した上で(上注 2)、ヴォルガ川を下って中流域のブルガール人の支配地を襲撃したと推定される。

しかしながら、キエフとドナウ・ブルガリアとの間には、遠征の手段として船と騎馬行の二つがあったこと [ノヴゴロド第一年代記(1):注 375] などから、これをドナウ川流域のブルガール(ブルガリア)人への遠征とする見解もある(シャフマトフ、プリショルコフ) [Комментарии 1950: С. 328-329] [Мадуров 2018: С. 27]。さらには遠征先を「黒ブルガール人」、すなわち大ブルガール国の故地であるアゾフ海沿岸のブルガール人(オグノル・ブルガール人)とする説が、近年研究者から提唱されている。これは当時のルーシ人のこの地域で活発な活動とビザンツ帝国との対立という国際情勢を主な論拠にしている(研究については [Роменский 2017: С. 110-113][Милютенко 2008: С. 64-74] を参照)。

人<sup>4)</sup> (торкы) を率いた。こうして、〔ウラジーミルは〕ブルガール人に打ち勝った<sup>5)</sup>。

ドブリニャはウラジーミル [06] に言った。「わたしは拘束した捕虜<sup>6)</sup> を視察しました。全員が長靴 (сапози) を履いています。この者たちがわれらに貢税を納めることはないでしょう。われら〔二人は〕〔遠征に〕行って、わらじを履いている者たち (лапотники) を探しましよ<sup>7)</sup>」。そしてウラジーミル [06] はブルガール人と和を結び<sup>8)</sup>、互いに誓約の儀式を行った<sup>9)</sup>。〔その時〕ブルガール人は言った。「もし石が水に浮き始め、ホップが沈んだら、われらの間に平和はないでしょう<sup>10)</sup>」。そしてウラジーミル [06] はキエフに帰って来た。

- 
- 4) 「トルク人」(торки) は本年代記ではここが初出。この民族名は、オグズ (Oghuz), ウズ (Uz), トゥルクマーン (Turkmen) などと呼ばれたテュルク系の部族の中世ロシア史料における呼称。本来はカスピ海の北・東岸に居住していたが、10世紀以降黒海北岸の大草原地帯に展開し、当時はドン川下・中流域に居住していたと考えられる。この一帯はスヴァトスラフ公 [03] の対ハザール人およびヤース＝カソグ人遠征のときにルーシ人による支配が及んでおり [№ 44, 45], ウラジーミルは臣従していたトルク人を、かれらと同族であるブルガール人征服遠征のために動員したのではないか [Голубовский 1884: C. 45]。ドン川＝ヴォルガ川下流域に展開していたトルク人は、これに呼応してヴォルガ沿岸を遡るかたちで馬で北上し、ヴォルガ川を船で下った (前注) ウラジーミル軍と合流したと考えられる [Плетнева 1990: C. 23]
- 5) 「打ち勝った」(побѣди) の表現は、これまでの使用例を見ると、異族を武力で制圧したうえで、「貢税を課す」(возложи дань) ことがワンセットになっているが、ここでは貢税を課すことは失敗している (下注 8)。ここでの「打ち勝った」は常套句として惰性的に使われたのだろう。
- 6) 「拘束した捕虜」の原語は колодники で、「足枷」を意味する колод から作られた語。戦闘で捕獲した捕虜を、逃げられないよう縄などで手足を縛ったもの。かれらは、遠征の主要な目的である捕虜掠奪の戦利品であり、連れ帰って奴隷として使役したり、外国との交易品として使われた。
- 7) このドブリニャの言葉は、自分たちの風習や諸公に関する古いフォークロア伝承のエピソードを年代記記者が書き留めたもの。所持品による貢納者の品定めという点では、ハザール人によるポリャネ人への課税のエピソード [№ 6] と非常によく似ている。そこにおける「長剣」(мечь) と同様に、この「長靴」(сапози) は相手が有する優れた軍事能力 (軍装) の象徴になっている。
- 8) 「和を結んだ」(сотворити мир) は相手と約定を交わして戦争を終わらせること。この場合は、ウラジーミル側は貢税を課すことはできず、おそらくルーシ商人の安全保証の合意や捕虜の交換などを行って帰還したのだろう。その意味では、遠征は失敗だったということになる。
- 9) 「互いに誓約の儀式を行った」(рогѣ заходиша межи собою) は、和議における約定順守を誓う儀式を指している ([ノヴゴロド第一年代記 (1): 注 433] 参照)。「互いに」の表現は、それぞれの側が誓約順守を担保するそれぞれの神格 (その依り代) に対して行うことからきている。例えば *ПВЛ* では 907 年のオレーグとビザンツ皇帝との間の協定の描写で、オレーグは武器と異教神に対して、皇帝は十字架に対して別々に (「互いに」) 儀式を行っている [ПСРЛ Т. 1: C. стб. 32]。
- 10) この句はブルガール人側が誓約の儀式の中で発した誓言の結びの句として紹介されているが、その機知に富んだ内容からフォークロアによって伝わったものを書き留めたのだろう。このようにあり得ないことを提示して逆説的に確かな将来を保証する呪言は、例えば、ロシアの民間の呪文 (заговор) の結びの句, как не может жить рыба без воды и дитя без матери, так бы не могла раба божия (имярек) жить без раба божия (имярек). や как не болят зубы у мертвеца, так бы и не болели у большого... などと共通している。

【ブルガール人の使者によるウラジーミルへのイスラム教の布教：信仰布教の物語  
1<sup>11)</sup>】 [№ 86]

6494(986)年

ムハンマド信仰の<sup>12)</sup> (вѣры Бохмиць)ブルガール人が来て<sup>13)</sup>, こう言った。「あなたは賢明で思慮深い<sup>14)</sup> 公ですが, 法を知りません。われらの法を信仰しなさい, そしてムハンマド(Бохмит)を礼拝しなさい」。ウラジーミル [06] は言った。「お前たちの信仰はどのようなものか」。かれらは言った。「われらは神を信仰しています。ムハンマドはわれらにこう言って教えています。〈恥ずかしい器官を割礼せよ, 豚肉を食べるな, 酒を飲むな〉。また言っています。〈死後には女たちと淫行の情欲を満たすだろう〉。なぜならムハンマドは誰に対しても 70 人ずつの美しい女を与え<sup>15)</sup>, ひとりの美しい女を選び, すべての者の美しさをそのひとりに付与した, その者がかれの妻となるからです。[ムハンマドは] 言っています。〈誰であれこの, この世ではあらゆる淫行をなすべきである。ここ〔現世〕で豊かな者は, あそこ〔来世〕でも〔そのようだ〕。ここで貧しい者は, あそこでも〔そのようだ〕〉。その他にも多くの虚言が〔述べられたが〕, そのことは恥かしくてそれを書くことはできない。

11) これ以降, 隣接する地域の大きな宗教勢力(イスラム教, カトリック, ユダヤ教, 正教)の布教者とウラジーミルとの信仰についての対話が記述されるが([№ 86-89]), この部分は「信仰布教(使者の受け入れ) (предложение веры)の物語としてまとめられる。これに続いて正教の布教者による「哲人の言葉」(речь философа)[№ 90-94] (下注 36) が置かれ, さらに布教の物語内容がつながる 6495(987)年記事「信仰の検証(使者派遣) (испытание веры)[№ 95-96]の物語が語られる。なお, ウラジーミルによるルーシのキリスト教受容記事([№ 97]以下)の〈序章〉にあたるこの三つの部分[№ 86-96]をまとめて, 広く「信仰の選択」(выбор веры)の物語と呼ぶこともある。

12) 「ムハンマド信仰の」(вѣры Бохмиць)はイスラム教のこと。Бохмитの語はБахмат, Бахмитなどの異形があり, 教祖ムハンマドの人名のテュルク語読み Mähmät (< Mähämät < Mähämmäd)に発している [Аникин Вып. 2: С. 287-288]。

13) ヴォルガ・ブルガール王国は, アルムシュ王(在位 895-925 年)による積極的イスラム教受容政策とバグダードのアッバス朝カリフとの外交強化によって, 10 世紀前半には独立したイスラム教国になっていた [イブン・ファドラーン: 12-15 頁]。

14) 「賢明で思慮深い」(мудръ и смыслень)は本年代記の定型表現であり, これまでもポリャネ人, イーゴリ公 [02], オリガ妃, ウラジーミル公 [06]の家臣について言われてきており [ノヴゴロド第一年代記 (1): 注 65, 114, 136, 438], もっとも古い物語層に属する表現である。またこれは, 「信仰布教」物語の続きである「信仰検証(使者派遣)」の物語においても, 使者たちについて使われている(下注 255 参照)。

15) イスラム教の第二聖典である「ハディース」(ムハンマド言行録)に記されている, 天国に入った男性のムスリムを迎えるとされる「フーリー」(Houri)と呼ばれる処女たちのこと。一人につき 70 人(もしくは 72 人)のフーリーが性の相手をするるとされる伝承が伝えられており, おそらくこのことを指しているだろう。例えば「アブー・フライラによると神の使徒は言った。『天国に入る先頭の者は (...) つぶらな瞳のフーリーを妻として持ち』」[ハディース (中): 166 頁] (『クルアーン』56:10-24 参照) などがある。

ウラジーミル [06] は、かれら [の言うこと] を聴いていた。自らも女が好きで、多くの淫行を好んでいた<sup>16)</sup> ので、甘美な思いで聴き入ったのである。しかし見よ、器官を割礼すること、豚肉を食べないことはかれには気に入らなかった。酒 [を飲まないこと] については全く [気に入らなかった]。[かれは] 言った。「ルーシ人には飲むことが楽しみなのだから。われらはそれなしには在る [生きる] ことはできない」<sup>17)</sup>。

## 【ドイツ人の使者によるウラジーミルへのカトリックの布教：信仰布教の物語 2】

[№ 87]

その後、ドイツ人<sup>18)</sup> (нѣмци) がローマから来て、こう言った。「わたしたちはやって来ました。教皇から派遣されたのです。[教皇は] あなたにこう言っています。〈あなたの地はわれらの地と同じですが、あなたたちの信仰はわれらの信仰と同じではありません。われらの信仰は光です。われらは天と地、星、月および全ての息をする物を創造した神を拝礼しています。ところが、あなたがたの神々は [133] 木 [でできている] のです〉。ウラジーミル [06] は言った。「お前たちの戒律はどういうものか」。かれらは言った。「精進 (пошение) は [各自の] 力に応じてなせ。もし誰かが飲み、食べたとしても、そのすべては神の栄光のためである<sup>19)</sup>。[このように]われらの教師パウロ<sup>20)</sup>が言いました」。ウラジーミル [06] は、ドイツ人に言った。「自

16) ウラジーミルの「女と淫行を好んでいた」(любя жены и блуждение), すなわち「女好き」(женолюбец) であることについては [ノヴゴロド第一年代記 (1): 注 467, 468] を参照。

17) この文言は *Км Руси понеже бо есть питье намъ веселие, нь не можемъ безъ сего бити*。で、下線の語句を取り除くと、*Лвр, Ин, НК1, Твр* の読みとほぼ一致する。下線の語句は補足的で、かえって文を分かり難くしていることから、*Км* の読みは二次的な付加によると考えるべきだろう。なお、*Ак, Бр* の読みは二次的な付加の度合いがさらに増している。

18) 「ドイツ人」(нѣмци) の語は、*ПВЛ* の民族地理誌の序章において、ヤベテの種族 (колѣно) の一つとしてローマ人 (римлянѣ) やコルリャグ人 (корлязи) [カロリング朝フランク王国治下のゲルマン人] と並んで記されている。*Н1-М* ではここが初出。この語 (現代語では「ドイツ人」を指す) は語源的には「理解できない異なった言葉を喋る者」を意味しており、歴史的にスラブ人と隣接して居住していたゲルマン系の民族を広く指していた。ここでは、ローマ教会の下にあるカトリック教徒を意味している。

なお、「ローマから来たドイツ人」(нѣмци из Рима) の表現が、ドイツ人の神聖ローマ皇帝オットー一世がローマを領有して (962 年以降) 教皇庁を配下に置き、ビザンツ教会との対立が始まった情勢を反映している可能性もある [Петрухин 2014: С. 175]。

19) この文言からは、年代記記者にとって、食の精進 (пошение) の問題が、カトリックと正教の「戒律」(заповѣдь) の違いとして意識されていたことが分かる。この信仰にかかわる食習慣への関心は、ウラジーミルと、イスラム教 [№ 86] およびユダヤ教 [№ 88] の使節との会話の中にも見て取ることができる (これについては [Петрухин 2014: С. 176] も参照)。

20) 以上の文言は、使徒パウロの直接の言葉ではなく、自らをパウロの代理人と認めてきたローマ教皇が伝えてきたことを指している。

分たちのところに帰るがよい。われらの父たちはこれを行って<sup>21)</sup> こなかった<sup>22)</sup>」。

### 【ハザール人の使者によるウラジーミルへのユダヤ教の布教：信仰布教の物語3】

[№ 88]

これを聞きハザール人のユダヤ人たち<sup>23)</sup> (жидове козарьстѣи) が来て言った。「われらは、ブルガール人とキリスト教徒が来て、あなたにそれぞれ自分の信仰を教えたと言いました。キリスト教徒はわれらが磔にした者を信仰しています。ところがわれらは、アブラハム、イサク、ヤコブの唯一の神を信仰しているのです」。ウラジーミル [06] は言った。「お前たちの法はどのようなものか」。かれらは言った。「割礼をし、豚肉も兎の肉も食べず、安息日 (субота) を守ることです」。かれ [ウラジーミル [06]] は言った。「それでお前たちの地はどこにあるのか」。かれらは言った。「エルサレムに」。かれは言った。「それで、そこに今もあるのか」。かれらは言った。「神はわれらの父たちに対し怒りを発し、われらの罪ゆえに、われらを国々に散らしました。そして、われらの地はキリスト教徒に引き渡されたのです<sup>24)</sup>」。かれ [ウラジーミル [06]] は言った。「それではお前たちはなぜ他の者たちに教えているのか。自分たちが神によって斥けられ、散らされているのに。もし神がお前たちとお前たちの法を愛していたのなら、お前たちが他人

21) 「これを行ってこなかった」(не суть сего творилъ) は *Км* の固有な読みで、他の *Н1-М* の写本 (*Ак, Бр, Тр*) と *ПВЛ, НК1* では прияли/приали (これを受け容れなかった) となっている。*Км* の読みは意味的に不自然でもあり、二次的な改変によるものだろう。

22) 教皇からの使節についての記述全体および「父たちが受け容れなかった」(前注) ゆえに使節に帰国を命じたこの部分は、皇妃オリガ治世の961年に東フランク王オットー一世によって、修道士アダルベルトがルーシ布教司教に任命されて、カトリックの布教のためにキエフを訪問したが、翌年に何の成果もなく帰国した史実 [栗生沢 2015:240-241 頁] を踏まえて書かれた可能性もある [Петрухин 2014: С. 175]。

23) 「ハザールのユダヤ人たち」(жидове козарьстѣи) のハザール人 (козары) についてはこれまでも触れられていたが [№ 6, 43, 44], ユダヤ教徒としての言及はここが初めて。ハザール王 (カガン) 国の支配層は8世紀前半にはユダヤ教に親しんでいたが、8世紀末のオパディア=ハン治世にこれを国教として受容した。ユダヤ教の宣教師との論争については、860~862年にハザール国を訪問したコンスタンティノス (キュリロス) の聖人伝にも描かれている [コンスタンティノス一代記(1): 16-17 頁] [コンスタンティノス一代記(2): 191-201 頁]。960年代には、スヴァトスラフ [03] の襲撃などによってハザール国のヴォルガ川およびドン川の下流域における支配は衰退したが、980年代の当時であってもクリミア半島東部にはある程度の領国を保持していた。[ブリュートニェヴァ 1996(1976): 116-118, 129 頁]

24) 「キリスト教徒に引き渡された」(предана бысть... крестианомъ) の文言が、第1回十字軍によるエルサレム占領 (1099年) を踏まえたものだとすれば、この部分はかなり遅い時代の史実を反映していることになる。丁度 *КНС* が成立したと推定される1095年頃 (数年の違いはあるが) の教会人の立場をここで述べている可能性がある。ただし、十字軍はユダヤ人からではなく、イスラムの勢力からエルサレムを奪ったなど、そもそもこのエピソードは史実と対応していないとする考え方もある [Петрухин 2014: С. 178]。

の〔様々な〕<sup>25)</sup> 土地に散らされることはなかつただろう。いったい、われらも同じように悪を受け入れるとお前たちは思っているのか」。

#### 【ギリシア人の使者（哲人）によるウラジーミルへの正教の布教：信仰布教の物語4】

[№ 89]

さて、この後、ギリシア人がウラジーミル[06]のもとにひとりの哲人<sup>26)</sup>(философ)を派遣して、こう言った。

「われらは聞きました。ブルガール人がやって来て自分の信仰を受け入れるようあなたに教えを述べたと。かれらの信仰は天と地を汚すものです。かれらはすべての人の中で最も呪われており、〔かれらは〕ソドムとゴモラにも比すべきものです。〔ソドムとゴモラの人々に〕主は焼け石を降らせ<sup>27)</sup>、洪水を起こして沈めました。こうして、この者たち〔イスラム教徒のブルガール人〕を待ち受けているのはかれらの破滅の日です。それは、神が地上に到来して、あらゆる法に外れたこと穢れたことをなした者を滅ぼす時に〔起こります〕。この者たちは、自分の尻を洗い、水ですすぎ、その〔水を〕口の中に注ぎ入れたり、[134] 髭に塗りつけて、ムハンマドの名を唱えているのですから。同様にまた、かれらの女たちもやはり穢れたことをなしています。時にはもっとひどいことを、男女の交わりから〔出たもの〕を味わっているのです」。ウラジーミル[06]はこれらのことを聞くと、唾を吐いて言った。「汚いことだ」。

また哲人は言った。「われらはこのようなことを聞きました。ローマから〔使者たちが〕、自分たちの信仰をあなたがたに教えるためにやって来たと。かれらの信仰は、われら〔の信

---

25) 「悪を受け容れる」(зло прияти)は*Лвр*には зло (悪)の語がないが、他の*Н1-М*、*ПВЛ*、*НК1*にはあることから、*Лвр*系統の写本で脱落が起こったのだろう。

26) 「哲人」(философъ)はギリシア語 φιλόσοφος の音訳語で「智を愛する者」すなわち学識のある者を指しており、*ПВЛ*では聖キュリロス(コンスタンティノス)とメトディオスなどの学僧や宣教者などについてこの語が用いられており、ここでも正教の布教者として描かれている。

なお、*НК1*、*Н4*、*С1*、*Твр*の後代の写本(シャフマトフ説では Владимирский полихрон 1423年に発する諸年代記)では、пришлаша греци... Кирила философа. と「キリル」という哲人の人名が記されている。これは二次的な読みだが(シャフマトフは最古の資料(древнейший временник / свод)にあった人名を Владимирский полихрон が探してきて復活させたと考えている [Шахматов 2003 (1908): С. 299–300])、聖キュリロス(コンスタンティノス)が含意されている可能性がある。

27) 人間の罪ゆえに神はソドムとゴモラの町の上に硫黄の火を降らせて滅ぼした物語は、旧約『創世記』19:24–25を参照。

仰] から少し道を外れています<sup>28)</sup>。かれらはオプラトク (оплатькы) と呼んでいる種なしパン (опрѣсники) で奉事していますが<sup>29)</sup>、神はそのようなものを与えたわけではありません。[神は] [種あり] パン (хлѣб) で奉事するように命じたのです<sup>30)</sup>。そして、使徒たちに与えたのです。そして、パンを取ってこう言いました。『これはあなたたちのために割かれた、わたしの体である<sup>31)</sup>』。また [神は] 杯を取って、言いました。『これは新しい契約のわたしの血である<sup>32)</sup>』。これらの者たちはそのようにせず、信仰を正さなかったのです<sup>33)</sup>。

ウラジーミル [06] は言った。「わたしのもとに、ユダヤ人がやって来て言った。〈ドイツ人とギリシア人はわれらが磔にした者を信じている〉と」。哲人は言った。「本当にわれらはその人を信じています。預言者たちは神が生まれるであろうと予言していましたが、他〔の預言者たちは預言しました〕。〔神が〕 磔にされ、埋葬されて3日目に復活し、天に昇るだろうと。ある者たちは〔その〕 預言者たちを打ち殺し<sup>34)</sup>、他の預言者たちを木製のノコギリで裁断していました。これらの者の預言が実現したとき、〔神は〕 地上に降りて来て、磔を受け、復活し、天に昇りました。〔神は〕 これらの者に対して40と6年の間悔い改めるのを待っていましたが、〔かれらは〕 悔い改めませんでした。そこで〔神は〕 かれら〔ユダヤ人〕 を討つべくローマ人たちを遣わしました。〔ローマ人たちは〕 かれらの城市を打ち壊し、かれら自身を諸国に散らしました。そしてかれらは諸国で奴隷になっているのです」。

ウラジーミル [06] 言った。「それならば、神は何のために地上に降りて来てそのような苦し

28) ギッピウスによれば、以下の「種なしパン」についての発言は、ラテン信仰への戒めを語るウラジーミル公の信仰告白(2)[№99]の内容と関連している。そして、「少し道を外れている」(вѣра... малом.. развращна есть)の表現が内容的に不自然であることから、当初のテキストは малом.. раз(личьна)で「違いは少しだけである」という意味だったものが、この部分の反カトリック文脈にあわせて書き換えられたと考えている [Гиппиус 2008: С. 20]。

29) 「種なしパン」(опрѣсники) は旧約でユダヤ教の儀式で用いられる酵母を入れないで焼いたパン(現在のマッツァに相当)のことで、ギリシア語 τὰ ἄζυμα に対応する。福音書ではユダヤ教の祭り「除酵祭」(опресноцы)の文脈で使われている。「オプラトク」(оплаток; оплатькы)は、この「種なしパン」を指すラテン語の oblati (<offeri) がポーランド語 opiatek を経て伝わったもの [Попов 1875: С. 18]。

30) 最後の晩餐の場面では次注の福音書からの引用のように、イエスは「パン」(ἄρτος, хлѣб)を手にとっており、これが聖体礼儀で用いる聖パン(ホチオス)の原型になるが、通常この語は酵母で発酵させたパンを指しており、そのことが正教側にとっては自分たちの立場の正当性の論拠になっている。

31) 『ルカによる福音書』20:19からの改変された引用。

32) 『ルカによる福音書』20:20からの改変された引用。

33) パンをめぐるカトリックと正教との間の対立は、1053年から始まったコンスタンティノポリス総主教庁と教皇庁との間の論争と、翌年の相互破門によって表面化し、その後15世紀前半まで両派の論争の主要なテーマとなった。ここに語られている言説はこの11世紀半ばの東西教会分裂以降の正教の教義を反映しており、ウラジーミル時代の10世紀後半に語られたとは考えにくい。上注24の場合と同様に、KHCが成立した1095年頃の教会人の立場を述べたものではないか。

34) この箇所は、下注202[№93]の新約の物語の初めの部分と対応している。



みを受けたのか」。哲人は答えて言った。「もしも聞きたいのであれば、何のために神が地上に降りて来たのかについて、わたしはあなたに初めから語りましょう」。かれは言った。「喜んで聞こう」。たちまち<sup>35)</sup> 哲人は次のように語り始めた。

**【哲人の言葉 1<sup>36)</sup>：旧約による創世からイスラエル人受難までの物語】** [№ 90]

「まず最初に<sup>37)</sup>、神は天と地を創りました。一日目です。

二日目に天蓋 (твердь) を [創りました]。それは水の間にあったのです。[135] この同じ日に水が分れました。その [水の] 半分は天蓋の上にあがり、またその半分は天蓋の下に [ありました]。

三日目には、海と川、泉、種を創りました。

四日目に神は太陽、月、星を [創り]、天を飾りました<sup>38)</sup>。

天使の中の首座の者、大天使の位階の最高位の者<sup>39)</sup> が [これを] 見て心の中で考えて、こう言いました。〈地上に降りて地上をわが物にしよう。そうすればわたしは神に似た者になるだろう。そして北の雲の上に自分の王座を置こう〉。そこで [神は] たちまちかれ [天使] を天から追放しました。かれに続いて、第 10 の位階の天使であった者たちが落ちました。[神は] かれの代りの場所に最高位の者 [大天使] ミカエルを据えました。[この神の] 敵対者の名は

35) 「たちまち」(абис) は *Км* のみの固有読み。

36) これ以降、正教の哲人 (философ) がウラジーミル公に対して語る、旧約の歴史、預言者の言葉、新約の物語、教会史についての長い「哲人の言葉」(речь философа) が続く ([№90-94])。これは、前後の歴史物語の文脈から浮いており、不自然に長いことから、すでにあった年代記の物語 ([№ 86-89] と [№ 95-96]) の間に挿入されたことは明白である。また、キリスト教の歴史と教義の概説をここで示そうとした挿入者の意図も明白である。ただし、①これが、すでにまとまって存在していた歴史・教義的文献を利用したものか (全体として典拠となった文献は発見されていない)、それとも、年代記編者 (挿入者) が手元にあった聖書や歴史・教義文献を自ら選んで切り貼り編纂を行い、哲人が語った言葉としてここに挿入したものなのか (例えば、リヴォフ [Львов 1968: С 333-396] は前者の立場、シャフマトフ [Шахматов 1940: С. 123] やリハチョフは後者の立場である)、② この挿入が本年代記編纂のどの段階で、いつ行われたものなのか。以上二つの論点については諸論があり、いまだに定説はない。以下の注釈ではそれぞれの記述の直接の典拠が想定できる箇所はそれを示し、典拠の特定が難しい部分については、聖書 (旧約・新約) や教義書の大まかな対応箇所を示した。

37) 「まず最初に」(в начале исперва) の句以下、*Бр* は下注 68 の箇所まで、*Ак*、*Тл* は下注 79 の箇所まではテキストが欠落している。*Ак* では 18 об. が終わり、次から冊子料紙の破損のために 1～2 丁分のテキストが欠落している。*Бр*、*Тл* も同じ部分のテキストが欠落しているが、写本では в начале исперва Богъ человекм рекл... と欠落部分の継ぎ目が見分らないように書かれている。

38) 創世の最初(一日目)から四日目までの記述内容は『創世記』1:1-19 に対応している。文言としては『ギリシア・ローマ年代記』の叙述に近い [ЛЕР 1999: С. 3]。

39) 「大天使の位階の」(чину архангельску) (*Км*, *Тр*) は、*Ип*、*Лер*、*НК1* では「天使の位階の」(чину ангельску) となっており、内容的には後者が「正しい」読みである。

サタナイル (Сатанаиль) でした<sup>40)</sup>。かれは自分の企みの当てが外れ、最初の栄光を失って神の敵対者と呼ばれているのです。

この後、五日目に、主は鯨、魚、地を這うもの、羽のある鳥を創りました。

六日目に神は獣、家畜、地を這うもの<sup>41)</sup>を創り、人間も創りました。

七日目には神は自分の仕事を休みました。それが安息日 (субота) です。

神はエデンの東に楽園を作り、創った人間を置きました<sup>42)</sup>。そしてかれに戒めを与えたのです。あらゆる樹から〔実を〕食べてもよいが、ただ一本の樹からは食べてはならないと。それは善と悪とを理解するものなのです。

楽園にアダム (Адам) がおり、かれは神を見て、〔神を〕讃えていました。天使たちが神を讃えていたとき、かれもまたかれらとともに神を讃えていました<sup>43)</sup>。

神はアダムの上に眠りを置いて、そしてアダムは眠りました。すると、神はアダムから一本の肋骨を取り、かれのために助け手である<sup>44)</sup>女を創って、かの女をアダムのところに連れてきました。アダムはこう言いました。〈見よ。この骨はわたしの骨からであり、肉はわたしの肉からである。これは女と呼ばれる〉<sup>45)</sup>。

アダムは獣と鳥と地を這うものに名をつけ<sup>46)</sup>、一人の天使がかれら二人にも名を告げました<sup>47)</sup>。神は家畜と獣と鳥をアダムに従わせ、〔アダムは〕これらを支配し、〔これらは〕かれの言うことに聴き従っていました。

神が人間を尊んだことを悪魔が見て、かれのことを妬むと、蛇に姿を変えてエバ (Евѡга) のもとにやって来て、かの女にこう言いました。〈なぜお前たち二人は、楽園の真中にある樹から〔実を取って〕食べないのか〉。エバは蛇に言いました。〈神はわたしたちにこのように戒めたのです。『あらゆる樹から〔実を〕食べてよいが、楽園の真中にある〔樹は〕そこから食べてはならない。もし食べたりましたら、お前たち二人は死ぬであろう』〉。たちまち蛇はこう〔言っ

---

40) 「かれの代り (...) ミカエルを据えました」と「敵対者の名はサタナイルでした」の二つの文は *ПВЛ* では順番が入れ替わっている。

41) 「獣、家畜、地を這うもの」(звѣри и скоты и гады земныя) の創造は *Лвр* と同じくここでは 6 日目になっているが、*Ип* では 5 日目に創造されたことになっている。

42) この文は旧約『創世記』2:8 のほぼ正確なスラブ語訳に対応する。

43) この段落は聖書にはなく、『年代記編集旧約抄録 (パレヤ) 〔略本〕』(Краткая Хронографическая Палея) に対応する記述がある。

44) 「助け手」(помощница) は *Км* のみの読み。説明的補筆だろう。

45) この段落は『創世記』2:18, 2:23 の記述を再編集したものだ。

46) 『創世記』2:20 に対応する。

47) 天使がアダムとエバを名付けたことについては『ゲオルギオス・モナコス (ハマルトロス) 年代記』スラブ訳 (Хроника Георгия Армагола) の冒頭に記されている。聖書では『創世記』2:6 で神によるアダムの名付けが、3:20 でアダムによるエバの名付について書かれており符合しない。

て] 欺きました。〈神はこの日に見たのだ。その日に二人は自分から離れて、お前たちの眼が開かれ、お前たちは神のようになって、善と悪を理解するだろうことを〉。女は樹〔の実が〕食べごろであるのを見て、手に取るとこれを食べ、自分の夫に与えて、二人は食べました。二人の眼が開き、二人が裸であることを理解しました。そして、イチヂクの葉を編んで、[136] 覆うものを作りました<sup>48)</sup>。

神は言いました。〈お前の所業によって大地は呪われた。自分の生涯のすべての日々を悲しみのうちに食べねばならない<sup>49)</sup>〉。神は言いました。〈お前たち二人が手を差し延べて生命の木から取れば、永遠に生きるおそれがある<sup>50)</sup>〉。[そこで] 主なる神はアダムを楽園より追放し、[アダムは] 楽園の向いに住みました。かれは泣き号泣し、大地を耕しました<sup>51)</sup>。主なる神は大地を呪い、サタンは大地の呪われたことを喜んだのです。これは、われらにとって最初の喪失、辛い答えであり、天使の生の喪失なのです。

アダムはカイン (Каин) とアベル (Авель) を生みました。カインは農夫 (рабаи) で、アベルは牧夫 (пастухъ) でした。カインは大地の収穫を神のもとに持って来ましたが、神はかれの供え物を受け取りませんでした。ところがアベルが仔羊の初子を持って来ると、神はアベルの供え物を受け取りました<sup>52)</sup>。

サタンは、カインの中に入り込み、カインをそそのかし、アベルを殺しました。カインはアベルに言いました。「二人で野原に行こう」。アベルはかれの言うことを聞きました。かれらが野に出たとき、カインはたちまち立ち向かってかれを殺そうとしましたが、かれをどうして殺したらいいか判りませんでした。サタンは言いました。「石を取って、アベルを打て」。そして[カインは] かれ[アベル] を殺しました。

神はカインに言いました。「お前の弟はどこにいるのか」。かれは言いました。「わたしは自分の弟の番人でしょうか」。神は言いました。「見よ、お前の弟の血がわたしに向かって叫んでいる。お前は自分の生命の終りまで呻き慄くだろう」<sup>53)</sup>。

48) この段落の蛇によるエバの誘惑と二人が知恵の実を食べる筋は『創世記』3:1-7に対応している。

49) 『創世記』3:17に対応する。

50) 『創世記』3:22に対応する。

51) 楽園追放については『創世記』3:23に対応する。ただし、アダムが「楽園の向かいに住み、泣き号泣する」(съде прямо раю, плачяся и рыдая) ことについては聖書にない。キリスト導入最初期にルーシにもたらされていた『三歌斎経』(Триодъ постная) という典礼書に記されている 乾酪断ちの主日 (неделя сыропустная) 朝課祈祷の第6賛歌 (слава 6-го гласа) の冒頭に Седе Адам прямо раю и своєю наготы рыдая, плакаше という詩句があり、これを借用したことは明らかである。このアダムの「泣き」のモチーフは人気があったらしくロシアではフォークロアで発展した [Сасельева 1985: С. 165-166]。パレヤなど「哲人の言葉」の主要な典拠にはこのモチーフはない。

52) この段落のアベルとカインの対比の記述は『創世記』4:2-5に対応する。

53) この段落の神とカインの会話は『創世記』4:9-11に対応しほとんど引用に近い。

アダムとエバはひどく泣きました。だが悪魔(дьяволъ)は喜んで言いました。「見よ、神はかれ〔アダム〕を創って尊んだ。わしはかれを神から離れるように為した。見よ、今、わしはかれに嘆きを見つけてやったのだ」<sup>54)</sup>。

二人〔アダムとエバ〕はアベルのことを1年<sup>55)</sup>の間泣いて過しました。かれの身体は腐らず、二人はかれを葬れませんでした。そこで神の命令によって2羽の鳥が飛んで来て、そのうち1羽が死ぬと他の1羽が穴を掘り、死んだ〔鳥〕をなかに入れて、それを埋葬しました。アダムとエバはこれを見て穴を掘ってアベルを入れ、泣きながら埋葬しました<sup>56)</sup>。

アダムが230歳のとき<sup>57)</sup>、セト(Сиф)と二人の娘を生みました。その一人をカインが娶り、もう一人をセトが娶りました。

これらの者たちから人間たちが地上に産み出され増えたのです。かれらは自分たちを創ったお方を知らず、淫行とあらゆる汚らわしい<sup>58)</sup>こと、殺人と妬みに満たされていました<sup>59)</sup>。

人間たちは家畜のように生きていましたが、この氏族の中にあつてノアは一人義なる者で、セム(Сим)、ハム(Хам)、ヤフェト(Иафет)の三人の息子を生まれました。主なる神は言いました。「わたしの霊はこのような人間たちの中にはとどまるべきではない」<sup>60)</sup>。そして言いました「わたしは人間から家畜に至るまで滅ぼそう」。

主なる神はノアにこう言いました。「箱舟を造れ。それは長さ300ロコチ(лакот)、幅は50〔ロコチ〕、高さ30ロコチである」。エジプト人はサージェン(сажень)のことをロコチと呼んでい

---

54) この段落の喜ぶ悪魔とその言葉は聖書にはなく、『註解旧約抄録(パレヤ)』(Палея Толковая)に対応の記述がある。

55) ПВЛ, НКI は30年になっており、原拠が想定される『註解旧約抄録(パレヤ)』にも「30年」とあることからこれが本来で、「1年」は HI-M 写本伝播段階での誤写によるものだろう。

56) この段落のアダムとエバの嘆きとアベルの埋葬の物語は聖書にはないが、『註解旧約抄録(パレヤ)』に対応の記述がある。

57) 聖書(『創世記』5:3)ではアダムは130歳のときにセトを生んでいる。230歳の年齢は『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕』や『ゲオルギオス・モナコス(ハマルトロス)年代記』に見出すことができる。

58) 「汚らわしい」(скарденья)は *Ип* にはあるが *Лер* にはない。

59) この段落の記述は聖書にはなく、『註解旧約抄録(パレヤ)』に対応の記述がある。

60) この神の言葉は『創世記』6:3に対応する。聖書では「〈人は肉にすぎないのだから〉こうして人の一生は120歳になった」と、異なった文脈でこの文言があらわれる。

た<sup>61)</sup>のです<sup>62)</sup>。

100年をかけてノアは箱舟を造っているとき、ノアは〔人々に〕洪水が来ると言っていました。しかし〔人々は〕かれを嘲っていました<sup>63)</sup>。

かれが箱舟を造りあげたとき、主なる神はノアに言いました。「お前とお前の妻と息子たち、お前の嫁たちは箱舟に入れ。すべての家畜、すべての鳥、すべての地を這うものから、一つがいつづ連れて入れ」。そこでノアは、神がかれに戒めを与えた者たちを連れて入りました<sup>64)</sup>。

神は地上に洪水をもたらし、生き物を沈めましたが、箱舟は水の上に漂っていました。水が乾くと、ノアとかれの息子たち、かれの妻が〔外に〕出ました。この者たちから地上が産み殖えたのです<sup>65)</sup>。

人々は多く、言葉は一つでした。人々は互いにこのように言いました。「天にまで届く塔を造ろう」。かれらは再び建設を始めました。かれらの長老はニムロデ(Неврот)でした。神は言いました。「見よ、人間は増えた。しかしかれらの企ては空しい」。そして神は降りて来ると、[137] 72の民族に分けました<sup>66)</sup>。

アダムの言葉はアヴェル<sup>67)</sup>(Аверь)からは奪われませんでした。この者〔アヴェル〕はかれらの愚かしさに加わらず、こう言いました。<sup>68)</sup>「もし神が天に向かって塔を造るように人間たちに命じたとすれば、神は自らが言葉によって命じたでしょう。ちょうど天、地、海、すべての見えるもの見えないものを創ったように」と言ったからです。このことゆえに、その者の言葉〔民族〕は変ることはありませんでした。そして、この者〔アヴェル〕からヘブル人

61) ロコチ(лакоть; лакѣтъ, локоть, локѣтъ)はロシア語で文字通りは「肘」を意味し、伝統的に長さの単位として中指から肘までの長さ(いわゆる肘尺でおよそ50cm)として使われてきた。ただし、ここでは旧約聖書の πῆχυς(cubitus)(やはり肘尺の意味)の訳語として用いられている。他方サーゼン(сажень)は両手をいっばいに開いた長さ(尋に相当し150~200cm)を示す民間の単位。そのため「サーゼンのことをロコチと呼んでいた」は意味が通らないが、これを書いた者はロコチの意味が分からなかったために(ロシアでは類似のタタール語起源の単位アルシン аршинにとって代わられた)、誤った補足的な解説を加えたと考えられる。ただし、「エジプト人は～」の解説文は『註解旧約抄録(パレヤ)』に典拠がある。

62) 箱舟の記述は『創世記』6:15に対応する。

63) この段落の記述は聖書になく、『註解旧約抄録(パレヤ)』からとったと考えられる。

64) この段落は『創世記』6:18-19にほぼ対応する。

65) ノアと家族たちが箱舟から出る物語は『創世記』8章に詳しいが、この段落はこれを簡略的にパラフレーズしたものだらう。

66) バベルの塔の建設と崩壊の物語は『創世記』11章に書かれているが、ここでは、聖書に記述のない長老ニムロデや72の民族への拡散も含めて『註解旧約抄録(パレヤ)』等に拠って記述されている。

67) アヴェル(Аверь)の名は聖書に登場しない。『註解旧約抄録(パレヤ)』に由来した人物名である。

68) 上注37の箇所からこの箇所まで *Бр* はテキストが欠失。ただし続けて書かれている。

(сврѣи)が起こったのです<sup>69)</sup>。

〔人々は〕71の民族に分れ、国々に拡散しました。おのおのが自らの慣習を持つようになりました。ある者は悪魔の教えによって、林や泉や川に生贄を信仰しており<sup>70)</sup>、神を知りませんでした。

アダムから洪水まで2242年、また洪水から言葉〔民族〕が分れるまで529年。その後、悪魔がさらに大きな誘惑を人間たちの中に投げ込み、かれらは偶像(кумиры)を造り始めました。ある者は木の、ある者は銅の、他の者は大理石の、また別の者は金や銀の〔偶像です〕。かれらはそれらに礼拝し、自分の息子や娘たちを連れて来ては、それらの前で生贄にしていました。そして、地上はすべて汚されたのです<sup>71)</sup>。

偶像造りの長はセルグ(Серухъ)で、死んだ人間たちの名において、かつての皇帝たち、他の勇士たち、呪術師たちや、姦通の者たちの偶像を造っていました。さてセルグはテラ(Фара)を生み<sup>72)</sup>、テラは3人の息子、アブラハム(Аврам)とナホル(Нахор)とハラン(Аран)を生みました<sup>73)</sup>。テラは<sup>74)</sup>偶像を造りました。自分の父から習ったのです<sup>75)</sup>。

アブラハムは理性に目覚めて空を仰ぎ、星と天を見て<sup>76)</sup>言いました。「まことにこれこそが神だ。〔神が〕これを創ったのだ。わたしの父は人間たちを惑わしているだけだ」。アブラハムは言いました。「わたしの父の神々を試そう」。そしてアブラハムは言いました。「父よ、なぜあなたは木の偶像を造って人間たちを惑わしているのですか。天と地を創られたこれこそが神です」。アブラハムは火を取って神殿の偶像<sup>77)</sup>(кумиры)を焼き払いました。アブラハムの弟ハランはこれを見て偶像(идолы)のことを心配し、偶像を〔火から〕取り出そうとしたが、ハラ

69) この段落の記述は『世界年代記』(Хронограф)および『註解旧約抄録(パレヤ)』に拠っている。

70) 「信仰しており」(вѣроваша)はNI-Mの諸写本の読みで、ПВЛ、HKI、Тврはжряхуになっている。なお、「林や泉や川を信仰しており」(рощением вѣроваша (жряху) и кладяземъ и рѣкамъ)の表現は、[№2]の末尾の句 жруще озером и кладязем и рощениемъ ([ノヴゴロド第一年代記(1):注70)と類似しており、挿入者がこれを使ってこの個所に加筆した可能性がある。

71) この段落の記述は年代の換算も含めて『註解旧約抄録(パレヤ)』に拠っている。

72) 聖書によればテラはセルグの息子ではなく、ナホルの子になっている(『創世記』11:24)。「セルグがテラを生んだ」(Серух роди Фару)(全写本に共通)という記述はパレヤなどの主要典拠文献にもない。これは挿入者による誤記、もしくは「偶像崇拜を父から習った」(下注74, 75)を説明するための意図的な改変によって生じたものと思われる。

73) テラとその息子たちについては『創世記』11:26にある。

74) この「テラ」は典拠が想定される『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕』では主語が「ナホル(Нахор)」になっている。ただし、この文脈からは「テラ」のほうが分かりやすい。

75) この段落の記述は『註解旧約抄録(パレヤ)』に拠っている。

76) 「空を仰ぎ、星と天を見て」(взрѣвъ на небо и видѣ звѣзды и небо)の表現は、『申命記』4:19の偶像崇拜禁止の言葉からとっているようである。

77) 偶像(кумиры)はПВЛ並行記事ではидолыの語が使われている。

ンは自分がそこで焼けました。父より先に死んだのです。この者より以前には、このようなことはありませんでした。父より先に息子が死んだことがなく、父が息子より先に死んでいたのです。この時から、息子が父より先に死ぬようになったのです<sup>78)</sup>。

神はアブラハムを愛しており、神はアブラハムに言いました。「自分の土地から、自分の父の家から出て行け<sup>79)</sup>。[138] わたしがお前に示す土地に行け。そうすればわたしはお前を一つの大きな民族とし、地上の子孫はお前を祝福するだろう」。アブラハムは神がかれに与えた戒めの通りにしました。アブラハムは自分の甥のロト (Лот) を連れて[カナンの地へ行きました]。なぜならロトはかれの〔兄弟の〕妻の弟 (шуринь) で甥 (сыновець) だったからです。アブラハムが弟のハランの娘のサラ (Сарра) を娶ったからです。かれはカナンの地 (земля Хананъиска) の、高い檜の木のところによって来ました<sup>80)</sup>。神はアブラハムに言いました。「この地をお前の子孫に与えよう<sup>81)</sup>」。そこでアブラハムは神に拝礼しました<sup>82)</sup>。

アブラハムがハラン[の地]から (от Хараона) 出たときには、75歳でした。サラは不妊でした、不妊の病だったのです。サラはアブラハムに言いました。「わたしの侍女のもとに入りなさい」。そして、サラはハガル (Агарь) を取って、自分の夫に与えました。アブラハムはハガルのもとに入りました。ハガルは身ごもって息子を産み、アブラハムはこれをイシュマエル (Измаиль) と呼びました。イシュマエルが生まれたとき、アブラハムは、86歳でした。その後サラが身ごもって息子を産み、その名をイサク (Исак) と名づけました。神はアブラハムにその子を割礼するように命じ、アブラハムはこの子を8日目に割礼しました<sup>83)</sup>。

神はアブラハムとかれの種族 (племя) を愛し、かれらの自分の民の中に数え、かれらを他の民族 (язык) から区別して、〈自分の民〉と呼びました。このイサク (Исак) が成人したとき、アブラハムは175年を生き、そして死んで埋葬されました<sup>84)</sup>。

イサクが60歳を生きたととき、かれは二人の息子、エサウ (Исав) とヤコブ (Яков) を生まれました。エサウは狡猾でしたがヤコブは義しい人でした<sup>85)</sup>。このヤコブは、自分の母方の伯叔父 (ун) のもとで、かれの年下の娘を得ようと7年間仕えました。ラバカ (Лавань) はかの女をかれに

78) この段落のアブラハムの覚醒と偶像崇拜禁止の物語は聖書に記述はなく、『年代記編集旧約抄録 (パレヤ) [略本]』に対応の記述を見出すことができる。

79) 上注37の箇所からここまで Ак, Тп ではテキストが欠失している。

80) 『創世記』13:18に対応する。ただし、記述は『註解旧約抄録 (パレヤ)』に拠っている。

81) この神の言葉は『創世記』12:7に対応する。

82) この段落のアブラハム一家のカナンへの移住の物語は、『註解旧約抄録 (パレヤ)』に拠っている。

83) アブラハムの子イシュマルとイサクの誕生にかかわるこの段落の物語は『創世記』12:4以降に対応しているが、記述は『註解旧約抄録 (パレヤ)』に拠っている。

84) この段落の記述も『註解旧約抄録 (パレヤ)』に拠っている。

85) この文言は『創世記』25:27対応している。

与えずに、言いました。〈年上〔の娘〕を娶れ〉。〔ラバカは〕かれに年上の〔娘〕レア(Лѣя)を与えて、かれに言いました。〈さらに7年間わしに仕えよ。ラケル(Рахиль)を得たいなら〉。〔ヤコブは〕二人の姉妹を娶り、二人からの嫁資を得<sup>86)</sup>ました。かの女たちから8人の息子が生まれました。ルベン(Рувимъ)、シメオン(Семеонъ)、レビ(Левгия)、ユダ(Июда)、イサカル(Исахар)、ゼブルン(Заулон)、ヨセフ(Иосиф) [139] とベニヤミン(Вениамин)です。また二人の侍女からダン(Дан)、ナフタリ(Нафталим)、ガド(Гад)とアシエル(Асир)が生まれました。これらの者からユダヤ人が増えたのです<sup>87)</sup>。

ヤコブはエジプトに行きました。かれが130歳で、75人<sup>88)</sup>の人数でした。かれはエジプトで17年間生きて、亡くなりました。かれの種族(племя)は400年の間<sup>89)</sup>、奴隷として働きました<sup>90)</sup>。

これらの年月の後、ユダヤ人の人々は成長し、数が増えました<sup>91)</sup>。エジプト人は奴隷労働によってかれらに暴力を振りました<sup>92)</sup>。

## 【哲人の言葉2：モーセとイスラエル人の発展の物語】 [№ 91]

この頃ユダヤ人の間にモーセ(Моисей)が生まれました。エジプトの呪術師たちは皇帝に言いました。「ひとりの子供がユダヤ人たちの中に生まれました。その者はエジプトを滅ぼすでしょう」<sup>93)</sup>。

〔皇帝は〕直ちに生まれて来るユダヤの子供たちを川へ投げ込むよう命じました。モーセの母は〔子供が〕殺されることを恐れ、幼児を抱き上げて、籠の中に入れ、運んで池の中に置きました。この時ファラオの娘のフェルムフィ(Фермуфий)が水浴に下りて来て、泣いている子

---

86) 「二組の嫁資を」(и двѣ приданыи)は*Км*固有の読みで他の写本にはない。*Км*系列写本伝播過程での挿入だろう。

87) この段落のイサクの子供たちについての記述は、註解旧約抄録(パレヤ)』に拠っている。

88) *Н1-М*の写本はすべて75 душだが、*ПВЛ*では65 душとなっている。後者は『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕(КХП)のc нимъ душъ 60 и 5 [Водолазкин 2006: С. 911]を典拠としていることが想定され、*ПВЛ*の読みが本来的で、*Н1-М*はその改変(誤記?)と推定される。

89) この400年については、『ゲオルギオス・モナコス(ハマルトロス)年代記』からとられている可能性がある。

90) この段落の記述は、『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕』に対応している。

91) この文言は『創世記』47:27の句に非常に近い。

92) この記述は『出エジプト記』1:11-14の記述と内容的に対応している。

93) この呪術師たちの皇帝(ファラオ)への進言のモチーフは聖書にも『註解旧約抄録(パレヤ)』などの典拠文献(下注95)にもなく、聖書ではユダヤ人の子供たちの殺害の理由はイスラエル人(ユダヤ人)が増えて強くなり過ぎたこととされている。このモチーフはロシア人の挿入者(〈哲人の言葉〉の編者)が、*ПВЛ*のオレーグ[00]の死のエピソードなどを参照して書き加えたものか。



供を見つけ、抱き上げてかわいそうに思い、かれにモーセという名をつけました。以前の名はネメルヒヤ(Немелхия)だったのです<sup>94)</sup>。そしてかれを養育しました<sup>95)</sup>。

子供は美しい子でした。かれが4才になったので、ファラオの娘は自分の父のところに連れて来ました。ファラオはモーセを見てモーセが好きになりました。モーセは〔ファラオの〕首を掴み、皇帝の頭から帝冠を落としてそれを踏みつけました。一人の呪術師(волхвь)が〔これを〕見て、皇帝に言いました「おお、皇帝陛下、この子供を殺しなさい。もし殺さなければ、かれはエジプト全土を滅ぼすでしょう<sup>96)</sup>」。しかし皇帝はかれの言うことを聞かず、反対にユダヤ人の子供たちを打たないよう命じました<sup>97)</sup>。

モーセは成長し、ファラオの家で大いなる者(великъ)になりました。次の皇帝になると貴族たち(бояре)がかれを妬み始めました。モーセはユダヤ人を辱しめていたひとりのエジプト人を殺し、エジプトから逃げ、ミディアン(в землю Мадиямьску)にやって来て荒野を歩き回り、天使ガブリエル(аггел Гаурил)から全世界の成り立ちについて、最初の人間について、かれの後、洪水の後にあったことについて、言葉の混乱について、[140] 誰がどれだけの年月いたか、星の運行と数、土地の測り方やあらゆる知恵を学びました<sup>98)</sup>。

この後、神が燃えるイバラの中に現れ<sup>99)</sup>、かれに言いました。「わたしはエジプトでのわたしの民の災難を見たので、かれらをエジプト人の手から救い出し、この国からかれらを連れ出すために降りて来た<sup>100)</sup>。お前はエジプトの皇帝ファラオのもとに行き、かれに〔こう〕言え。〈イスラエル人(Исраиль)を行かせて下さい。かれらに三日の間、主なる神への犠牲を捧げさせて下さい〉<sup>101)</sup>。もし、皇帝がお前の言うことを聞かなければ、わたしはあらゆる奇蹟をもってか

94) この句は *Км* のみの固有の読みだが、典拠と想定される『註解旧約抄録(パレヤ)』にこの句がある。*Км* 系統の写本伝播過程で写字生(編者)が再度典拠を参照して書き足した可能性は低いことから、*Км* に本来の読みが残ったと考えるべきだろう。

95) この段落は内容的としては『出エジプト記』第2章に対応しているがファラオの娘の名やモーセのもとの名はない。これらは『註解旧約抄録(パレヤ)』に書かれており、直接にはこの文献に拠っている。

96) この呪術師の言葉は、[№6-2]のファラオの長老(старъишны)の言葉として語られている。次注に示した同じ典拠資料を参照したということか。

97) この段落のエピソードは聖書にはなく、『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕(Хронографическая Палея *КХП* БАН24.5.8)に並行的で類似の記述を見出すことができる。ただしここでは、帝冠をファラオ自身がモーセにかぶせたことになっており、本文の「呪術師」(волхв)は「神殿書記」(священнокнижник)になるなど、言葉遣いはかなり異なっている。なお、このモチーフはヨセフス・フラヴィウス『ユダヤ古代誌』第2書9章に非常に類似したものがある[ユダヤ古代史I:203-204頁]。

98) モーセの逃亡、放浪、ガブリエルから知恵を学んだモチーフは、前注と同様に『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕』にある。ただしこも言葉遣いはかなり異なっている。

99) 『出エジプト記』3:2に対応。

100) 『出エジプト記』3:8-10に対応。

101) 『出エジプト記』3:18に対応。

れを打とう<sup>102)</sup>」。

モーセは〔皇帝のところ〕やって来て、かれに言いました。皇帝は〔かれの〕言うことを聞きませんでした。神はファラオに10の罰を下しました。1. 血の川, 2. ヒキガエル, 3. ネズミ, 4. イヌバエ, 5. 家畜の死, 6. 燃えるような腫物, 7. 飢餓<sup>103)</sup>, 8. イナゴ, 9. 三日間の闇, 10. 人間の疫病, がこれです。10ヶ月の間ユダヤの子供たちが滅ぼされてきたので、かれらに10の罰があったのです<sup>104)</sup>。

エジプトに疫病が起ったので、ファラオはモーセと兄のアロンに言いました。「急いで立ち去れ<sup>105)</sup>」。そこでモーセはユダヤの人々を集めて、エジプトの地から出発しました<sup>106)</sup>。主は荒野を通過して紅海へ(къ Чермьному морю)とかれらを導き<sup>107)</sup>, 火の柱が、また日中には雲の〔柱〕がかれらの前を進みました<sup>108)</sup>。ファラオは人々が逃げるのを聞いてかれらを追い、かれらを海に追い詰めました<sup>109)</sup>。ユダヤ人は〔これを〕見て、モーセに不平を言いました。「あなたはどのようにしてわれらを死へと連れ出したのか」<sup>110)</sup>。そこでモーセは神に向かって叫びました。主は言いました。「なぜお前はわたしに向かって叫ぶのか。海を杖で打て<sup>111)</sup>」。モーセがそのようにすると水が12の道に<sup>112)</sup>分れたので、イスラエルの子らは海の中に入りました。ファラオは見てかれらを追いました。イスラエルの子らは海の間乾いた所を渡りました。かれらが岸に上がると、水はファラオとかれの軍兵を囲んで閉じました<sup>113)</sup>。

主なる神はイスラエル人を愛しました。かれらは海から3日間荒野を進み、マラ(Миронь)に着きました。その水が苦かったので[141]人々は神に向かって不平の声をあげました<sup>114)</sup>。主はかれらに1本の木を示し、モーセが水の中へ〔木を〕入れると、水が甘くなりました<sup>115)</sup>。

102) 『出エジプト記』3:19-20に対応。

103) 「飢餓」はHI-Mのすべての写本で, гладь が使われているが, *Ин, Лвр, НКI* では градъ (雹) になっており, 後者のほうが聖書の記述(次注)に合致している。HI-Mの読みは, 誤写による二次的な読みが, 意味的に自然であることから, そのままHI-Mに伝わったものだろう。

104) ここでは10の罰を数え上げているだけだが, 『出エジプト記』第7章~第11章に詳細な記述がある。

105) 『出エジプト記』12:31に対応。

106) 『出エジプト記』12:41に対応。

107) 『出エジプト記』13:18に対応。

108) 『出エジプト記』13:21に対応。

109) 『出エジプト記』14:5-9に対応。

110) 『出エジプト記』14:11に対応。

111) 『出エジプト記』14:15-16に対応。

112) на 12 пути (12の道)は*Км*の固有読みで明らかに誤記によるもの。他のHI-M写本と*ПВЛ, НКI*は на двое (二つに)となっており, これが本来の読み。

113) 『出エジプト記』14:21-29に対応。

114) 『出エジプト記』15:22-23に対応。

115) 『出エジプト記』15:25に対応。

この後再び〔人々は〕モーセとアロンに向かって不平の声をあげて言いました。「われらはエジプトにいた方が良かった。われらは肉、タマネギ、パンを腹いっぱい食べていたのに<sup>116)</sup>」。主はモーセに向かって言いました。「わたしはイスラエルの子らの不平の声(хухнание)を聞いた<sup>117)</sup>」。そして〔神は〕食べるためにマナをかれらに与えました<sup>118)</sup>。

この後〔神は〕シナイ山の上で(на горѣ Синаѣсти)かれらに律法を与えました<sup>119)</sup>。モーセが山上へ、神のところへと登ると、かれら〔イスラエル人〕は子牛の頭を鑄造して、あたかも神に対するように礼拝をしました<sup>120)</sup>。モーセはかれらを3千人斬り殺しました<sup>121)</sup>。

この後〔人々は〕再びモーセとアロンに向かって、「水がない」と言って不平の声をあげました。主はモーセに言いました。「杖で石を打て<sup>122)</sup>」。〔モーセは〕言いました。「いったいこれから水を出すことができるでしょうか」。主はモーセに対して怒りました。〔モーセが〕主を誉め讃えなかったからです。そのために、これらの不平のために、〔モーセは〕約束の地に入れませんでした<sup>123)</sup>。〔神は〕かれをネボの山<sup>124)</sup>(в гору Вамъску)の上に導き<sup>125)</sup>、かれに約束の地を示しました。モーセはその山の上で死にました<sup>126)</sup>。

それからヌンの子ヨシュア(Исус Навгинъ)が権力を取りました。この者は〔行って〕、約束の地に着き、カナンの種族(Хананѣиско племя)を打ち殺して、イスラエルの子らをかれらの代りに住まわせました<sup>127)</sup>。

ヨシュアが死ぬとユダ(Июда)がかれの代りに士師(судиа)になりました<sup>128)</sup>。他の士師は14人でしたが、かれらの時代に〔人々は〕かれらをエジプトから連れ出した神を忘れ<sup>129)</sup>、悪魔た

116) 『出エジプト記』16:3 に対応。

117) 『出エジプト記』16:11-12 に対応。

118) 『出エジプト記』16:9-36 に対応。

119) 『出エジプト記』19章～31章を参照。

120) 『出エジプト記』32:4 に対応。

121) 『出エジプト記』32:25-28 に対応。

122) 『民数記』20:2-9 に対応。

123) 『民数記』20:9-13 に対応。

124) モーセが死んだ山は гора Вамъска となっているが、聖書本来の語形は гора Нававъ(тò бросъ Наѡав)である。ただし、IIIでは взиди на гору Варимъ と訳されている。本文の読みは、Варимъ > Вамъ > Вамъска と縮約されたものか。

125) 『申命記』34:1 に対応。

126) 『申命記』34:5 に対応。

127) 『ヨシュア記』11:13 以下に対応。

128) ヨシュアの死については『士師記』2:8 に対応。聖書にはユダが士師になった記述はないが、ユダがヨシュアを継いだことについては『註解旧約抄録(パレヤ)』に記述があり、これを取りまとめたのだろう。

129) 『士師記』2:10 に対応。

ちに仕えるようになりました<sup>130)</sup>。神は怒って、[かれらを]異民族の掠奪に任せました<sup>131)</sup>。[人々が]後悔し始めたとき、神はかれらに慈悲を与えました。[神がかれらを]赦したとき、かれらは再び悪魔を祀って拝礼していました<sup>132)</sup>。

これらの人々の後、祭司エリ<sup>133)</sup> (Илии жрецъ) が<sup>134)</sup>、その後に預言者サムエル (Самонль) [があらわれました]<sup>135)</sup>。人々がサムエルに言いました。「われらに王 (цесарь) を置いて下さい」<sup>136)</sup>。主はイスラエル人に対して怒り、その上にサウル (Сауль) を置きました<sup>137)</sup>。しかしサウルが、主の法の中を歩むことを望まなかったので<sup>138)</sup>、主はエッサイの息子<sup>139)</sup> (сын Иосинь) ダビデ (Давыдь) を選び、イスラエル人の上に王として置きました<sup>140)</sup>。ダビデは神の意に適いました。主はこのダビデに約束しました。かれの種族から神が生まれることを<sup>141)</sup>。[ダビデは]初めて [142] 神の受肉を預言し、こう言いました。「わたしは明けの明星に先立って胎内からあなたを産んだ<sup>142)</sup>」。

この [ダビデは] 40年間王として統治して<sup>143)</sup> 死にました。かれの後にかれの息子ソロモンが王として統治し<sup>144)</sup> ました<sup>145)</sup>。かれは神殿を建て、それを至聖所 (Святая святых) と呼びました。かれは非常に賢明でしたが、最後には誤りを犯しました。40年の間王として統治して死にました。

130) 『士師記』 2:11-13 に対応。

131) 『士師記』 2:14 に対応。

132) 『士師記』 2:16-17, 19 に対応。

133) *ПВЛ* ではここに судяще Илии жрецъ (士師[裁判官]として裁いた)の語があるが、*Н1-М* にはない。

134) 『サムエル記上』 1:9, 4:18 に対応。

135) 『サムエル記上』 3:20, 7:17 に対応。

136) 『サムエル記上』 8:5 に対応。

137) 『サムエル記上』 9:1 に対応。

138) 『サムエル記上』 13章, 15章, 28章の内容を踏まえている。

139) 「エッサイの息子」(сын Иосинь) は *Км* の固有な読みで、この写本系統における挿入によるものか。なお、『使徒行伝』 13:22 に「エッサイの息子ダビデ」(Давид, сын Иессеов) の表現があり、これを参照したのかもしれない。

140) 『サムエル記下』 5:3 に対応。

141) 『サムエル記下』 7:12 に対応。

142) 『詩編』 109:3 (邦訳 110:3) からの引用。伝統的に『詩編』 109章はキリスト (メシア) の出現の予表と解釈されており、とくに「明星に先立って胎内からあなたを生んだ」(из чрева прежде денницы родих тя) の部分はキリストの受肉を預言するものとされていた。

143) *Н1-М* 全写本で「王として統治して」(царствова) だが、*ПВЛ*, *НК1* は пророчествова (預言した) になっている。後者は文意がごちなく、*Н1-М* の読みが本来のものと思われる。

144) 前注の箇所と同様に、*Н1-М* 全写本で царствова (王として統治して) だが、*Лвр* пророчествова, *Ип.* царствова и пророчествова, *НК1* при пророчество と読みが異なっている。前注との関連で考えると、やはり *Н1-М* の読みが本来ではないか。

145) 『列王記上』 1:35 に対応。

ソロモンの後にはかれの息子のレハブアム(Ровоамъ)が王となりました<sup>146)</sup>。この者の時代に王国(царство)は二つに分れました。ひとつはエルサレム(Иерусалимъ)のユダ(Жидовьско)の〔王国〕, もうひとつはサマリア(Самария)の〔王国〕です。サマリアではソロモンの奴隷(холопъ)だったヤロブアム(Еровамъ)が王になりました。かれは二つの黄金の牛を造り, ひとつをベテル(Вифиль)の丘の上に, もうひとつをダン(Енданъ)に据えて言いました。「これがお前の神である, イスラエルよ<sup>147)</sup>」。人々は拝礼を続け, 神を忘れました<sup>148)</sup>。

またエルサレムでも〔人々は〕神を忘れ始めて, バール神(Валь), すなわち戦いの神アレス(Арии)を拝礼し, 自分の父たちの神を忘れました<sup>149)</sup>。そこで神はかれらのもとに預言者たちを送るようになりました。預言者たちは, かれらが法に外れた行いをし, 偶像に仕えていることを告発し始めました<sup>150)</sup>。一方かれらは, 預言者たちに告発されると, かれらを打ち殺し始めました<sup>151)</sup>。

### 【哲人の言葉3：イスラエル人を非難する預言者たちの言葉】 [№ 92]<sup>152)</sup>

[№ 92-1]

神はイスラエル人に対して非常に怒り, こう言いました。〈わたしは, かれらを自分から排除し, わたしに聞き従う他の人々を呼び寄せよう。もしもかれらが罪を犯しても, かれらの法に外れた行いを問うことはしない〉。そして, 預言者たちを送り始め, かれらに言いました。〈預言せよ。ユダヤ人を排除し, 〔他の〕国々を呼び寄せることについて<sup>153)</sup>〉。

まず, ホセア(Осии)が預言を始めて, 言いました。『わたしはイスラエルの家の支配を終らせ, イスラエルの弓を壊すであろう。わたしは再びイスラエルの家に慈悲を与えることはなく, かれらを退けて拒むであろう』<sup>154)</sup>。神は言っている。『かれらは諸民族の間をさまようであ

146) 『列王記上』12:1-20 に対応。

147) 『列王記上』12:28-30 に対応。

148) この段落の王朝の交代についての記述は, 『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕』(КХІІ БАН24.5.8)に並行的な箇所を見出すことができる。

149) 『列王記下』17:7-20 に対応。

150) 『列王記下』17:13 に対応。

151) 物語の筋立ての流れとしては, ここから [№93] 冒頭の「以前にわたしが言いましたように」に繋がっている。そのため次の預言者たちの言葉が挿入であることが想定される(次注)。

152) 以下続く長い預言者たちの言葉 [№ 92] は, これまでの旧約の物語 [№ 90-91] とその後の新約の物語 [№93-94] の間に挿入された, やや異質な内容の部分である。ミヘエフはこの [№ 92] の部分を仮定的な「原初集成」(Киевский Начальный свод: КНС)が編纂された時点での二次的な挿入と考えている。

153) 『註解旧約抄録(パレヤ)』にダビデの預言として同じ表現があり, これから借用している。ただしその内容は『列王記下』21:10 および 21:14 に対応している。

154) 『ホセア書』1:4-6 に部分的に対応。

ろう』<sup>155)</sup>。

エレミヤ (Иеремъ) は言いました。『もしサムエルとモーセが〔わたしの前に〕現われても、わたしはかれらの言うことを聞かないだろう』<sup>156)</sup>。さらにまたエレミヤは言いました。『主なる神はこう言っている。〈見よ、わたしはわたしの大きな名にかけて誓った。わたしの名が今後どこかでユダヤ人の口によって唱えられることはないだろう〉<sup>157)</sup>』。

エゼキエル (Иезекииль) は言いました。『主 (Аданай Господь) はこう言っている。[143] 〈わたしはお前たちの残りの者をことごとく四方の風に散らす。なぜならお前たちは自分たちのあらゆる無作法によってわたしの聖所を汚したからである。わたしはお前を退け、再びお前に慈悲を与えないだろう<sup>158)</sup>』』。

マラキ (Малахиа) は言いました。『主はこう言っている。〈すでにわたしにはお前たちに対する好意はない<sup>159)</sup>。なぜなら日の出る所から沈む所までわたしの名は諸民族の中で讃えられ、あらゆる場所において、わたしの名に対して香炉と清い生贄が捧げられているからであり、わたしの名は諸民族の中で大いなるものだからである<sup>160)</sup>〉〈このためにわたしは、お前たちが侮られ、すべての民の中に入らされるようにしよう<sup>161)</sup>』』。

偉大なイザヤ (Исаи же великий) は言いました。『主はこう言っている。〈わたしは自分の手をお前の上に差し延べ、お前を腐らせ、お前を分散させ、お前を再び連れて来ないだろう<sup>162)</sup>』』。またかれ〔イザヤ〕は言いました。『〈お前たちの義人たち<sup>163)</sup>とお前たちの新月祭をわたしは憎んだ。わたしはお前たちの安息日を受け入れないだろう<sup>164)</sup>』』。

預言者サムソン<sup>165)</sup> (Самсонъ) は言いました。〈主の言葉を聞きなさい。わたしはお前たちの

155) 『ホセア書』9:17に対応。ただし、この部分のホセアの預言句は、『ゲオルギオス・モナコス（ハマルトロス）年代記』スラブ訳の第9書10章からの引用である。

156) 『エレミヤ書』15:1に対応。

157) 『エレミヤ書』44:26 (LXX 訳 51:26) に対応。ただし、この句は『ゲオルギオス・モナコス（ハマルトロス）年代記』スラブ訳の第9書10章からの引用である。

158) 『エゼキエル書』5:10-11に対応。語句は典拠を組み替えている。

159) この箇所から *Ак, Бр* はテキストが欠失している。

160) 『マラキ書』1:10-11に対応。ただし、語句は組み替えられている。

161) 『マラキ書』2:9に内容的に対応。

162) 『イザヤ書』1:25に内容的に対応。

163) 「義人たち」(праведники) は *Ин, Лер, НI* では праздники (祭日) になっており、後者のほうが聖書に対応している (Isa 1:14 ...новомесячий ваших и праздников ваших ненавидит душа моя)。前者の読みは誤記が伝わったものだろう。

164) 『イザヤ書』1:14に意味的に対応。

165) *Ки* пророкъ же Самсонъ; *Ак, Бр.* 欠失; *Тр.* пророкъ же Самуил; *Ин, Лер, НКI* Амос же пророкъ。以下は『アモス書』からの引用であることから、「サムソン」(Самсонъ) と *НI-M* 諸写本の読みは二次的な改変によるもので、*Ин, Лер, НКI* に伝えられたものが本来だろう。

上に嘆きをもたらすだろう。イスラエルの家は倒れ、再び立ち上がることはない<sup>166)</sup>。

マラキは言いました。『主はこう言っている。〈わたしはお前たちに呪いを送り、お前たちの祝福を呪い、打ち砕く。お前たちのもとの〔祝福は〕ないだろう〉<sup>167)</sup>』。

こうして〔預言者たちは〕かれら〔イスラエル人〕を排斥することについて多くのことを預言しました。

[№ 92-2]

神はこれらの預言者たちに対して、かれら〔イスラエル人〕の代りに他の国々を呼び寄せることを預言するように命じました。

イザヤ(Исаия)は呼び始めて、こう言っています。『〈律法はわたしより出て、わたしの裁きは諸々の国民の光となる。わたしの義は速やかに近づき、出でて、国々はわたしの腕に頼る<sup>168)</sup>』。

エレミヤ(Иересья)は言いました。『主はこう言っている。〈わたしはユダの家と新しいわたしの契約を結び、律法をかれらが理解するようにし、かれらの心の上にも書こう。わたしはかれらの神となり、かれらはわたしの民となるだろう<sup>169)</sup>』。

イザヤ(Исаия)は言いました。『〈古い〔契約〕は過ぎ去った。わたしは新しい〔契約〕を告げ知らせよう。告げるより前に、それはお前たちに示されている。神に新しい歌を唱え<sup>170)</sup>〔わたしに〕仕える者たちは新しい名で呼ばれ、それは全土において祝福される<sup>171)</sup>、〈わたしの家はすべての民の祈りの家と呼ばれる<sup>172)</sup>』。

同じくイザヤは言っています。『〈主はその聖なる腕をすべての民族の前に顕わし、地のすべての果てはわれらの神からの救いを見る<sup>173)</sup>』。

ダビデ(Давыдь)は言っています。『〈諸々の国民よ、主を誉め讃えよ。諸々の民よ、主を讃えよ<sup>174)</sup>』。

[№ 92-3]

神が新しい民をこのように愛して言いました。〈わたしは、自らかれらのところに降りて来て、

---

166) 『アモス書』 5:1 に対応。

167) 『マラキ書』 2:2 に対応。

168) 『イザヤ書』 51:4-5 に対応。

169) 『エレミヤ書』 31:31, 31:33 に対応。

170) 『イザヤ書』 42:9-10 に内容的に対応。

171) 『イザヤ書』 65:15-16 に対応。語句は組み替えられている。

172) 『イザヤ書』 56:7 に対応。ほぼ忠実な引用。

173) 『イザヤ書』 52:10 に対応。ほぼ忠実な引用。

174) 『詩編』 116:1 (邦訳 117:1) に対応。

肉体をもった人間として現われ、アダムの過ちのために苦しもう<sup>175)</sup>。そこで〔預言者たちは〕神の受肉について預言を始めました。

初めにダビデが言っています。『主はわたしの主人に言った。〈わたしの右の座につくがよい。わたしがお前の敵たちをお前の両足の足台とするまでは<sup>176)</sup>』。また、『主はわたしに言った。〈あなたはわたしの息子である。わたしは今日あなたを産んだ<sup>177)</sup>』。

イザヤは言いました。『〈使いでも天使でもなく、神が自ら [144] 来られてわたしたちを救われる<sup>178)</sup>〉と、また〈みどり子がわれらのために生れた。かれにはその肩の上に権力があり、〔かれの名は〕大きな光の天使と呼ばれる。かれの権力は偉大であり、かれの平和には限りが無い<sup>179)</sup>』。また、『〈見よ、乙女は胎内に身ごもり<sup>180)</sup>、〔息子を〕産む。人々はかれの名をインマヌエル (Еммануиль) と呼ぶ<sup>181)</sup>』。

ミカ (Михѣи) は言いました。『〈ベツレヘム (Вифлеомъ) よ。エフラタ (Ефроат) の家よ。果してあなたは幾千のユダ (иудовы) の中において力が無かつたらうか。イスラエルにおいてかれらの長上の者があなたの中から出るだろう。かれが出るのは古き日々から〔定まっている〕。これゆえに、産婦が子を産むときが至るまで、〔主は〕かれらを渡しおく。かれの兄弟の残った者たちは、イスラエルの子らのもとへ帰る<sup>182)</sup>』。

エレミヤは言いました。『〈〔この〕神はわれらのものであり、他〔の神〕はかれに比べられない。〔神は〕知識のあらゆる道を探し出し、自分の僕のヤコブ (Яков) にこれを与えた。この後〔神は〕地上に現われ、人間とともに暮らした<sup>183)</sup>』。また言いました。『〈かれは人間である。神であることを誰が知ろうか。かれは人間と同じように死ぬのだから<sup>184)</sup>』。

ゼカリヤ (Захарии) は言いました。『〈〔人々は〕わたしの子の言うことを聞いた<sup>185)</sup>。だからわ

175) この文言は聖書の言葉ではなく、神の受肉についての作者自身の言葉である。

176) 『詩編』109:1 (邦訳110:1) に対応。

177) 『詩編』2:7 に対応。

178) 『イザヤ書』63:9 (LXX 訳) に対応。

179) 『イザヤ書』9:6-7 に対応。

180) 「胎内に身ごもり」は *Км, Бр, Тр в чревѣ принимать; Ип, Лвр, НКІ в утробѣ зачат*(зачат). 典拠の『イザヤ書』は *Isa 7:14 ... се, дева во чреве зачат* だが、[№ 93] のマリアの懐胎については *зачать Слово божие уь утробѣ* (下注207) となっていることから、後者が本来の読みだった可能性が高い。

181) 『イザヤ書』7:14 に対応。

182) 『ミカ書』5:2-3 に対応。

183) 『バルク書』3:36-38 に対応。

184) 『バルク書』3:36-38 に対応。

185) 「聞いた」は、*Км, Бр, Тр послушая* (聞いた) (*Ак* はテキスト自体が欠失)。*Ип, Лвр, НКІ* は *не послушая* (聞かなかった) となっている。典拠 (次注) には *не* があるので、後者の「聞かなかった」が本来の読みだろう。



たしはかれらの言うことを聞くまい。そう主は言われた<sup>186)</sup>』。

ホセア(Осии)は言いました。『主はこう言っている。〈わたしの肉体はかれらから去ると<sup>187)</sup>』。

[№ 92-4]

〔預言者たちは〕この者の受難を預言して言いました。

例えばイザヤ(Исаия)は言いました。『〈かれらの魂は災いである。なぜならかれらは悪い相談を行い、義人を縛ろうと言ったからである<sup>188)</sup>』。かれ〔イザヤ〕はまた同じく言いました。『主はこう言った。〈わたしは抵抗もしないし反対もしない。<sup>189)</sup>そしてわたしは恥と唾から、わたしの顔を背けなかった<sup>190)</sup>』。

エレミヤ(Еремия)は言いました。『〈来なさい。われらは木をかれのパンの中に置こう。われらはかれの生命を地上から滅ぼそう<sup>191)</sup>』。

モーセ(Моиси)はかれが十字架につけられることについて言いました。『〈お前たちのまさに目の前にかかっている、お前たちの生命を見なさい<sup>192)</sup>』。

〔ダビデは言いました。』。『〈何のために民たちは騒ぎたてたのか<sup>193)</sup>』。

イザヤは言いました。『〈かれは羊のように生贄へと引かれた<sup>194)</sup>』。

エズラ(Ездра)は言いました。『〈神は祝福される。自分の両手を差し延べ、エルサレムを救った<sup>195)</sup>』。

[№ 92-5]

復活について〔預言者たちは〕言いました。

ダビデは言いました。『〈立って下さい、神よ。地を裁いて下さい。すべての国においてあなたが継承するでしょう<sup>196)</sup>』。また〔言いました〕『〈眠れる者が〔目覚める〕ように主は起き

---

186) 『ゼカリヤ書』 7:13 に対応。

187) 『ホセア書』 9:12 に対応。

188) 『イザヤ書』 3:9-10 に対応。

189) この部分に *Ип, Лвр, НК1* では Плещи (Хребеть) мои дах на раны, и ланитѣ мои на заушение (わたしはわたしの背中を打たせるようにさせた。またわたしの頬を打たせた) の文言がある。これは典拠にあることから、*HI-M* において脱落したのだろう。

190) 『イザヤ書』 5:5-6 に対応。

191) 『エレミヤ書』 11:19 に対応。

192) 『申命記』 28:66 に対応。

193) 『詩編』 2:1 に対応。

194) 『イザヤ書』 53:7 に対応。

195) 『エズラ記』 7:12-26 を参照。

196) 『詩編』 81:8 (邦訳 82:8) に対応。

られた<sup>197)</sup>』。また〔言いました〕『〈神が復活され、かれの敵が散るように〉<sup>198)</sup>』。更にまた言いました。『〈主なるわたしの神よ、復活して下さい。あなたの手が挙げられますように<sup>199)</sup>』。

イザヤは言いました。『〈あなたたちが異国と死の影へと歩むとき、光はあなたたちの上に輝く<sup>200)</sup>』。

ゼカリヤは言いました。『〈あなたは、あなたの契約の血のゆえに、自分の囚人たちを水の無い穴から解き放った<sup>201)</sup>』。

[№ 92-6]

そして、〔預言者たちは〕その者について多くのことを預言し、[145] それは全て実現したのです。]

ウラジーミル [06] は言った。「そのことはいつ起ったのか。それは実現したのか。あるいは、これはいま実現しようとしているのか。かれ〔哲人〕はかれ〔ウラジーミル〕に答えて言った。

#### 【哲人の言葉 4：新約の神の受肉とキリストの受難、復活、使徒の洗礼の物語】 [№ 93]

「以前に、すなわち神が受肉したとき、すべては実現しました。以前にわたしが言ったように<sup>202)</sup>、ユダヤ人たちが預言者たちを殺し、かれらの王たちが律法を犯していたので、〔神は〕かれらを略奪にまかせ、かれらの罪のためにかれらはアッシリア (Асурия) に捕虜として連れて行かれ<sup>203)</sup>、そこで 70 年間、奴隷として過したのです<sup>204)</sup>。その後かれらは自分の国に戻りましたが、かれらには王 (цесарь) がなく、異族のヘロデ (Ирод) の時まで祭司長によって支配されていました。そしてかれらは、この者〔ヘロデ〕に権力によって支配されていたのです。

この者が支配していたとき、5500 年に<sup>205)</sup>、ガブリエル (Гавриль) がダビデの子孫の処女マリ

---

197) 『詩編』 77:65 (邦訳 78:65) に対応。

198) 『詩編』 67:1 (邦訳 68:1) に対応。

199) 『詩編』 9:33 (邦訳 10:12) に対応。

200) 『イザヤ書』 9:2 に対応。

201) 『ゼカリヤ書』 9:11 に対応。

202) 上注 34 の部分と「預言者たちを殺し」の文言が同じであることから、この箇所を参照しているだろう。

203) ユダヤ人がアッシリアへ捕虜として連れていかれたことについては、『年代記編集旧約抄録 (パレヤ) [略本]』 (Краткая Хронографическая Палея) に対応する記述がある。

204) 「70 年間奴隷として過ごした」 (работаша тамо лѣт 70) は、『エレミヤ書』 25:11 の「この地は全く廃虚となり、人の驚くところとなる。これらの民はバビロンの王に 70 年の間仕える」の預言に対応している。

205) この年代については聖書に記述はないが、例えば『年代記編集旧約抄録 (パレヤ) [略本]』の В лѣто 5500 индикта 15 солнечнаго 2 средняго прѣста, а луна.... И родися Господь нашъ Исус Христос от Дѣвы Марія[Водолазкин 2014: С. 258] を参照。

ア (Мария) のいるナザレ (Назаретъ) に遣わされて、かの女に言いました。「慶べよ、喜ばしき女よ。主はあなたとともにある<sup>206)</sup>」。この言葉によって神の言葉を胎内に宿した<sup>207)</sup>〔女は〕息子を産み、かれの名をイエス (Иисусъ) と名づけました。すると呪術師 (волхвы) たちが東方からやって来て言いました。「ユダヤの王 (царь) はどこにいるのか。われらは東方にその方の星を見たので、かれを拝むために来た」<sup>208)</sup>。

ヘロデ王はこれ聞いて困惑し、エルサレム全体もかれとともに〔困惑したのです〕。〔ヘロデは〕律法学者と民の長老たちを呼び寄せ、〈キリストはどこで生れたのか〉と訊きました。かれらはかれに言いました。「ユダヤ人の〔土地〕ベツレヘム (Вифлеомъ жидовъстии) です」<sup>209)</sup>。ヘロデはこれ聞いて使者を遣って、言いました。「二歳までの子供を皆殺しにせよ」。〔使者たちは〕行って子供を皆殺しにしました<sup>210)</sup>。マリアは恐れて子供を隠しました。ヨセフはマリアとともに子供を連れてエジプトに逃れ、ヘロデの死まで〔そこに〕いました<sup>211)</sup>。エジプトで天使がヨセフに現われて言いました。「立って子供とその母を連れ、イスラエルの地へ行きなさい」。かれは帰って来てナザレに住みました<sup>212)</sup>。

かれが成長し 30 歳になると<sup>213)</sup>、〔146〕かれは奇跡を行い、天の国について宣べ伝え始めました。そして、12 人を選んでかれらを自分の弟子と呼びました。かれは不思議な奇蹟を行い始め、死んだ者を蘇らせ、癩を病んでいる者を清め、足萎えを歩ませ、盲人の目を開かせ、また他の多くの不思議な奇蹟を〔行い始めました〕<sup>214)</sup>。かつて預言者たちがかれについて預言して、こう言った通りでした。「そうすればわれらの病を治し、患いを引き受けて下さるだろう<sup>215)</sup>」。

〔キリストは〕ヨルダン川 (Иерданъ) でヨハネ (Иван) から洗礼を受け、新しい民にあらたまり (обновление) を示しました。かれが洗礼を受けると、見る間に天が開き、聖霊がかれの上に鳩の姿で降りて来て、声が言いました。〈これがわたしの愛する子である。わたしはかれの

206) 『ルカによる福音書』1:28 からの引用。ただし、聖書では *благодатная* (恵まれた女) だが、本文 (HI-M, ПВЛ も同じ) では *обрадованная* (喜ばしき女) になっている。

207) この表現については上注 180 を参照。

208) 『マタイによる福音書』2:1-2 に対応。

209) 『マタイによる福音書』2:3-5 に対応。

210) 『マタイによる福音書』2:16 に対応。

211) 『マタイによる福音書』2:14-15 に対応。

212) 『マタイによる福音書』2:19-23 に対応。

213) 『ルカによる福音書』3:23 に対応。

214) 『マタイによる福音書』10:1-8 に対応。

215) 『マタイによる福音書』8:17 からの引用で、この「預言者」はイザヤのこと。本文は、*ты недугы наша понесе и болѣзни наша исцѣли* だが、聖書テキストは *той недуги наша прият и болезни понесе*。言葉遣いと語順に異同がある。

ことを喜ぶ<sup>216)</sup>。

〔キリストは〕自分の弟子たちを派遣して天の国を宣べ伝え、罪を免れるために悔い改めるように宣べ伝えさせました。かれは預言を実現させようと思い、こう宣べ伝え始めました。「人の子は苦しみを受け、十字架につけられ、三日目に復活しなければならぬ<sup>217)</sup>」。

かれが集まりの中で教えていると、祭司長たち、律法学者たちは妬みで一杯になって、かれを殺そうと探していました。かれらはかれを捕え、総督ピラト(игѣмон Пилат)のもとに連れて来ました<sup>218)</sup>。ピラトは〔人々が〕かれを罪がないのに連れて来たことを知り、かれを赦そうとしました<sup>219)</sup>。かれらはかれ〔ピラトに〕言いました。「もしもあなたがこの者を赦すならば、王の友でいることはできないでしょう<sup>220)</sup>」。そこでピラトはかれを十字架につけるよう命じました。かれらは、されこうべの場所(мѣсто краниево)にイエスを連れて行き、そこでかれを十字架につけました<sup>221)</sup>。

第6刻から第9刻まで地上全体が闇になり、第9刻にイエスは息絶えました。聖所の幕は二つに裂け、死者たちの多くが生き返ったので<sup>222)</sup>、〔神は〕かれらに樂園へ行くことを命じました<sup>223)</sup>。

ユダヤの人々はかれを十字架から降ろしてかれを墓の中に置き、墓に封印をしました。そして、見張りを立て言いました。「そうでないとかれの弟子たちが盗み去るだろう<sup>224)</sup>」。

かれは3日目に復活しました。〔そして〕死人の中から復活して、弟子たちの前に現われ<sup>225)</sup>、かれらに言いました。「すべての民族の中へ行き、国々に教えをなし、父と子と聖霊の名によってかれらに洗礼を施せ<sup>226)</sup>」。〔かれは〕復活の後かれら〔弟子たち〕のもとに現われて、40日間かれらとともにいました。40日が終わったとき、かれはかれらにオリブ山へ(в гору Елеонскую)行くように命じ、そこでかれらに現われ、かれらを祝福し、かれらに言いました。

---

216) 『マタイによる福音書』3:16-17(『ルカによる福音書』3:22)に対応。

217) 『ルカによる福音書』9:22に対応。

218) 『マタイによる福音書』27:1-2に対応。

219) 『ルカによる福音書』23:14-20に対応。

220) 『ヨハネによる福音書』19:12に対応。

221) 『マタイによる福音書』27:26-44の要約。

222) 『マタイによる福音書』27:45-52の要約。

223) この文言は『マタイによる福音書』27:53「そして、イエスの復活の後、墓から出てきて、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」に対応しているが、言葉遣いはまったく異なる。挿入者(編者)の手による意識的な要約だろう。

224) 原文は да како украдут ученици его で『マタイによる福音書』27:64の да не како пришедше ученицы его нощию украдут его の下線部分の表現を組み替えたもの。

225) 『マタイによる福音書』第28章を内容を要約したもの。

226) このイエスの言葉は『マタイによる福音書』28:18に対応。

「エルサレムの城市にとどまれ。わたしが父の約束したものをお前たちのところへ<sup>227)</sup>送るまでは」<sup>228)</sup>。こう言うと、天に昇りました。かれらはかれに拝礼し、エルサレムに帰り、絶えず神殿にいました<sup>229)</sup>。50日が過ぎたとき<sup>230)</sup>、聖霊が使徒たちの上に降りました<sup>231)</sup>。[147]約束された聖霊を受け入れて<sup>232)</sup>、かれら〔弟子たち〕は世界中に散り、教えをなし、水によって洗礼を施しました<sup>233)</sup>」。

ウラジーミル [06] はかれ〔哲人〕に言った。「何のために〔神は〕女から生れ、木の上で十字架につけられ、水によって洗礼を受けたのか」。

かれ〔哲人〕はかれに言った。「このためです。すなわち、太初に人類が女によって罪を犯しました。悪魔がエバとアダムを<sup>234)</sup>誘惑したので樂園を失いました。そのため、神は悪魔に報復を与えました。悪魔には最初に女によって勝利がありました。女によって<sup>235)</sup>アダムが樂園から墮ちたからです。そこで神は女から肉体を得て、信じる者たちに樂園に入るように命じました。

また<sup>236)</sup>十字架につけられたことについては、このためです。木から〔実を〕食べたために〔人〕類は墮ちたからです。このために、神は木の上で苦しみを受けたのです。悪魔は木によって打ち負かされ、義人たちは生命の木から〔食べ物を〕受け取るのです。

また、水によるあらたまり<sup>237)</sup> (водою обновление) については、ノアの時代に人間たちの中に罪が増えたので、神が洪水を地上にもたらして、人間たちを水で沈めたからです。それゆえ神は言いました。〈わたしは人間たちをかれらの罪のために水で滅ぼしたので、今度は再び水によるあらたまりによって人間たちの罪を清めよう〉。なぜならユダヤの一族は海の中でエジプト人の悪い習慣から〔自らを〕清めたからです。水は太初からあったものですから。〔聖書は〕

227) *HI-M*の全写本と *HKI* には *пошло/насло вы* とあるが、*Лер, Ин.* は *послю* のみ。出典（次注）に *на вы* の語があり、*Хлб.* にも *послю отътование отца моего на вы* の読みがあることから、*HI-M* では *на вы* の *на* が脱落したものと考えたい。

228) 『ルカによる福音書』24:49 *и се, аз послю обетование отца моего на вы* に対応。

229) 『ルカによる福音書』24:51-53の文言からの抄録的な引用。

230) この句は『使徒行伝』2:1の引用。

231) 『使徒行伝』2:1-3に対応。

232) この句は『使徒行伝』2:33からの借用。

233) ここは上注226のイエスの言葉をそのまま繰り返している。ただし「水によって」(водою)が付加されており、これは下注237に述べられるように本文に特徴的な語である。

234) 原文は *прельсти Евгу и Адама; Ин, Лер прельсти Евгою Адама* になっている。

235) この箇所には *Ин, Лер* では *первое* (最初に)の語がある。

236) この箇所には *Лер* では *на дръве* (木の上で)の句がある。

237) 「水によるあらたまり」(водою обновление)の語句はこの部分で三回繰り返されており、洗礼(*крещение*)の意義を説明する本文の中心的な概念である。

こう言っています。〈神の霊は水の上を漂っていた<sup>238)</sup>〉。

今、〔聖〕霊と水によって洗礼を行っていることについては、<sup>239)</sup> ギデオン (Гедсонь) がこのように原型を示し<sup>240)</sup> ています。かれのもとに天使がやって来て<sup>241)</sup>、かれにミディアン人 (мидиамы) を攻めるように命じたとき、かれは神を試し、羊毛を穀物小屋の上に置いて、言いました。「もし、地上全体が乾いていても、羊毛には露があるだろう」。そして、羊毛を置くと、翌日、地上全体が乾いていたのに、羊毛には露があるのを見ました。また〔ギデオンは〕言いました。「さらに、わたしはわが神を試そう<sup>242)</sup>。もしもこの地上全体に露がおりたとしても羊毛の上は乾いているように」。そしてそのようになりました。見よ、〔ギデオンは〕原型を示した<sup>243)</sup> のです。すなわち以前には異国人には乾いた場所で、ユダヤ人は羊毛でした。その後になって、国々には露が〔もたらされ〕ました。これは、聖なる洗礼です。〔ところが〕ユダヤ人たちの上は乾いたのです。

預言者たちは宣べ伝えたのです。水によってあらたまりがなされることを。

#### 【哲人の言葉5：最後の審判についてと洗礼の勧め】 [№ 94]

使徒たちは世界中に神を信じるように教えていたので、われらギリシア人は〔これを〕受け入れました。そして、**全ての**世界はかれらの教えを信じています。

神はある日を定めました。〔神は〕その日に天からやって来て、生きている者にも死んでいる者にも裁きを下し、その行いに応じてそれぞれを報うでしょう<sup>244)</sup>。義しい者には天の国 (царство небесное) と言い難い美しさ<sup>245)</sup>、[148] 終りのない楽しみ (вселение) と永遠の不死が〔報われ〕、罪ある者には火の苦しみ、眠ることのないウジ虫、**外の暗闇**が〔報われ〕、その苦しみ

---

238) 『創世記』1:2からのそのままの引用。聖書では земля же бе невидима и неустроена, и тма верху бездны, и дух божий ношашеся верху воды.

239) この箇所は、*Лвр, НК1* では Преображение бысть первое водою (変容が最初に水によって行われました) の文言がある。これは、次注にあるような二次的な改変を受けて、いわば辻褃を合わせるために写本において挿入された文言だろう。

240) *Км, Бр, Тр, Ин* は Гедсонь прообрази (原型を示した) に対して *Лвр, НК1* は Гедсон преобрази (変容させた) になっている。内容的に判断して前者が本来の読みで、後者が二次的な改変だろう。

241) 以下のギデオンの物語は『士師記』第6章の後半に対応している。

242) この部分は *Н1-М* 全写本と *НК1* にあるが、*Ин, Лвр* にはない。この部分は『士師記』6:37-40の内容に正しく対応している (ギデオンは最初羊毛に露を置き地上を乾かすように神に頼み、次に反対に羊毛を乾かし地上に露を置くように頼んだ) ことから、前者が本来の読みで、*Ин, Лвр* において削除されたのだろう。

243) この「原型を示した」(прообрази) も上注 240 と全く同じ写本別の異読がある。

244) 『ローマ人への手紙』2:6 に対応。

245) 「言い難い美しさ」(красота неизреченая) の表現については下注 271 を参照。

には終りがありません。神であるわたしたちのイエス・キリストを信じない者には、このような苦しみがあるでしょう。洗礼を受けない者は火の中で苦しめられるでしょう」。

かれ〔哲人〕はこう言うと、ウラジーミル [06] に、主の裁きの場面が描かれている帳 (запона) を示した。かれ〔ウラジーミル〕の右手に、喜びのうちに楽園へ進んで行く義しい者たちがおり、また左手の罪びとには永遠の苦しみがあった<sup>246)</sup>。ウラジーミル [06] は、溜息をついて言った。「この右手の者たちは善きことだが、左手の者たちは悪きことだ」。かれ〔哲人〕は言った。「もしもあなたが義しい者たちとともに右手に立つことを望むなら、洗礼を受けなさい」<sup>247)</sup>。

ウラジーミル [06] は自分の心に思うところがあったので、こう言った。「もう暫く待とう」。すべての信仰を検証しようと望んだからである。ウラジーミル [06] はこの者〔哲人〕に多くの贈物を与え、大きな名誉もってかれを帰らせた<sup>248)</sup>。

## 【信仰検証の物語 1：イスラム、カトリック、正教の典礼検証のための使者の派遣】

[№ 95]

6495(987) 年

ウラジーミルは自分の貴族たち (бояры совя) と城市の長老たち (старца градъския)<sup>249)</sup> を呼び集めて、かれらに言った。「見よ、わたしのところにブルガール人が来て、〈われらの法を受け入れよ〉と言った。この後ドイツ人が来たが、かれらは自分たちの法を誉め讃えた。これらの者の後にユダヤ人がやって来た<sup>250)</sup>。

その後にギリシア人がやって来てすべての法を悪く言ったが、自分たちの法は誉めた<sup>251)</sup>。ま

246) 義人を右手に置き、罪びとを左手に置くことについては『マタイによる福音書』25:33 に対応している。

247) この段落の、君主がキリストへ改宗するきっかけとして、「最後の審判」の図像が示されるというモチーフは、865年にキリスト教に改宗したブルガリアの皇帝ボリス一世の逸話にもあり（『統テオファネス年代記』によればメトディオスというイコン画家が最後の審判を皇帝に描いて見せた）、シャフマトフは「哲人の言葉」のルーシ人の編者が、ボリス帝の洗礼に関する物語をブルガリアの年代記によって知っていた可能性を指摘している [Шахматов 2002 (1908): С. 117–118]。さらに、ベトルーヒンは、ウラジーミルと同世代でノヴゴロドに滞在したと伝えられる10世紀末のノルウェー王オーラヴ一世・トリグヴェソンのサガにも同様のモチーフがあることを指摘して、この時代の布教者たちが、終末論的な教説を広げていたことを重視している [Петрухин 2002: С. 87–88]。

248) 使者を帰国させるときの定型表現。下注 266 を参照。なお、この段落は年代記としての編纂の段階で記事の「つなぎ」として年代記編者が挿入したもののだろう。

249) 「貴族たち」(бояре) とキエフの「長老たち」(старцы) がウラジーミルの顧問団を形成していたことについては、983年記事 [№ 82] の [『ノヴゴロド第一年代記 (1) : 注 483] を参照。

250) この段落は [№ 86–88] のエピソードを指している。

251) この部分は [№ 89] のエピソードを指している。

た多くのことを語り、世界の初めから話をした<sup>252)</sup>。巧みに話をした。かれらの〔言うことを〕聞くのは奇しきことであり、誰にとっても好ましかった。

かれらは、第二の世(други свѣт)があることを物語った。〈もし誰かがわれらの信仰を信するなら、死んでも、再び生き返る。その者は永遠に死ぬことはない〉。もしもお前たちが、他の法に入るのなら、そのときにはあの世(оный свѣт)において火の中で焼ける。お前たちはどのように考えるか、どのように答えるか<sup>253)</sup>」。

すると貴族と長老たちは言った。「ご存じでしょう、公よ、誰もが自分のことは悪くは言わず誉めるものです。もしもあなたが様々に<sup>254)</sup>調べようと思うならば、自分の家臣がいるではありませんか。かれらを派遣して検証しなさい。それぞれの奉事について、誰がどのように神に仕えているのかについて」。〔この〕言葉は、公とすべての人にとって好ましいものだった。

〔貴族と長老たちは〕10人の数の賢明で思慮深い<sup>255)</sup>家臣を選び出し、こう言った。「ブルガール人のところに行き、かれらの信仰と奉事を検証せよ<sup>256)</sup>」。[149]かれら〔家臣たち〕は行って、到着すると、醜悪な所業とモスク(ропата)での礼拝を見て自分の国に帰って来た。ウラジーミル[06]は、かれらに言った。「今度は、ドイツ人のもとに行け。同じように観察して、そこからギリシア人のもとに行け」。

かれらは、ドイツ人のもとに着き、かれらの教会と奉事を観察した。そして、帝都(Царьград)に着いて皇帝<sup>257)</sup>のもと〔宮廷〕に入った。皇帝は言った。「かれらが何のために来たのか調べよ」。かれらは、あったことのすべてをかれ〔皇帝〕に物語った。皇帝はこれ聞いて喜び、すぐさまその日のうちにかれらに大きな名誉を施した。

翌日〔皇帝は〕総主教<sup>258)</sup>のもとに人を遣って、こう言った。「ルーシ人がわれらの信仰を検

---

252) この「多くのこと……世界の初めから」は[№90-93]の哲人の言葉を指している。

253) この段落の部分は[№94]の哲人の最後の審判の物語に内容的に対応している。

254) 「様々に調べる」(разно испытати)は*Км, Тр.*の読みだが、*Бр* *горазно испытати; Ин, Лер, НКI* *испытати гораздо* (詳しく調べる)になっている。おそらく、*Ин, Лер, НКI* ⇒ *Бр* ⇒ *Км, Тр* のように読みが変わったのではない。

255) 「賢明で思慮深い」(мудры и смысленѣ)は*Км, Бр, Тр, НКI*の読みで、*Ин, Лер*では*добры и смыслены* (身分が高く思慮深い)になっている。前者の句はポリャネ人やオリガの形容にも使われており、それに倣ったのかもしれない。

256) この命令の文言の*Лер*のテキストには*первое* (先ず)という語が二回使われているが、*НI-M*ではそれがない。

257) 下注の264, 265を参照。

258) この出来事が本年代記の年紀通りの6495(986/987)年のことであれば、このコンスタンティノポリス総主教はニコラオス2世(Νικόλαος Β΄ Χρυσοβέργης) (在位980-996年)を指している。



証するためにやって来た。教会の聖歌隊<sup>259)</sup>を準備して、あなた自身は主教の祭服を身に付けなさい。われらの神の栄光をかれらが見ることができるよう」。総主教はこれらのことを聞いて、聖歌隊を編成するように命じた。かれらは慣例に則って<sup>260)</sup>祝祭日の奉事を行い、香炉を焚いて、合唱隊に聖歌を唱わせた<sup>261)</sup>。〔皇帝は〕かれらとともに教会に行き、かれらを広々とした場所に導いて、教会の美しさ、〔聖歌の〕歌唱、主教奉神礼<sup>262)</sup>とそこに居並ぶ輔祭たちを見せ、かれらに自分たちの神への奉事<sup>263)</sup>について話した。かれらは〔そこであったことを〕理解し、驚いて、かれらの奉事を誉め讃えた。

二人の皇帝、バシレイオス<sup>264)</sup> (Василии)〔二世〕とコンスタンティノス<sup>265)</sup> (Константинъ)〔八世〕は、かれらと呼び寄せて、かれらに言った。「お前たちの国に帰れ」。そして、多くの贈物〔を与え〕、大いなる名誉をもってかれらを帰らせた<sup>266)</sup>。

### 【信仰検証の物語2：帰国した使者たちの報告】 [№ 96]

かれらが自分の国に到着したので、〔ウラジーミル〕公は自分の貴族たちと長老と呼び寄せた。ウラジーミル [06] は言った。「見よ、われらが派遣した家臣たちが帰って来た。かれらから起ったことを聞こう」。そして、〔ウラジーミルは〕言った。「従士たちの前で語れ」。

かれら〔使者の家臣たち〕は言った。「われらは先ずブルガール人のもとへ行き、モスクで

259) 「教会の聖歌隊」(церковный крилосъ)は *Км, Тр* の読みだが、*Бр, Ип, Лвр, НК1* では *церковь и крилосъ* (教会と聖歌隊) になっている。

260) 「慣例に則って」(по обычаю)とは、奉事規定(устав, τυλικόν)に記されている通りに、省略せず丁寧に奉事を行ったということ。

261) 「合唱隊に聖歌を唱わせた」(пѣння ликъ съставиша)は *Км, Бр, Тр, Ип* の読み、*Лвр, НК1* は *пѣння и лики съставиша* (聖歌と合唱隊を編成した) になっている。

262) 「主教奉神礼」(службы архиерѣискы)とは、主教(ここでは総主教)が主宰するもっとも格式の高い奉事のこと、大規模な聖歌隊と多数の輔祭を従えるのが通例だった。ここではおそらく、帝都の首座教会(ハギア・ソフィア聖堂)で行われた聖体礼儀(литургия)を見せたのだろう。

263) 「神への奉事」(служение Бога своего)は通常のスラブ語(下注 270 参照)では、служение Богу/к Богу となるが、生格を補語としている。ギリシア語的言い回し(例えば Η λατρεία του θεου αυτού のような)からの影響(гречи́зм)の可能性はある。

264) バシレイオス二世ブルガロクトノス(ブルガリア人殺し)は皇帝在位 963–1025 年。976 年以降実質的な政務をとった。その後のルーシのキリスト教化の一連の事件のビザンツ側の当事者である。

265) コンスタンティノス八世はバシレイオス帝(前注)の弟で、独立した皇帝となったのは兄の死後 1025–1028 年の期間だが、バシレイオスの統治期間も名目上は皇帝とされていた。

266) 使者を帰国させるときの定型表現(上注 248 参照)。年代記編者による「つなぎ」の表現である。

<sup>267)</sup> かれらが帯を締めず<sup>268)</sup> に立って拝礼している様子を見ました。座ると、狂ったようにあちこちを見回していました。かれらには楽しみがなく、悲しみとひどい悪臭があります。かれらの法はよくありません。

それからわれらはドイツ人のもとに着き、かれらの聖堂<sup>269)</sup> で奉事をしているのを見ましたがどのような美しさも見ませんでした。

それからわれらはギリシア人のもとに着きました。〔ギリシア人は〕自分たちの神への奉事をしているところ<sup>270)</sup> にわれらを連れて行きました。するとわれらは天上にいたのか、地上にいたのかわかりませんでした。地上にはこのような光景も美しさもなく、また話すこともできない<sup>271)</sup> からです。ただわれらが知っているのは、他の場所では<sup>272)</sup> 神は人々とともにあることです。かれらの奉事が〔150〕すべての国々にまさっています。われらはその美しさを忘れることができないのです。どんな人間であれ、もしも甘いものを食べたらその後では苦いものを受け入れません<sup>273)</sup>。そのようにわれらもここで生きることはできないのです。]

貴族たちは答えて言った。「もしもギリシアの法<sup>274)</sup> が悪かったならば<sup>275)</sup>、すべての人にまし

267) *НН-М* в *ропатѣ*; *Ип*, *Лер*, *НКІ* в *храмѣ* рекше в *ропатѣ*. 後者はいわゆる註解 (глосса) 表現になっているが、これは後代の挿入ではないか。

268) 「帯を締めず」(бес пояса) とは、ロシアでは帯を締めずに人前に出ることは罪とみなされ、とくに祈り、食事、睡眠のとき帯を締めないことは恥すべきとされていた慣習に関係している。例えば 17 世紀後半にロシアに滞在したサミュエル・コリンズは「男も女も天罰を恐れて帯なしで歩くことはしない」(Ни мужчины, ни женщины не ходят без поясов под страхом небесного наказания)[Коллинс 1997: С. 207] と証言している。

269) 「かれらの聖堂で」во храмѣ их は、*Ип* なし、*Лер* въ храмѣх многи と異読がある。

270) ここの原文は идеже служить Богу своему で補語は通常の与格になっている (上注 263 参照)。

271) 「美しさもなく、また話すこともできない」(красоты тоя недоумѣемъ бо сказати) の表現は、哲人が語ったという天国についての形容語「言い難い美しさ」красота неизреченная (上注 245) の表現と呼応している。全体として、ウラジーミルの正教受容に際しての「美しさ」(красота) の契機の強調は、年代記編集者のキリスト教観の大きな特徴である。

272) *Км*, *Тр* отинудь; *Бр* отнюдь これに対して、*Ип*, *Лер* оньдѣ; *НКІ* онудѣ. 後者のほうが本来の読みか。

273) この使者の言葉はことわざを起源としているだろう。現在のことわざにも、После сладкого не захочешь горького。[Рыбникова 1961: С. 119] のような類例を見出すことができる。

274) 「ギリシアの法」(законѣ грѣческ) とは、法規書『ノモカノン』(νομοκανόν; номоканон, スラブ語での通称 кормчая книга) (教会の運営、信徒の指導、教会裁判の法的な根拠となる教会法と世俗法を集成した書物で、スラブ語の翻訳は早い時代に普及した) に書かれているようなビザンツの市民・教会法を広く指している。

275) 「ギリシアの法が悪かったならば」(аще былихъ законѣ грѣческѣ.) の *лихьи* (лихой) については、辞書の項目では「劣悪な」(дурной, злой) という意味区分の中に例文があがっている [СДРЯ XI–XIV Т. 4: С. 409–410][СлРЯ XI–XVII Вып. 8: С. 249], 他に「余分な」「不必要な」という意味もある。文脈から判断すると、こちらの意味に解釈することも有力である [Колесов 2004: С. 68–69]

て賢明<sup>276)</sup> だったあなたの祖母オリガ (баба твоя... Олга) は、受け入れなかったでしょう<sup>277)</sup>」。

ウラジーミル [06] は答えて言った。「どこでわれらは洗礼を受けようか」。かれらは言った。「あなたの望む所で」。そして1年が過ぎた<sup>278)</sup>。

---

276) 「すべての人にまして賢明」(мудрѣиши всѣхъ человекъ) であるオリガ妃が「賢明」(мудрая) であったことについては、[№15, 37, 38] に繰り返し言及があり、貴族たちの言葉はこれを参照して書かれたのだろう。

277) オリガが「ギリシアの法」(上注 274) を受け入れたことについては、955 年記事 [№ 37] に、「〔総主教〕は教会法規 (церковный устав) を教えた」とある。

なお、この貴族たちの「答え」には問いにあたるものがなく、文脈からみて不自然であることから、次の段落 (次注) と同様に、この記事の編者による挿入と考えられる。

278) この「どこでわれらは洗礼を受けようか」(то гдѣ крещение приемем) のウラジーミルの問いと貴族の「あなたの好きところで」(гдѣ ти любо) の返答は、やや唐突で文脈から浮いているが、これは、次のケルソンでのウラジーミルの洗礼の物語 [№ 97] (「ケルソン伝説」) の末尾において、ウラジーミルが洗礼を受けた場所について編者 (年代記者) の時代に異説が存在したこと (下注 310, 311) と明らかに関連している。編者は、ケルソンで洗礼を受けることはウラジーミル自身の意思によることを強調するために、この箇所の問答を作文して挿入したのだろう ([栗生沢 2015: 351-352 頁] も参照。ただし、挿入した編者は「原初集成」(KHC) ではなく「ニーコン集成」(CH) の編者とすべきである)。また、「そして一年が過ぎた」の文言も、前後の記事を整合的につなげようと意図した編者の挿入表現である (たとえば [№ 15] の末尾の表現を参照)。

【ケルソン伝説1<sup>279)</sup>：ウラジーミルはケルソンを包囲・占領し、洗礼を受けて皇妹アンナを妻とする】[№97]

6496<sup>280)</sup> (988) 年

ウラジーミル [06] は、ギリシアの城市ケルソン<sup>281)</sup> (Корьсунь) に大規模な軍事力をもって<sup>282)</sup>

279) 988年の記事の、ウラジーミルのケルソンへの遠征、城市包囲と降伏、ウラジーミルと皇妹アンナとの結婚と洗礼の物語[№97]とケルソンからの帰国のエピソード[№100]は独立に一体のものとして編集された記事がここに分けて置かれた([№98-99]が挿入されたとも言える)ものであり、その内容と特徴的な文体から「ケルソン伝説」(Корсунская легенда)と呼ばれ、ルーシ洗礼についての貴重な史料として研究されている。

280) ウラジーミルのケルソン遠征の記事は6496(988)年の年紀のもとに置かれているが、修道士ヤコフの「聖なる洗礼[987年]から3年目[翌々年]」(下注310参照)という指摘や、ビザンツ、アラブ、アルメニア史料の記述[ロシア原初年代記1987:430-431頁(988年注2)]を総合して考えると989年の春～夏に行われたと考えるのが史実に近いだろう。

その経緯については概略次のような説が提起され通説となっている。皇帝バシレイオス二世が、バルダス・フォカスの反乱(987年9月以降)を抑えるために、ウラジーミルに援軍を要請し、見返りに妹のアンナを嫁がせることを約束した。その際、ウラジーミル自身とその国の洗礼が条件として示された。これを受けて988年春に6～7千人の兵が派遣され、989年4月のアビュドスの戦い反乱は鎮圧された。ところが、結婚の約束が実行されなかったために、ウラジーミルは989年の夏にルーシに近いケルソンを攻撃、占領して約束の履行を迫った。皇帝はやむなくウラジーミルの正式な洗礼と支配民の洗礼を条件に、アンナを説得して派遣した。[粟生沢2015:353][原初年代記1987:431頁(988年注2)][ハリス2018:220-221頁]。なお[粟生沢2015:357-383頁]に詳細な史料と研究の紹介がある。

なお、ウラジーミルはこの遠征の前にすでに洗礼を受けていたが(ヤコフの証言や「信仰の検証」の報告の年紀などから推察すると987年におそらくキエフで[下注310])、それは私的なかたちだったようであり、国家的、民衆的な広がりもたなかったのだろう(貴族や従士たちが信奉していた在来神の神殿はそのままであった)。「ケルソン伝説」記事の城市のレアリアを含む実見にもとづいた詳しい記述から見ても、国家的な意義を持たせたウラジーミルの洗礼はケルソンで989年に実際に行われたと考えるべきではないか。

これに対して、アンジェイ・ポッペは、987年夏にすでにビザンツ側の使節がキエフに到着し、援軍派遣、皇妹との結婚、ウラジーミルと支配民の洗礼について合意され、すでに988年1月には洗礼を受け(これがヤコフの証言に反映している)、アンナは988年夏にはキエフに到着して結婚した。ケルソン遠征も、反皇帝陣営についたケルソンへの懲罰のために使節からの要請にもとづいて行と考えている[粟生沢2015:375-381頁]。この説では、ウラジーミルのケルソンにおける洗礼の事実は否定されることになるが、「ケルソン伝説」の詳細な記述の信憑性を否定する根拠は示されていない[Porpe 1976: p. 197-244]。

281) 「ケルソン」(標準綴り Корсунь)は、クリミア半島の南西岸に位置するビザンツ帝国の植民都市。古代ギリシア語で「ケルソネソス」(Χερσονήσος)。現在は Херсонес Таврійський と呼ばれ、セヴァストポリ市中心から西に2kmほどのところに遺構がある。ウラジーミルの時代にはギリシア語で Χερσών (ヘルソン) と呼ばれており、Корсунь はその音訳。10世紀後半当時は「軍管区(テマ)」が置かれて帝都からの直接支配を受け、北方との交易の拠点として栄えていた。

282) 「大規模な軍事力をもって」(в силе велицъ) は КМ の固有読みで、他の НІ-М、ПВЛ 写本は с вои (軍兵を率いて) となっている。

進軍した<sup>283)</sup>。ケルソンの人々が城市に立て籠もったので、ウラジーミル [06] は、城市の対岸の入江に<sup>284)</sup>(в лименѣ)陣を布いた。城市から一射程<sup>285)</sup>の距離であった。市民は頑強に戦った<sup>286)</sup>。ウラジーミル [06] は城市を包囲した。城市の中の人々は疲弊してきた。

ウラジーミル [06] は市民に向かって言った。「もしもお前たちが降伏しないならば、われらはここで3年の間包囲するだろう」。かれら〔市民たち〕はその〔言葉を〕聞き入れなかった。

ウラジーミル [06] は、自分の軍兵の〔装備を〕を整え、城市に向かって土塁を盛りあげる<sup>287)</sup>よう命じた。この者たちが盛土をしていると、ケルソン人は、城壁の下を掘って〔トンネルを造り〕、盛り上げられた土を盗み出すと、それを自分たちの城市の中へ運んで、城市の真中に盛り上げた<sup>288)</sup>。〔ウラジーミルの〕軍兵たちは更に盛土をおこなっており、ウラジーミル [06] は包囲を続けていた。

すると見よ、アナスタシオス(Анастасъ)という名の、ひとりのケルソン人が矢を射た<sup>289)</sup>。かれは矢に次のように書いていた。「あなたの背後、東側から〔見たところに〕井戸があります。その〔井戸〕から導管で水が引かれています。掘ってそれを奪い取りなさい」。

ウラジーミル [06] は、これを聞き、天を仰いで言った。「もしもこれが実現したならば、わ

283) *ПВЛ* 971年の項に置かれているスヴァトスラフ [03] とビザンツ皇帝との約定書の中に、前者は「ギリシアの支配下にあるケルソンの支配地に侵入しない」旨の条項がある。

284) 「入江に」(в лименѣ)の лименѣ(лимень)はギリシア語の「入江、湾」を意味する ὀλιμίνη の音訳語。実際にケルソン城市の東側には、現在のセヴァストポリの市域との間を隔てる入江(Карантинна бухта)が存在する。

285) 「一射程」(стрѣльще, стрелище)は矢が届く長さのことでおよそ60～70mに相当する。なお、*Бр, Тл* では *поприще* (長さの単位で1kmを超える)になっているが、これはこれらの写本系列における改変によるものだろう。

286) *НІ-М* 全写本と *НКІ* で「市民は頑強に戦った」(боряху крѣпко граждане)であるのに対して、*Ил* は боряху крѣпко граждане с ними. Лвр боряху крѣпко из града と異読がある。*ПВЛ* の読みは内容から判断して、付加と改変による可能性が高い。

287) 「城市に向かって土塁を盛りあげる」(сыпати приспу ко граду)とは、城壁の脇に高い土盛りを築き、そこを拠点に城壁を乗り越えて侵入する攻城戦術のこと。

288) この土の上にケルソン占領の後に教会が建てられることについては、下注376, 377を参照。

289) この「アナスタシオス」(Анастас; 対応するギリシア語 Αναστάσιος)は、989年、996年、1018年の記事でも言及されており、キエフに来て、ウラジーミルの配下として十分の一聖母教会[№113](下注781)の管理者(おそらく司祭)になっている。かれはこの「ケルソン伝説」[№97]の記事のインフォーマントであった可能性が高い。なお、『聖ウラジーミル伝(特別版)』«Житие Владимирово особого состава» по БАН ОР, 33.9.9. (Плигинский сборник)には、ジベルン(Жьбернь, Ижберн)という名のヴァリヤグ人(вариженин)(初めは同調者(приятель)で、のちに貴族(боярин)で軍司令官(воевод)が矢文を射たと書かれており[Шахматов 2014: С. 316]、聖職者が矢を射るよりも合理であり、アナスタシオスが自賛のためにこのエピソードを自分のこととして改変した可能性がある(〔ロシア原初年代記 1987: 432頁(988年注5)〕も参照)。

たしは洗礼を受けよう」<sup>290)</sup>。

かれは、直ちに命じて、掘って導管を断ち切らせ、水を奪い取った。〔城市内の〕人々は水に渴えて疲弊し、降伏した。ウラジーミル [06] は城市に入城した。かれの従士たちも〔入城した〕。

ウラジーミル [06] は、二人の皇帝バシレイオス〔二世〕とコンスタンティノス<sup>291)</sup>〔八世〕に使者を遣って、こう言った。「見よ、わたしはあなたたちの栄光ある城市〔ケルソン〕を占領した。わたしはあなたたちが未婚である妹<sup>292)</sup>を持っていると聞いている。もしあなたたちがかの女をわたしに嫁がせないならば、わたしはあなたたちの城市〔コンスタンティノポリス〕に対して、この〔城市ケルソン〕にしたことをなすだろう」。[151] 皇帝たちは〔これを〕聞いて悲しんだ。

〔皇帝たちは〕ウラジーミルに通知〔の使者〕を遣って、こう言った。「異教徒(поганья)に嫁がせることはキリスト教徒にとって相応しくない。もし、あなたが洗礼を受けるならば、これを得るだろう。そして天の国を受け、われらと信仰を同じくするものとなるだろう。もしそうしたいと思わなければ、われらはあなたに自分たちの妹を嫁がせることはできない」。

ウラジーミル [06] はこれを聞いて、皇帝からの使者たちに言った。「皇帝たちにこう言え。〈わたしは洗礼を受けるだろう。この日々よりも前にわたしはあなたたちの法を検証し、あなたたちの信仰と奉事を気に入っている。このこと〔信仰と奉事〕については、われらが派遣した家臣たちがわしに物語った<sup>293)</sup>〉」。皇帝たちはこれを聞いて喜んだ。

〔皇帝たちは〕アンナ<sup>294)</sup> (Анна) という名の自分たちの妹に〔結婚することを〕懇請して、ウラジーミル [06] に使者を遣って言った。「洗礼を受けよ。そうすればわれらのあなたのもとに自分たちの妹を送ろう」。

ウラジーミル [06] は言った。「やって来て、わたしを洗礼せよ。わしはあなたたちの妹と信仰を同じくしたいと思う」。

この皇帝たちはこの言葉を聞き入れ、かれ〔ウラジーミル〕のもとに自分たちの妹アンナと

---

290) この段落のウラジーミルの動作と洗礼を受けることについての言葉は文脈から浮いており、「天を仰ぐ」(возреги на небо)動作は、[№ 102]のウラジーミルの祈りの描写にもあることから、この記事の編者による挿入と考えられる。

291) この二人のビザンツ皇帝については上注 264, 265 を参照。

292) この皇妹アンナについては下注 294 参照。

293) このウラジーミルの言葉は、上の「信仰検証の物語（使者派遣）」[№ 95-96]の内容を受けており、この物語の編集者が作文して、ウラジーミルの言葉として挿入したのだろう。

294) 「アンナ」(Анна, Άννα Πορφυρογέννητη) (963-1011年) はビザンツ皇帝ロマノス二世(在位 959-963年)の娘で、当時の皇帝バシレイオス二世の妹、コンスタンティノス八世にとっては姉にあたる。

或る高官たち<sup>295)</sup> (сановики нѣкыя) と司祭たち<sup>296)</sup> (прозвутеры) を派遣した。

かの女〔アンナ〕は行きたいと思わず、こう言った。「異教徒のもとには行きません<sup>297)</sup>。わたしはいっそこで死ぬ方がましです」<sup>298)</sup>。兄たちは、かの女に言った。「神がお前によってルーシの地を悔い改めさせ、一方、お前はギリシアの地を狂暴な奴隷状態<sup>299)</sup> から救うことになるのではないか。ルーシ人がギリシアにどれほどの悪を為したか<sup>300)</sup> を知っているだろう。今、もしお前が行かないなら、かれらはわれらに同じことを為すだろう」。そしてようやくかの女を強いて〔行かせた〕。

かの女〔アンナ〕は船<sup>301)</sup> (кубара) に乗り、自分の親類たち (ужики) に泣きながら接吻し、海を渡った。ケルソンに着くと、ケルソン人が城市から出て来た。かれらは岸にやって来ると、皇女 (цесария)<sup>302)</sup> に拝礼して、城市にかの女を導き入れて、宮殿に座らせた。

この時、ウラジーミル [06] は、は神の御心によって両眼を病み、何も見えずにひどく苦しんでいた。何をしたらいいか考えられなかった。皇女はかれのもとに使者を送って言った。「もしもこの病いから免れたいと望むなら、速やかに洗礼を受けなさい。さもなければ、[152] この〔病い〕を免れることはできません」。ウラジーミル [06] はこれを聞いて言った。「もしこれが真であるならば、キリスト教の神は真に偉大である」。そして、自分に洗礼を施すことを

295) 「或る高官たち」(сановики нѣкыя) は、ビザンツ帝国の行政組織の高官で、ギリシア語の ἄξιωματικοί におそらく相当する。この「或る」(нѣкыя) は、知られている人物たちだが名は書かないというニュアンス。

296) 「司祭たち」(прозвутеры) は、以下に使われているロシア語の попы (司祭たち) に相当するギリシア語 πρεσβύτερος の音訳語。

297) 「異教徒のもとには行きません」は次のような異読がある。Км, Бр НК1 яко въ поганья, рече, иду; Тр яко въ поганья, и рече, не иду; Ип. яко в поганья и рече им; Лвр яко в полонь, рече, иду。(捕虜になりに行くようなものです)。Лвр の読みは Км, Бр НК1 の読みが整合しないことからの改変だろう。ここでは、文脈としてもっとも自然な Тр の読みを採用した。

298) 結婚の提案に対してアンナが抵抗したことについては、アラブ史料(アブー・シュジャー)にも言及があり、事実を反映している可能性が高い [栗生沢 2015: 366-367 頁]。

299) 「狂暴な奴隷状態から」(от лютыя работы) は NI-M 全写本の読みだが、Ип, Лвр, НК1 は от лютыя рати (狂暴な戦争から) になっており異同がある。前者の句は、キリストへのコンダク の да всех нас искупити от лютыя работы вражия など祈祷文に見える言い回しであることから、前者はこれを反映した本来の読みで、後者はその改変だろう。

300) 「ルーシ人がギリシアに (...) 悪を為した」(русь сътвориша грѣкомъ зло) の言い回しは、860年のルーシ人の帝都襲撃 [№ 4] 及びイーゴリ [02] の帝都遠征 [№ 16] の記事にもまったく同じ表現があることから ([ノヴゴロド 第一年代記 (I): 注 77, 78, 141]), この二つの事件を指しており、また表現もこれらから借用しているだろう。

301) кубара は「船、外洋船」を意味するギリシア語 κουμπάρα (κουμπάρια) の音訳語。

302) цесария (皇女) は цѣсарица, царица とともに転記され、「皇后・皇妃」と「皇女」をともに意味するギリシア語 ἡ βασίλισς の翻訳語だろう。この語はオリガ妃の洗礼の記事 [№ 37] で、コンスタンティノス大帝の母「皇后ヘレナ」についても使われている。

命じた。

すぐにケルソンの主教は、司祭たちとともに<sup>303)</sup>に啓蒙を行って<sup>304)</sup>、ウラジーミル [06] を洗礼した。〔主教が〕かれに手を置くと、直ちに眼が見えるようになった<sup>305)</sup>。ウラジーミル [06] は、この突然の治癒を目の当たりにして、神を讃えて言った。「わたしは初めて真の神を見た」。かれの従士たちはこれを見て、多くの者が洗礼を受けた。

〔ウラジーミルは〕聖なるヴァシリスクの教会で<sup>306)</sup> (въ церкви святого Василиска) 洗礼を受

---

303) 「司祭たちとともに」(с попы)は *Н1-М* 全写本共通だが、*ПВЛ* 全写本では с попы царицины (皇女の〔連れてきた〕司祭たちとともに) になっている。これは、*ПВЛ* の読みが本来だったが、ケルソンの主教とコンスタンティノポリスからの外来の司祭たちを並べることが不自然なことから、*Н1-М* の段階で царицины が削除されたと考えるべきだろう。この不自然さは、すぐ上で прозвугеры になっていたものが попы と書かれていることでもいっそう強調されていることから、с попы царицины の句そのものが「ケルソン伝説」編集の段階で挿入された可能性が高い [Мюллер 2000: С. 69, прим. 24]。

304) 「啓蒙を行って」(огласивъ)とは、洗礼を受ける前の段階の人に正教の教義を教える「啓蒙」(оглашение)と呼ばれる儀礼をおこなうこと。ケルソンの主教がウラジーミルに対して行った「啓蒙」の内容については、この記事に続く [№ 98-99] で示されている (下注 312)。

305) この洗礼後に「目が見えるようになった」(прозрѣ)のモチーフは、かれによる洗礼がルーシの地を「啓蒙し〔光を与え〕」(просвѣтити)、かれの受洗が自ら「啓蒙される〔光を受ける〕」という文脈の、〈物質化〉されたエピソードになっている。同時に、『使徒言行録』第9章に描かれているサウロ〔使徒パウロ〕の視力回復と回心のエピソードが下敷きになっているだろう [Сендерович 1996: С. 301]。

306) このウラジーミルが洗礼を受けた場所は「教会で」(в церкви)までは写本に共通だが、その次は *Км*, *Бр* святого Васлиска; *Тр* святого Климента; *Ип*, *Хлб* святое Софьи; *Лер* святого Василья; *Рдз*, *Акд* святое Богородици; *НК1*, *Тер* святого Иакова さらに、*Устюжская летопись* は святого Спаса と異読が非常に多様である。

この理由について検討したベリャエフは、まず当時のビザンツの慣習では、洗礼は聖堂の中では行われず、主教首座聖堂に付設された建物（「洗礼所」баптистерия, крещальня）で行われていたことを指摘し、建物自体に名がないことから、その主教座聖堂（ウラジーミルは主教によって洗礼されている）を名指したと考えた。そして、これがバシリカ (basilica) 様式の大きな聖堂であることが史料にあることから（次注参照）、*Км*, *Бр* Василиска は Василика (<τὸ βασιλικόν) の歪形であり、これが、教会の通称として使われており、テキストにおける本来の呼び名であると推定した。その場合、святого は「バシリカ」を教会が奉獻された聖人の名と誤解した後代の編者による挿入になる。

そして、それぞれの異読の根拠を考察し、洗礼の10世紀末から記事成立の11世紀後半までの間に、首座教会の名称が変わった可能性の上に、Софьи と Богородици はともにケルソンにあった「ヴラケルナ聖母教会」を指し、Климент はこの殉教司教聖人の聖骸が首座教会に安置されていたことからきた（下注 373）教会の通称だったと推定している。さらに、Спас の由来については写本伝播過程での誤記の可能性も含め推定が難しく、Василья については、ウラジーミルがケルソンを去る際に建てた教会の名称が年代記記者によって流用されたと推定し、Иаков については、13世紀の『ザライスクのニコラ物語』でケルソンの聖ヤコフ教会がウラジーミルの洗礼場所とされていることから、この文献を参照したとしている [Беляев 2001: С. 55-60]。



けた。その教会<sup>307)</sup>はケルソンの城市の中の、ケルソン人が商いをしている、城市の中央の場所に建っている。ウラジーミル [06] の宮殿は、今日に至るまで<sup>308)</sup>教会のそばに建っている。また皇女の〔宮殿は〕〔教会の〕至聖所の裏手に今日に至るまでである。洗礼のあとで、〔ウラジーミルは〕皇女を結婚の儀式へと導いた<sup>309)</sup>。

真実を知らない者たちは、かれがキエフで洗礼を受けたと言い<sup>310)</sup>、また他の者はヴァシレフ<sup>311)</sup> (Василев) で〔洗礼を受けた〕と言っており、またその他の者たちは違うことを言っている。

307) 「その教会」(церкви та)については、ケルソン城市遺跡の北端に近いところで発掘された「ウヴァーロフ・バシリカ」(Уваровская базилика)と現在呼ばれている遺構が主教座聖堂だったと考えられている。この聖堂の南側に「洗礼所」(前注)があったことが発掘で確認されており、ここがウラジーミルの洗礼が行われた場所であることがほぼ通説になっている [Беляев 2001: С. 54-55]。

308) 「今日に至るまで」(до сего дни)と記事編纂(年代記への挿入)の時点から見たコメントを書き加えるのは、すぐあとに述べられる、ウラジーミルの洗礼場所についての異説の紹介の部分(下注 310, 311)とあわせて5箇所もあり、これは「ケルソン伝説」の編者の手法的な特徴である。

309) 「皇女を結婚の儀式へと導いた」(приведе псаларицю на брачение)は「結婚( брак)した」ということだが、あいまいで不自然な言い回し。そのためか、*Ип*では на обручение (聘定式へ)と具体的な婚約の儀式に言い換えている。

310) これは、修道士ヤコフの『ルーシ公のウラジーミルへの記念と称賛の詞』(Память и похвала Русскому Владимиру)に述べられている立場を指しており、そこでは、「聖なる洗礼後3年目にケルソン城市を占領した」[БЛДР Т. 1: С. 324]とされている。つまり、ケルソンへの遠征の時点ではすでにウラジーミルは洗礼を受けており、その場所はキエフであった可能性が高い(ただし私的なかたちだったと考えられる。上注 280 参照)。

ヤコフの記述では、ケルソンの「城市を占領して、キリスト教徒〔聖務者〕と司祭たちを連れ帰って、〔ルーシ〕全土にキリスト教の法を教えさせる」ことが遠征の目的であり、聖遺物や聖具を持ち帰ったのもその目的のためだった。また、アンナとの結婚の時と場所は明示されておらず、ケルソン占領記事のあとに、「その頃に」(въ ты дни)とあいまいな書き方をしており、ウラジーミルの求めに応じて、「より固くキリスト教の法にならうために、自分の妹を与え、多くの贈物を送り、聖骸を与えた」としている。これは、ケルソン占領とは別建てで書かれていることから、別の場所での出来事であることが推定され、その最大の候補はキエフということになる。

なお、洗礼の年については、ヤコフの記述には二か所に手がかりがあり、①「洗礼ののちウラジーミルは28年生きた」、②「兄ヤロボルクの殺害後10年目にウラジーミルは洗礼を受けた」と書かれている [БЛДР Т. 1: С. 324, 326]。①ではウラジーミル死去は1015年7月15日とあり、28年を差し引くと987年になる。また②ではウラジーミルの公座即位(ヤロボルク殺害の直後)が978年6月11日とあることから、当年を数えた10年目はやはり987年になる。このように二つの年代が一致することから、ヤコフは洗礼の年を987年とみなしていたことは間違いない ([栗生沢 2015: 358-360] も参照)。

311) 「ヴァシレフ」(Василев)はキエフから南西へ35kmほど離れた城市で、現在のヴァシリキウ(Васильків)市に相当する。992年記事のベルゴロド城砦 [№ 114]と同様にウラジーミルが南方からのベチェネグ人の襲来に対するキエフ防衛の拠点とするために、ストウグナ川河岸に建設したと考えられ、996年記事 [№ 118]にベチェネグ人のヴァシレフ攻撃が描かれていることから、996年の直前の時期に建設されたのだろう。この城市はウラジーミル聖公の洗礼名 Василий [БЛДР Т. 1: С. 319]に因んで命名されており [Литвина, Успенский 2006: С. 501-502]、その関連で聖公の洗礼の場所として巷間で伝えられただろうことが推定できる。

**【ウラジーミル公の信仰告白<sup>312)</sup> 1：ミカエル・シュンケロスの信仰叙述】** [№ 98]

ウラジーミル [06] が洗礼を受けると、かれにキリスト教の信仰を伝えてこう言った<sup>313)</sup>。「異端者の誰かがあなたを誘惑しないように。〔その時には〕次のように言って、〔異端者を〕信じではならない。

〈わたしは信じる、唯一の父なる神を、全能者にして、天と地の創造者を<sup>314)</sup>。わたしはこれを永遠に信じる<sup>315)</sup>〉。

また〔こう言いなさい〕<sup>316)</sup> わたしは信じる、生れないところの唯一の父を、生まれるところの唯一の子を、発出するところの唯一の聖霊を。三つの完全な、精神的であり (мыслена), 数によって分かれた位格 (собыство)<sup>317)</sup> を。それは、本来の位格において〔分かれたの〕であり、神格が〔分かれたの〕ではない。分かち難く分かれているのであり、混じり合わずして一体である。

父は父なる神で、永遠に在るものであり、〈父の位〉 (отчество) の中にあり、生まれないところのもので、始まりがなく (безначалнь), 万物にとっての始まり (начало) にして原因 (вина)

---

312) 「ウラジーミル公の信仰告白」と小見出しをつけた [№ 98-99] は、ウラジーミルがケルソンで洗礼を受ける際に予め受けた「啓蒙 (оглашение) (上注 304) の内容を叙述しており、事件の記述である [№ 97] と [№100] の記事の間に挿入されている。教義的文献という性格から考えて、「哲人の言葉」 [№ 90-94] と同じ挿入者だったと考えてよいだろう。

313) 上述の文脈から見ると、主語は示されていないが、「言った」 (глаголюще) のはケルソンの主教である (上注 304)。

314) ここまでは、「信経」 (символ веры) すなわち「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」の冒頭の文言 (第一条) からの引用。「信経」はキリスト教徒が何よりも信ずべき内容の要約であり、啓蒙者が最初に学ぶべき信条であることから、ここの冒頭に置かれたのだろう。

315) 「信経」 (前注) は基本的に「わたしは信じる」 (верую) 内容が9条にわたって列挙されているが、ここでは最後まで引用せずに、第2条以下は「これを」 (сию) とまとめて省略している。「信経」は教会の祈祷の中で頻繁に唱えられる文言であることから、全体を引用する必要はないと見なされたのだろう。

316) ここから下注 329 の箇所までは「信経」 (上注 314) と同様にウラジーミル公の信仰告白が記されているが、教義的な内容を述べる「信仰叙述」 (Изложение веры) (Исповедание, Орос と通称されることもある) と呼ばれる文章で、本文では「ミカエル・シュンケロスの信仰叙述」 (Изложение Михаила Синкелла Иерусалимского; Μιχαήλ συνκέλου Ἱεροσολύμων λίβελλος περὶ τοῦ ὀρθοδόξου πίστεως) のスラブ語訳を典拠としている。ミカエル (760 年頃～846 年) はエルサレムの修道士で、かれの「信仰叙述」のスラブ語訳は早い時期にルーシに伝播して広く読まれていた。ただし、本文は存在したスラブ語訳テキスト (例えば、「1073 年スヴァトスラブ文集」 (Изборник Святослава 1073 г.) にも含まれており [Похилько 2019: С. 26-30][Сухомлинов 1856: С. 65-68], 約 80 点の写本が確認されている) に手を加えて省略したもので、典拠としたであろうスラブ訳に比べて4割ほどに縮約されている (以下の注 321～328 を参照)。おそらくウラジーミル公一族に伝わったスラブ語訳を、年代記に挿入する際に編者が抜粋、簡略化して利用したと思われる。

317) собыство は ὑποστάσις の訳語で、現代なら位格 (persona) の意味の *лице* となるところ。ただし、テキストでは *лице* の語は προσώπον (顔) の訳語として使われている。

である。唯一生まれないことによって、子と聖霊よりも古い。かれ〔父〕からすべての世の前に子が生まれる。〔父から〕聖霊はまた時間もなく肉体もなく発出する。父はともにあり、子はともにあり、聖霊はともにある。

子は父に似た実体<sup>318)</sup> (подобосушень) であり、父とともに始まりなく<sup>319)</sup>、ただ生まれることによってのみ、父および聖霊と区別されている。

〔聖〕霊はいとも聖なるものである。父と子に似た実体であり、永遠に在る<sup>320)</sup> (присносущно)。

<sup>321)</sup> 父には〈父の位〉(отъцесво), 子には〈子の位〉(сыновьство), 聖霊には発出(исхождение)がある。父は子〔153〕あるいは聖霊を超える(преступаеть)ことなく、子は父あるいは〔聖〕霊を超えることなく、〔聖〕霊は子あるいは父を超えることはない。〔三つの格の〕本性(своиствия)は動くことがないからである。

<sup>322)</sup> 三つの神ではなく一つの神である。なぜなら、三つの顔(лицы)において一つの神格であるのだから。

<sup>323)</sup> 〔神は〕父と〔聖〕霊の望むところ(хотѣние)によって、父の懐における自らの被造物を救っている。〔神はそれを〕見放すことなく、乙女のいとも聖なる臥所に下り来た。そして、神的な種として入った。〔神は〕霊に満ちた、言葉であり(словесн), 知性があり(умьн), それまでにはなかったところの肉体を得た。神は出て、受肉し、言い難く生まれた。母は処女性を純潔無垢に守った。〔神は〕融合(смьтение)も混合(размѣшение)も変化(измѣнение)も受けること

318) 「似た実体」と訳した подобосушень は ὁμοούσιος の訳語で、信経でも用いられる語で、例えば『1073年スヴァトスラフ文集』の版(注316)では единосущен(同一実体)と訳されている。подобосущенは единосущен と対比すると、「本質」としては同じではなく、似ているに過ぎないとの理解が可能なることから、325年のニカイア公会議で異端とされた、「キリスト(子)は神格に含まれず造られたもの」とするアリウス派の説に寄った訳であり、その背後にはアリウス派的な傾向の年代記筆者(翻訳者)が存在したという解釈が研究者の間で提起されてきた([Похилько 2019: C. 1-2] 参照)。ただ、これ以外の部分のスラブ語訳は父と子と聖霊は位格を異にするが同質の存在(同一実体)であることを明白に述べており、さらに以下には第二回公会議の決定事項として「同一実体の三位一体」(Троица единосущная)の句があることから(下注337)、この訳語だけによって年代記筆者の「異端性」を問題にすることには無理がある。

319) 「父とともに始まりなく」(безначалень Отцю)は、「信仰叙述」では събезначальнь Отцю となっており、原文 συνάρχης に対応している。безначалень の読みは全写本に共通しているが、съ- が脱落した形が伝わったのだろう。

320) 「永遠に在る」(присносущно)は「信仰叙述」では съприсносущно となっており、原文の συναίδιον に対応している。原文は「〔父と子と〕ともに永遠にある」の意味。前注と同じく、съ- が脱落している。

321) この段落の文言には、現存するもっとも浩瀚な「信仰叙述」(上注316、以下同じ)の版と比べると、20～30字の省略がある。

322) この段落の文言には「信仰叙述」の版と比べると、20字ほどの省略がある。

323) この段落の文言には「信仰叙述」の版と比べると、200字ほどの大幅な省略がある。

はなく、かつて在ったところに在りながら、かつてなかったところに在ったのである。〔神は〕幻想(мечтание)ではなく真理によって僕〔しもべ〕の姿をとり、罪を除けばあらゆる点でわれらに似た者になった。

<sup>324)</sup>〔子は〕神意によって(волею)生れ、神意よって飢え、神意よって渴き、神意よって苦しみ、神意よって恐れ、神意よって死んだ。〔これは〕真理によるものであり、幻想によるものではない。すべてのことは必然(естественая)であり、人間の受難は中傷されるべきでない。

〔子は〕罪なくして十字架につけられ、死を味わい、自らの肉体において(въ свои плоти)復活し、朽ちることを見なかった。<sup>325)</sup>〔そして〕天に昇り、父の右手に座した。〔子は〕再び栄光とともに生ける者と死せる者を裁きに来るだろう。自らの肉体で<sup>326)</sup>昇ったように、そのように下るであろう。

<sup>327)</sup>わたしは認めます、水と霊による唯一の洗礼を。わたしは認め<sup>328)</sup>、いと聖なる秘蹟(тайны)に臨みます。私は真に信じます、肉体と血を。受け入れます、教会が伝えたことを。尊いイコンに拝礼します。尊い十字架の木に拝礼します。聖骸と聖具に拝礼します<sup>329)</sup>

---

324) この段落の文言には「信仰叙述」の版と比べると、60～70字ほどの省略がある。

325) この箇所は8語ほどの省略がある。

326) *HI-M* 全写本と *In* で съ своєю плотию だが、*Лер, НКI* съ славою и плотью; *Хлб* славою съ плътню своєю と異読がある。この表現は直前にある「自らの肉体において」(въ свои плоти)と対応していると考えれば、*HI-M, In* の読みを本来とすべきだろう。

327) この箇所は40語前後の省略がある。

328) *HI-M* の「わたしは認め」は単なる繰り返し。これ以下はこれまでの文言を抜粋した引用になっている。

329) 上注316の箇所からこまですが、「ミカエル・シュンケロスの信仰叙述」からの引用。ただし、前注328からは抜粋的で最後まで大きく省略されている。省略されたテキストについては[Похилько 2019: С. 26–30]を参照。

【ウラジーミル公の信仰告白2：公会議への信仰とラテン信仰への戒め】 [№ 99]

[№ 99-1]

〈わたしは信じます。聖なる父たちの七つの公会議を<sup>330)</sup>。これは次のようだった。

その最初のものはニカイア<sup>331)</sup>で、300と8人の聖なる父〔教父〕たちがアレイオス<sup>332)</sup> (Αρειο) を呪い<sup>333)</sup>、瑕疵のない正しい信仰を宣言した<sup>334)</sup>。

第2回目の公会議<sup>335)</sup>は聖なる父たち100と50人によりコンスタンティノポリスで〔行われ〕、聖霊否定論者マケドニオス<sup>336)</sup> (Μακεδόνιος) を呪い、同一実体の三位一体<sup>337)</sup>を宣言した。

第3回目の公会議<sup>338)</sup>はエフェソスで、200人の聖なる父たちがネストリオス<sup>339)</sup> (Νεστόριος) (Нестории)

330) 7つの全地公会議の決定に対する信仰告白は「信経」(ニケア・コンスタンティノポリス信条)にも三位一体の神への信仰告白に続いて置かれており、この[№ 99]では公会議の順番に則って、開催の経緯とその決定内容が叙述されている。この部分の典拠については、内容的には多くのビザンツ資料(パレヤ、年代記、書簡など)のスラブ語訳に見出すことができる[Сухомлинов 1856: С. 68–70]。А・Павловによれば、本年代記の記述に対応する(すなわち典拠の可能性の高い)資料として、『年代記編集旧約抄録(パレヤ)〔略本〕』(Краткая Хронографическая Палея)を挙げており、テキスト(ГИМ Син. № 210)を対比することによって、年代記の編者の編集方針を明らかにしている。それによれば、まず編者は同時代(А・Поповによれば反ラテン論争が盛んになった11世紀後半[Попов 1875: С. 17])の教会の反ラテン思想を述べる手段として、[№ 99]のウラジーミル公の信仰告白を使っている。そのために、典拠(パレヤ)の記述を大幅に省略し(先の「信仰叙述」引用と同じ手法)、時代的にウラジーミル公に仮託できない内容は削っている。さらに、公会議の事実を詳しく伝える典拠の内容を、年代記では、①開催地、参加者の数、決定の内容(異端の排除)、②公会議の主要な参加者の名と所属、の二つに分けて、それぞれを[№ 99-1]と[№ 99-3]の別々の箇所ですべて記述している。そして、その間([№ 99-2])に反ラテンの教えをとりまとめて挿入している(テキストの対比は[Павлов 1878: С. 9–13]を参照)。このような切り貼り編集によって、編者はすでにキリスト教受容の始まりからウラジーミル公はラテン〔カトリック〕教義を警戒していたという物語を作り出そうとしたと考えられる。

331) 325年5月～6月に小アジアのニカイア(現トルコ共和国のイズニク)で開かれた。

332) 「アレイオス」(Αρειος)はアレクサンドリアの司祭でキリストの神性を従属的とするいわゆる「アリウス派」異端の主導者とされている。

333) 「呪う」(прокляша)は教会法の用語では、ギリシア語のἀνάθεμαに対応し、ここでは異端と認められた者の「破門」すなわち、教会組織からの追放を意味している。

334) 「宣言する」(проповѣдаша)は前注の「呪う」と反義的に対となって使われており、ギリシア語の κηρύσσωに対応する。正統の認められた教義を広く宣べ伝えることを意味している。

335) 381年の「第一コンスタンティノポリス公会議」のこと。

336) 「マケドニオス」(Μακεδόνιος)は4世紀のコンスタンティノポリス主教。聖霊の神性を否定したとされている。

337) 「同一実体の三位一体」(Троица единосущна)は τριάς ομοούσιοςに対応する神学用語(上注318を参照)。

338) 431年のエフェソス公会議のこと。

339) 「ネストリオス」(Νεστόριος)は5世紀前半のコンスタンティノポリス総主教。聖母の呼称をめぐる論争で異端として破門された(次注参照)。

に対して〔行われ〕、かれを呪い、聖なる〈神の母〉の〔呼び名〕を宣言した<sup>340)</sup>。

第4回目の公会議<sup>341)</sup>はカルケドン、600と30人の聖なる父たちがエウテュケス<sup>342)</sup> (Евтух) [154] とディオスコロス<sup>343)</sup> (Диоскор) に対して〔行われ〕、聖なる父たちがその二人を呪い、〔神が完全であり〕、主なるわれらの〔神〕イエス・キリストが完全な人間であることを宣言した。

第5回目の公会議<sup>344)</sup>は帝都で、100と60と5人の聖なる父たちによってオリゲネス<sup>345)</sup> (Αργεν) の教えとエウァグリオス<sup>346)</sup> (Εβαγγρι) に対して〔行われ〕、聖なる父たちがかれらを呪った。

第6回目の公会議<sup>347)</sup>は帝都で、セルギオス<sup>348)</sup> [一世](Сергии) とキュロス<sup>349)</sup> (Κιρ) に対して、100と70人の聖なる父たちによって〔行われ〕、聖なる父たちがかれらを呪った。

第7回目の公会議<sup>350)</sup>はニカイアで、300と50人の聖なる父たちによって開かれ、聖像(ικόνες)に拝礼しない者たちを呪った。

[№ 99-2]

ラテン人(λατινί)から教えを受けるな<sup>351)</sup>。かれらの教えは道にはずれている。かれらは教会

---

340) 「聖なる〈神の母〉〔聖母〕を宣言した」(προповѣдаша святыю Богородицу)とは、公会議において、ネストリオスが、聖母を Χριστοτόκος (キリストを生んだ女)と呼ぶことを主張していたのに対して、神の位格を生んだ存在としての聖母を意味する Θεοτόκος (神を生んだ女、ロシア語で Богородица) の呼称が公会議で決定されたことを意味している。

341) 451年のカルケドン公会議のこと。

342) 「エウテュケス」(Εὐτυχής)は5世紀前半のコンスタンティノポリスの修道院長。キリストの人性は神性の中に吸収されるとして、神性・人性の区別を明らかにしない〈単性論〉を唱えた。

343) 「ディオスコロス」(Διόσκορος)はアレクサンドリア総主教(在位444-451年)。エウテュケスの説を支持したことによって異端とされた。

344) 553年に開催された「第二コンスタンティノポリス公会議」のこと。

345) 「オリゲネス」(Ωριγένης)は3世紀アレクサンドリアの教父。かれの教説が、三位一体の理解において、父の神格を子の神格より上位に置く(従属説)と理解されたために、死後300年以上のちに異端宣告された。

346) 「エウァグリオス」(Εὐάγγριος, ὁ Ποντικός)は4世紀後半の修道士で、オリゲネスの説を支持したとして異端とされた。

347) 680-81年に開催された「第三コンスタンティノポリス公会議」のこと。

348) 「セルギオス(一世)」(Σέργιος)は7世紀前半のコンスタンティノポリス総主教(在位610-38年)。キリストの人格にはただ1つの意志があるのみとする「単意説」によって異端とされた。

349) 「キュロス」(Κύρος)は7世紀のアレクサンドリア総主教(在位630-42年)。セエルギオス(前注)とともに「単意説」を唱えた。

350) 787年の「第二ニカイア公会議」のこと。

351) [№ 99]の7つの公会議に関する記述は基本的にビザンツ資料に拠っているが(上注330)、「ラテン人の誤り」についてのこの段落([№ 99-2])は、おそらくルーシ人の記者(編集者)による挿入と考えられる。

に入っても聖像 (иконы) に拝礼せず、立ったまま拝礼する。そして拝礼して<sup>352)</sup> 地上に十字架を書き、接吻して、立ち上がって平気でその十字架の上に足で立っているのである。このように、かれらはひれ伏して接吻し、立ち上がって踏みつける<sup>353)</sup>。このようなことを使徒たちは伝えなかった。聖なる使徒たちが伝えたのは、立てられた十字架に接吻することと、聖像 (иконы) を伝えたのである。福音書記者ルカは最初に〔聖像を〕描いてローマに送った。バシレイオス<sup>354)</sup> (Василии) が言っているように、〈聖像は最初の像にいたる<sup>355)</sup>〉のである。

さらに、〔ラテン人たちは〕大地を母と称している。しかし、もしかれらにとって大地が母であるならば、かれらにとって父は天ということになる。だが、太初に神は天と地を創った。だから「天にまします我らの父よ<sup>356)</sup>」と言うのだ。もしもこの者たち〔ラテン人〕の理解するところに従って大地が母であるとするならば、どうしてかれらは<sup>357)</sup> 自分の母の上に唾を吐くことがあるのか。あるいはそれに口づけしたり、あるいは汚すことがあるのか<sup>358)</sup>。

以前には、ローマ人はそのようなことをなしてはいなかった。そうではなく、ローマおよびあらゆる総主教座<sup>359)</sup> から集まって来て、すべての公会議において〔信仰を〕正してきたのだった。

[№ 99-3]

アレイオスに対してニカイアで行われた最初の公会議<sup>360)</sup> に、ローマから、〔教皇〕シルウェ

352) この「拝礼して」(поклонився)は、地上に這いつくばってという意味。

353) ここで非難されている〈ラテン人〉の習慣については、1068年頃成立と推定されている、洞窟修道院フェオドーシイがイジャスラフ公[B]に宛てた「ラテン信仰についての書簡」(Послание о вере латинской)の中にほぼ同一の文言がある[Поньрко 1992: С. 16]。

354) 「バシレイオス」(Βασίλειος)は、4世紀後半の教父カエサリアの聖大バシレイオスのこと。

355) 「聖像は最初の像にいたる」(икона на пръввыи образъ приходит)は、聖大バシレイオス『聖霊論』第18章の「聖像〔似像〕への尊崇はその原型にまで届く」(ή τῆς εἰκονος τιμὴ ἐπὶ τὸ πρῶτότυπον διαβαίνειν) [バシレイオス 1996: 127頁] に拠っているが、本文では τιμὴ (尊崇) が訳されておらず意味も不明瞭である。この聖像(似像・エイコン)についての文言は中世ロシアでは広く知られており、*ПВЛ: ХI* の欄外古註には почесть образа на первообразное приходит と補筆がなされており、*Никоновская летопись* の並行記事では Иконная честь на первый образъ преходить [ПСРЛ Т. 9: С. 56] とやはり честь が補われている [Сухомлинов 1856: С. 70]。

356) 「主の祈り」(отче наш) (『マタイによる福音書』6:13) の冒頭の祈禱文からの引用。

357) *ПВЛ* では「あなた方が唾を吐く」(плюете)となっているが、文脈から *HI-M* の「かれらが唾を吐く」(плюють) が自然であり、後者が本来の読みではないか。

358) この段落のラテン人は「大地を母と称する」(землю глаголють матерью) という教説は、その後の異教的風習に対する弾劾書で述べられるが、ラテン人(カトリック教徒)の慣習として語られることは珍しい。

359) 「あらゆる総主教座」(от всѣх престол)とは、エルサレム、アレクサンドリア、コンスタンティノポリス、アンティオキアの総主教座のことを指している。先のローマとあわせて「五大総主教座」となる(下注 369 参照)。

360) 第1回公会議については、上注 331 を参照。

ステル〔一世〕(Селивестръ; Silvester; Σίλβεστρος)が司教たちと司祭たちを送り、アレクサンドリアからは〔主教・大〕アタナシオス(Αθανάσιος)が、帝都からは〔総主教〕メトロファネス(Μιτροφάνης)が、自分のもとから主教たちを送った。このようにして信仰を正して来たのである。

第2回目の公会議<sup>361)</sup>にはローマから〔教皇〕ダマスス〔一世〕(Δαμας; Damasus)、アレクサンドリアからは〔総主教〕ティモテオス(Τιμοθεος), アンチオキアからは〔主教〕メリティオス(Μελετιν; Μελέτιος), [155]エルサレムの〔主教〕キュリロス(Κυριλλ; Κύριλλος), 神学者の〔教父〕グレゴリオス(Γρηγορι; Γρηγόριος Νύσσης)が〔参加した〕。

第3回目の公会議<sup>362)</sup>にはローマの〔教皇〕ケレスティヌス〔一世〕(Κελεστιν; Caelestinus I), アレクサンドリアの〔総主教〕キュリロス(Κυριλλ; Κύριλλος), エルサレムの〔主教〕ユウエナリス(Υβενάλι; Ιουβενάλιος)。

第4回目の公会議<sup>363)</sup>にはローマの〔教皇〕レオ〔一世〕(Λεοντ; Leo I; Λέων), 帝都の〔総主教〕アナトリオス(Ανατολι; Ανατόλιος), エルサレムの〔主教〕ユウエナリス(Υβενάλι; Ιουβενάλιος)が〔参加した〕。

第5回目の公会議<sup>364)</sup>にはローマの〔教皇〕ウィギリウス(Βιλιγι; Viligius), 帝都の〔総主教〕エウテュキオス(Ευτυχι; Ευτύχιος), アレクサンドリアの〔総主教〕アポリナリオス(Απολιναρι; Απολλινάριος), アンチオキアの〔総主教〕ドムノス(Δομν; Δόμνος)が〔参加した〕。

第6回目の公会議<sup>365)</sup>にはローマから〔教皇〕アガトス(Αγφον; Agatho; Ἀγάθων), 帝都の〔総主教〕ゲオルギオス(Γεωργι; Γεώργιος), アンチオキアの〔総主教〕テオファネス(Θεοφαν; Θεοφανής), アレクサンドリアからは修道士〔総主教〕のペトロス(Πετρ; Πέτρος)が参加した。

第7回目の公会議<sup>366)</sup>にはローマから〔教皇〕ハドリアヌス(Αδριαν; Hadrianus), 帝都の〔総主教〕タラシオス(Ταρασι; Ταράσιος), アレクサンドリアの〔総主教〕ポリティアノス(Πολιτ; Πολιτιανός), アンチオキアの〔総主教〕テオドロス(Θεοδorit; Θεόδωρος), エルサレムの〔総主教〕エリアス(Ιλ; Ηλίας)が参加した。

そしてこれらすべての者が自分たちの主教たちとともに集まって〔信仰を<sup>367)</sup>〕正してきた

---

361) 第2回公会議については、上注335を参照。

362) 第3回公会議については、上注338を参照。

363) 第4回公会議については、上注341を参照。

364) 第5回公会議については、上注344を参照。

365) 第6回公会議については、上注347を参照。

366) 第7回公会議については、上注350を参照。

367) вѣру (信仰を)は *In* の読み。



のである。

この公会議の後にどもりのペトロス<sup>368)</sup> (Петръ же гугнивыи) が他の者たちとともにローマに行って〔教皇〕座を奪い、信仰をゆがめた。そしてかれは、エルサレム、アレクサンドリア、帝都、アンティオキアの〔総主教〕座<sup>369)</sup> から退けられた。かれはイタリアの地全土を混乱させた。自分の教説をバラバラに撒いて。これによって〔人々は〕一つの調和した信仰ではなく、バラバラな〔教えを〕持つようになった。ある司祭たちは、ひとりの妻をめとって〔神に〕仕えるかと思えば、また別の〔司祭たち〕は7人目までの妻をめとって〔神に〕仕えている。他の多くのこともバラバラに〔教えを〕持っている。かれらの教説には用心せよ。かれらは贈物によって罪を赦しているが<sup>370)</sup>、それは何よりも悪いことである。どうか神がお前をこのようなことから守り給うように」。

### 【ケルソン伝説2<sup>371)</sup>：ウラジーミルの帰国について】 [№ 100]

この後、ウラジーミル [06] は、皇女とアナスタシオス<sup>372)</sup> (Анастас) とケルソンの司祭 (попы)

368) 「どもりのペトロス」(Петр гугнивыи(ギリシア語推定綴り Πέτρος μογί-λάλος) は、5世紀に単性論を支持したアレクサンドリア総主教ペトロス・モンゴス(Петр Монг, Πέτρος Μογγός) (490年没)の名称と形象がローマ教皇(偽のペトロ(Петр))と融合してつくられた〈ラテン異端者〉の伝説的な人物。ここでは、ラテン人異端の首謀者として描かれている [Попов 1875: С. 18–22][Павлов 1878: С. 23–25]。

369) ここに挙げられている五つの座(престол)は、これは、6世紀にユスティニアヌス一世が定めたときれる「五総主教制」(ペンタルキア)の総主教座を指している。

370) 「贈り物によって罪を赦す」の一節は、フェオドーシイ書簡(上注353)に同様の文言がある [Поньрко 1992: С. 16]。

371) このウラジーミル公の帰国についての記事 [№ 100] は、その前に公の信仰告白と公会議についての長い記事 [№ 98-99] を挟んでいるが、内容と文体から見て「ケルソン伝説」 [№ 97] の続きであり、挿入者も同一と考えるべきだろう。

372) 「アナスタシオス」(Анастас)については上注289を参照。これと同一人物だろう。

たちを連れて、聖クリメント<sup>373)</sup> (Климент) と彼の弟子のフォイボス<sup>374)</sup> (Фив) の聖骸 (мощи) とともに、自分の祝福のために<sup>375)</sup> 教会の器物と聖像を持って行った。[156] ケルソンの中央に盗み出した土を盛って<sup>376)</sup> 築いた丘の上に、かれは教会を建てた<sup>377)</sup>。その教会は今日に至るまで建っている。

かれは出発に際して、青銅の二つの像と青銅の4頭の馬を持って行った。それらは今も〔キエフの〕聖母<sup>378)</sup> [教会] (святая Богородиця) の後に建っている。物を知らない物たちはそれらが大理石だと考えている<sup>379)</sup>。ウラジーミル [06] は、皇女のための結納として、ケルソンの城市を引き渡した。

### 【ウラジーミルはキエフで在来神ペルーン像を破壊する】 [№ 101]

〔ウラジーミル〕自らはキエフに帰って来た。かれは帰って来ると、神像 (кумиры) をひっくり返し、あるものは切り、また他のものは火にかけるように命じた。かれはペルーン<sup>380)</sup> [像] を、

---

373) 「クリメント」 (Климент) は、1世紀末のローマのクレメンヌ一世 (Clemens Romanus; Κλήμης Ῥώμης) のことで、第3代のローマ司教 (88-97年) をつとめた。クリミア半島に流刑され、トラヤヌス帝の命令により水没の刑を受けて殉教した聖人。パンノニア伝承によれば、861年にその聖骸が発見され、ケルソンを訪れたスラブ人の使徒コンスタンティノス (キュリロス) は867-68年に自ら聖骸をローマにもたらし、教皇ハドリアヌス二世 [在位 867-872年] に引き渡したという。聖骸はローマの聖クレメンヌ教会に安置され、コンスタンティノス自身ものちにここに埋葬されている [869年]。聖骸の一部はケルソネスに残され、それがウラジーミルによってキエフに運ばれたのである。なお、『キエフ年代記』の1147年の項に「聖クリメントの頭蓋」 (глава святого Климента) [ПСРЛ Т. 2: Стб. 341] についての言及があることから、持ち出されたのは聖骸の頭部だったことが分かる。

374) 「フォイボス」 (Фив; Φοιβος) は聖クリメントの弟子で、クリミアで受難の生活をともにした。クリメントが殉教したのち、同じ弟子のコルネリオス (Κορνήλιος) とともに祈ると海が引いて、聖骸が顕れたという奇蹟物語が伝わっている。

375) 「自分の祝福のために」 (на благословение собѣ) は、キエフに持参してキエフとその周辺都市に建てる予定の教会の献堂 (聖別) や聖職者の叙任のための祝福に用いるためということか。

376) この土を盛ったことについては上注 288 を参照。

377) この教会は、状況から判断して、ウラジーミルが洗札のときに受けた洗札名の守護聖人大ヴァシリオスに奉献された、ヴァシーリイ教会 (церковь святого Василия) だったことが高い確度で推定される。

378) このウラジーミルが創建した「聖母」教会については、991年記事 [№ 113] の下注 778 および 993年記事 [№ 117] の下注 789 を参照。

379) この編集の時点を参照する「ケルソン伝説」編者の特徴的な手法については上注 308 を参照。

380) この「ペルーン」の神像については、キエフのウラジーミル城区の高楼の館の外に建てられていたものを指している。[ノヴゴロド第一年代記 (1) : 注 454] を参照。

馬の尾に結び付け、山からポリチェフ<sup>381)</sup>〔の坂〕を(по Борицеву)ルチャイ<sup>382)</sup>〔川〕(Ручай)へ引っぱって行くように命じ、12人の家臣を〔警備に〕つけて棒で叩かせた。

これは木を感覚あるものとしていたのではなく、悪鬼(бѣсъ)を罵るためであった。〔悪鬼は〕人間たちから報いてもらおうとして、このような姿で人間を惑わすものだからである。〈主よ、あなたは偉大であり、あなたの御業は不思議である<sup>383)</sup>〉。〔悪鬼は〕昨日は人間たちによって尊ばれ、今日は罵られるのだから。

〔バルーンが〕ルチャイ〔川〕(по Ручаю)を、ドニエブルのほう引っぱられて行くと、不信心な人々はそれを悼んで泣いた。かれらがまだ聖なる洗礼を受けていなかったからである。そして〔人々は〕引っぱって来て、それをドニエブル川に投げ込んだ<sup>384)</sup>。ウラジーミル [06] は〔警備を〕つけるとこのように〔12人の家臣たちに〕言った。「もしも〔バルーンが〕どこかに漂っていたら、お前たちは早瀬<sup>385)</sup>(порогы)を通り過ぎるまで、それを岸から突き放せ。〔通り過ぎたら〕それから離れよ」。かれら〔家臣たち〕は命じられた通りにした。〔バルーン像を〕突き放して、それが早瀬を通り過ぎたとき、風がそれを浅瀬に打ち上げた。このために、そこをペルーンの浅瀬(Перуна рѣнь)と呼んだが、今でも〔そのように〕言われている。

### 【ウラジーミルはキエフ人の洗礼を命じる】 [№ 102]

この後ウラジーミル [06] は、城市中に使者を出して言った。「もしも、<sup>386)</sup>川に行かない者があれば、富める者でも、富まざる者でも、貧しい者でも、奴隷でも、わたしに従わない者である」。

381) 「ポリチェフ」の坂については〔ノヴゴロド第一年代記(1)：注60〕を参照。

382) 「ルチャイ」(Ручай)は文脈から見て川の名であり、*ПВЛ* 945年の、キエフにおけるイーゴリ [02] とビザンツ使節との間の誓約儀礼の描写で、「洗礼されたルーシ人には、パスインツァ・ベセダ地区とコザリ地区の、ルチャイ〔川〕を見おろす聖イリヤの教会で誓いをさせた」(а хрестьяную русь водиша въ церковь святаго Ильи, яже есть надъ Ручьемъ, конѣць Пасынѣцѣ бесѣды, и козарѣ)と詳しい地誌的描写とともに言及されている。この川については、諸研究によれば、ポドリエ地区の港湾施設のあったポチャイナ川(Почайна)〔ノヴゴロド第一年代記(1)：注290〕と同じものを指すとするのが通説となっている。ただし、ここで「別名」が使われた理由は不明。なお、『聖ウラジーミル伝』Вторая редакция Обычного житияには、「ヴォロスの神像はポチャイナ川に引き、バルーンの神像はルチャイ川に引いて行った」〔Шахматов 2014: С. 234〕のように別々の川として取り扱っている文献もある。

383) 原文は Велии еси, господи, чудна суть дѣла твоя で、これは『詩編』144:3-5の велиий Господь и хвален зело, и величию его несть конца. Род и род восхвалят дѣла твоя и силу твою возвестят: великолепие славы святыни твоея возглаголют и чудеса твоя поведят の下線部をつないだ切り貼り引用。この類似句はあとで繰り返される。

384) ルチャイ川(ポチャイナ川)はドニエブル川の支流であることから、神像が本流のドニエブル川の方に移したということ。

385) 「早瀬(пороги)」については〔ノヴゴロド第一年代記(1)：注381〕を参照。

386) *ПВЛ*ではこの箇所「明朝」(заутра)の語がある。

人々はこれを聞いて喜んで行き、「もしもこれが善いこと(не добро)でなかったら、公と貴族たちがこれを受け入れなかったらろう<sup>387)</sup>」と喜んで言った。翌朝、ウラジーミル [06] は、皇女の司祭たちやケルソンの〔司祭たち〕とともにドニエプル川に出向き、無数の人々が集まった。〔かれらは〕水に入った。そして、ある者は首まで、ある者は胸まで、幼い者は岸近くで〔胸のところまで浸って〕立っていた。他の者は幼児を [157] 抱き、大人は〔川の中を〕歩き廻っていた。司祭たちは立ったままで祈りを唱えた。

これほど〔多くの〕の魂が救われるのを見る喜びが、天上と地上に溢れた。しかし悪魔(дияволь)は呻いて言った、「ああ、わたしは悲しい、ここから追い払われるとは。わたしはここに住み処を持つてと思っていた。ここには使徒の教えがなく<sup>388)</sup>、神を知る者たちもいないからだ。わたしは、わたしに仕えて来たかれらの奉仕を喜んできた。それなのに見よ、すでにわたしは、無知な者たちによって打ち負かされてしまった<sup>389)</sup>。使徒たちや殉教者たちによってではなく。もうわたしは、これらの国々で〔皇帝として〕支配することはできない」。

人々は洗礼を受けてそれぞれ自分の家へ帰った。

ウラジーミル [06] は、自分とかれの民が神を知ったことを喜び、天を仰いで言った。「天と地を創られた神よ、これらの新しい民を見て下さい。主よ、キリスト教徒の国々が知ったように、あなたが真の神であることをかれらに知らせて下さい。かれらの信仰を正しく、変わらないものとして下さい。主よ、刃向かう敵<sup>390)</sup> に対してわたしを助けて下さい。わたしがあなたとあなたの力を頼みにしてその策謀に打ち勝つことができますように」。

こう言ってかれは神像の立っていたそれぞれの場所に、〔木造の〕教会を建てるように命じた。そして〔ウラジーミルは〕ペルーンやその他の神像が立っていた場所、公と人々が生贄を献げ

---

387) この発言については、[№ 96] (上注 275) に、主語をウラジーミルの「祖母オリガ」を主語にして構文と内容が類似した文言がある。

388) この悪魔の言葉は、「ヴァリヤグ人父子殉教物語」[№ 82] のあとにおかれた訓話の「ここがわたしの住み処(жилище)である。ここでは使徒たちが教えたこと (...) がなかったからだ」[№ 83] に対応している。

389) 「無知な者たちによって打ち負かされた」(побѣждаемъ есмь от невѣглас) 句は、[№ 83] の「教えによって刃向かう敵を打ち負かし」(учениемъ побѣждаемъ противнаго врага)。と「その頃人々は無知で異教徒だった」(и бяху бо тогда челоѡвѣци невѣгласи) の文言に対応している。つまり、洗礼を受ける前のルーシの人々のことを指しており、「洗礼を受ける前は無知だった者たち」くらいの意味合いだろう。

390) 「刃向かう敵」(противный враг) は以下にある「悪魔」(диавол) のことを指している。前注も参照。

ていた場所の丘の上に、聖ヴァシーリイ教会<sup>391)</sup> (церковь святого Василия) を建てた。そして城市ごとに教会と司祭たちを置き、すべての城市と村で人々を洗礼に導き始めた。

かれは使者を送って身分の高い者たち<sup>392)</sup> の子弟の中から子供を連れて来させ、聖書を学ばせ始めた。これらの子弟の母親はまだ信仰が固まっていなかったので、死者を悼んで泣くように、かれらのことを思って泣いた。

### 【ルーシの地の洗礼に対する讃詞】<sup>393)</sup> [ № 103 ]

これらの者が聖書を学ぶようになると、ルーシの国で、「〈その日々には耳の聞えない者が書物の言葉を聞きとり<sup>394)</sup>、〈どもる者の言葉が明瞭に [158] なるであろう<sup>395)</sup>〉」と言われた預言が実現した。これらの者たちは以前には書物の言葉を聞けなかったが、神の計らいと慈悲によって、神が憐れんだのである。それは預言者が〔次のように〕言ったようであった。「〈わたしは憐れもうとする者を憐れむ〉<sup>396)</sup>」。「〔神は〕〈あらたに造りかえる洗いと〔聖〕霊によるあらたまりによって<sup>397)</sup>〉われらに慈悲を与えた。それは神の御心によるのであって、われらの行いのゆえではない。

主なるイエス・キリストは祝福されており、かれは新しい民を愛し、ルーシの地に聖なる洗礼によって光を与えた〔啓蒙した〕。このために、われらもまたかれの前にひざまずいて、〔次のように〕言う。「主なるイエス・キリストよ。われらはあなたに何を報いればよいのでしょうか、あなたが、罪びとであるわれらに与えてくれたすべてに対して。われらは、あなたの贈物について報いるすべを知らない。〈あなたは偉大です、主よ。あなたの御業は不思議であり、あなたの偉大さには限りがありません<sup>398)</sup>〉。〈われらはあなたの御業を世代から世代へ引

391) この「聖ヴァシーリイ教会」(церковь святого Василия) については、980年のウラジーミルによる神像建設の記事[№75]で言及されており、これに対応している〔ノヴゴロド第一年代記(1):注463, 464〕。ウラジーミルの洗礼名が「ヴァシーリイ」(Василий)であることについて年代記には言及はないが、修道士ヤコフの『記憶と讃詞』など幾つかの中世文学作品に記されている。この守護聖人がカエサリアの聖大バシリオスであることはほぼ通説になっている〔Литвина, Успенский 2006: С. 501–502〕。

392) 「身分の高い者たち」(нарочитои)は、下注440の「最良の家臣たち」(мужи лучышии)とはほぼ同じと見てよいだろう。支配城市や部族・氏族の有力者や族長たちを指していると思われる。

393) この[№103]の讃詞は、聖書からの多数の引用を組み合わせたものであり、引用された箇所からもわかるように、水の洗礼によるあらたまり(обновление)、さらに再生と新しい民の出現が強調されている。これは、「哲人の言葉」の中でも[№93]で展開されている使徒の洗礼の物語の思想と合致しており(上注237)、同じ筆者(編者)の手になると考えられる。

394) 『イザヤ書』29:18からの文字通りの引用。

395) 『イザヤ書』32:4。改変された引用。

396) 『出エジプト記』33:19に対応。

397) 『ティトスへの手紙』3:5に対応。

398) 『詩編』144:3(邦訳145:3)に対応。

継いで讃えます<sup>399)</sup>。ダビデとともに次のように言いながら。〈来なさい、われらは主を喜ぼう。神とわれらの救い主に呼びかけよう。告白においてわれらはかれの顔の面前に立つ<sup>400)</sup>〉〈主に告白しよう、幸いがあるように、永遠にかれの慈悲があるように<sup>401)</sup>〉〈われらをわれらの敵から免れさせて下さるように<sup>402)</sup>〉。それ〔敵〕は空しい偶像である。そして再びダビデとともに〔私たちは言います〕。「〈主に新しい歌を唱いなさい。あなたがた全土が主に誉め歌を唱いなさい。かれの名を祝福しなさい。かれの救いを日々言い広めなさい。かれの栄光を諸々の民族の中に言い広めなさい。すべての民族の中にかれの奇蹟を言い広めなさい<sup>403)</sup>〉。〈主は偉大であり、大いに讃えられ、かれの偉大さには限りがない<sup>404)</sup>〉」。

どれほどの喜びであろうか。救われるのは一人や二人ではない。主は言われた。「〈罪びとが一人悔い改めれば喜びがある<sup>405)</sup>〉」。ところが一人や二人ではなくて、限りなく多くの者たちが聖なる洗礼〔の光〕を受けて神のもとに到ったのである。預言者〔エゼキエル〕は言った。「〈わたしはあなたがたに清い水を振りかけよう。そうすればあなたがたはあなたがたの偶像とあなたがたの罪から清められるであろう<sup>406)</sup>〉」。また別の預言者〔ミカ〕は言った。「〈あなたのような神が他あろうか。罪を除き、不義を見逃し、慈しみ深くある〔御方〕。〔神は〕われらを回心させ、気前よく与え、われらの罪を深みに投げ込む<sup>407)</sup>〉」。

なぜなら、〔使徒〕パウロは次のように言っているのだから。「〈兄弟たちよ、イエス・キリストの名においてわれらが洗礼を受けたのは、かれの死において洗礼を受けたことなのであり、またかれの死における洗礼によって、かれとともにわれらが葬られたということなのである。またキリストが、死んだ者たちの中から父の栄光とともに復活したように、われらもまた命のあらたまりへと歩いていくのである<sup>408)</sup>〉」。また〔パウロは言っている〕「〈古いものは過ぎ去り、見よ、新しいものが実現した<sup>409)</sup>〉。〈今やわれらに救いが近づいた<sup>410)</sup>〉〈夜は〔159〕更け、日は近づいた<sup>411)</sup>〉〈お陰でわれらは信仰によって恵みに近づくことを見出し、誇りにして、そこ

399) 『詩編』144:4 (邦訳145:4) に対応。

400) 『詩編』94:1-2 (邦訳95:1-2) に対応。

401) 『歴代誌上』16:34 からの文字通りの引用。

402) 『詩編』135:24 (邦訳136:24) からの文字通りの引用。

403) 『詩編』95:1-3 (邦訳96:1-3) からの文字通りの引用。

404) 『詩編』144:3 (邦訳145:3) (上注391と同じ箇所) からの文字通りの引用。

405) 『ルカによる福音書』15:10 からの部分的引用。

406) 『エゼキエル書』36:25 からの部分的引用。

407) 『ミカ書』7:18-19 に対応。

408) 『ローマ人への手紙』6:3-4 に対応。

409) 『コリント人への手紙2』5:17 に対応。

410) 『ローマへの手紙』13:11 に対応。

411) 『ローマへの手紙』13:12 からの文字通りの引用。

に立つ<sup>412)</sup>〈今やあなたがたは罪より免れ、主の僕となり、あなたがたの聖化に至る果実を取るであろう<sup>413)</sup>〉」。

このために、われらは喜んで主に仕えなければならない。ダビデがこう言っているのだから。「〈畏れて主に仕え、慄いて主を喜べ<sup>414)</sup>〉」。われらはわれらの主なる神に向かって叫んで言おう。「〈かれらの歯によってとらえられないようにわれらを引き渡さなかった主は祝福されますように<sup>415)</sup>〉」。〈網は破られ、われらは悪魔の惑わしから免れた<sup>416)</sup>〉」

〈かれら〔悪魔〕の記憶は音をたてて消え去り、主は永遠にとどまる<sup>417)</sup>〉。〔主は〕ルーシの息子たち<sup>418)</sup>によって讃えられ、三位一体において唱われる。悪魔 (дѣмонъ) は**信実な人々**<sup>419)</sup>と信心深い女たちによって呪われる。かれらは罪を許されるように、洗礼を受け、悔い改めた者たちである。神によって選ばれたキリスト教の新しい民である。

### 【ウラジーミルの息子たちとその支配城市について】 [№ 104]

ウラジーミル [06] は、自ら〔洗礼による〕光を受け、かれの 12 人の息子たちもかれとともに<sup>420)</sup>〔受けた〕。

412) 『ローマへの手紙』 5:2 からの部分的な引用。

413) 『ローマへの手紙』 6:22 からの文字通りの引用。

414) 『詩編』 2:11 からの文字通りの引用。

415) 『詩編』 123:6 (邦訳 124:6) に対応。

416) 『詩編』 123:7 (邦訳 124:7) からの部分的引用。「悪魔の惑わしから」(от прельсти диаволя) は編者による挿入。

417) 『詩編』 9:7-8 からの文字通りの引用。

418) 「ルーシの息子たち」(русскыя сынови) の句は、955 年のオリガの洗礼記事 [№ 373] と 969 年の死亡記事 [№ 53] の讃詞の中でも使われている。ヴィルクルは、この句が聖書の «Израилеви сынове» に発していると考察しており [Вилкул 2009: С. 83, прим. 329], その場合、この段落の末尾に示され、本年代記の序文も暗示されているルーシの選民性の主張を含意しているかもしれない。

419) *HI-M* 全写本で от вѣрныхъ чловѣкъ だが、*ПВЛ* (*Лер, Ин*), *HKI* は от благовѣрныхъ мужь になっている。後者は明らかに後続する「信心深い女たち」(от говѣрныхъ жен) と対義語によって対比させるための改変であり、前者が本来の読みだろう。

420) この箇所に *ПВЛ* 全写本と *HKI* で и земля его (かれの地も) の句があるが、*HI-M* 全写本にはない。このような句を *HI-M* 編者が削除する動機が見当たらず、さらに земля его とルーシの地をウラジーミルの所属とする表現はこれまではなくやや異質であることから、この句は *ПВЛ* の編集段階での挿入と見るべきだろう。これは上注 419 の編集傾向にも対応している。

かれには12の息子<sup>421)</sup>がいた。すなわち、1<sup>422)</sup>・ヴィシエスラフ<sup>423)</sup>(Вышеслав)[09], 2. イジヤスラフ<sup>424)</sup>(Изяслав)[08], 3. スヴァトボルク<sup>425)</sup>(Святополк)[07], 4. ヤロスラフ<sup>426)</sup>(Ярослав)[13], 5. フセヴォロド<sup>427)</sup>(Всеволод)[10], 6. スヴァトスラフ<sup>428)</sup>(Святослав)[11], 7. ムスチスラ

421) 以下の12人の息子の中には、[№76]のウラジーミルの妻とその子供のリストと比べると、早世したと考えられるログネダの息子ムスチスラフ[12]は入っていない。

422) この12人の息子たちに対する番号付けは、*НМ*の全写本にあるが、*ПВЛ*全写本と*НК1*にはない。これは、上注419, 420と同様の異同であり、同様の編集による改変、すなわち*ПВЛ*の編集段階での削除を疑って見るべきだろう。

423) 「ヴィシエスラフ」[09](Вышеслав)は子供たちのなかの「最年長」(старѣишии)とされており、[№76]のリストでは「チェコ人の女」(чехиня)から生まれたことになっている。12世紀初頭の『ボリスとグレーブの物語』(Сказание о Борисе и Глебе) (以下『物語』)の同様のリストでも「年長」(старѣи)とされており、長子であれば、ウラジーミルのノヴゴロド滞在時代に生まれた(976/77年)息子になる。以下の記事でノヴゴロドで死んでヤロスラフ[13]に代わったとあるが、ノヴゴロド公としてのヤロスラフは*ПВЛ*1014年記事で初めて記されるので、没年はそれより以前になる(タティエーシチェフの歴史は没年を1010年としているが根拠は薄い)。

424) 「イジヤスラフ」[08](Изяслав)は[№76]と『物語』のリストでログネダの息子とされており、このことは、『スーズダリ年代記』(『ラヴレンチイ年代記』)6636(1128)年にあるウラジーミル公とポロツクの公女ログネダの物語[ПСРЛ Т. 1: Стб. 299–301]からも確認できる。リストの順番からみてヤロスラフ[13](下注426)より年長とすると、生年は977/78年と推定できる。1001年(本年代記の年紀では1002年)に没している[ПСРЛ Т. 2: Стб. 113]。

425) 「スヴァトボルク」[07](Святополк)の出生については、[№72]記事と『物語』リストで、ウラジーミルが兄ヤロボルク[04]の妻ですでに身ごもっていたギリシア女を強奪し、かの女から生まれたと記されており、[№74]リストでも確認されている。その場合(ウラジーミルのキエフ公座奪取を978年6月11日とすれば)、生年は978/79年になり、本リストの順番ともほぼ合致する。

426) 「ヤロスラフ」[13](Ярослав)は[№76]リストおよび1000年記事[№124]でログネダの息子とされている。*ПВЛ(Ип)*では1054年2月20日に76歳で没した[ПСРЛ Т. 2: Стб. 150–151]とあることから、生年は978/79年と推定できる。

427) 「フセヴォロド」[10](Всеволод)は[№76]と『物語』リストでは、ログネダの息子になっており、下注443に見るようにヴラジミルの公座に据えられた。なお、『オーラヴ・トリュグヴァソンのサガ』に「東のガルザリーキから、[スウェーデン王妃シグリーズ]に求婚するために」スウェーデンにやって来て、酒宴の後に焼き殺された「ヴィッサヴァルド」(Vissavaldr austan or Garðaríki)という王が描かれているが(アイルランド年代記によると994/95年の事件と推定)[Древняя Русь: Хрестоматия Т. 5: С. 100, 226][ヘイムスクリングラ(二): 81頁]、この王をヴラジミルに座したのちにスウェーデンへ行ったフセヴォロド[10]に同定する説が出されているが、求婚したときの年齢などに齟齬があり、定説にはないといっていない[Джаксон 2012: С. 217-218]。

428) 「スヴァトスラフ」[11](Святослав)は[№76]リストでは「(ヴィシエスラフの母とは)別の〔チェコ人の〕女」から生まれたっており、下注442に見るように、キエフに近いドレヴリャネ人の地(城市はオヴルーチ)の公座に据えられた。*ПВЛ*1015年記事によれば父の死後兄スヴァトボルク[07]を恐れて「ハンガリー人のもとに」(бѣжащю ему въ угры)逃げ、その途上のカルパチア山脈(гора угорьста)で刺客によって殺されている[ПСРЛ Т. 1: Стб. 139]。これは、母方の親族を頼った逃避行だった可能性がある([栗生沢 2015: 300頁]参照)。



フ<sup>429)</sup>(Мьстислав)[18], 8. ボリス<sup>430)</sup>(Борис)[14], 9. グレーブ<sup>431)</sup>(Гльб)[15], 10. スタニスラフ<sup>432)</sup>(Станислав)[12], 11. ポズヴィズド<sup>433)</sup>(Позвизд)[16], 12. スーデイスラフ<sup>434)</sup>(Судислав)[17]である。

ウラジーミル [06] は<sup>435)</sup>, ヴィシェスラフ [09] をノヴゴロド<sup>436)</sup>(Новгородъ)に, イジヤスラフ [08] をポロツク<sup>437)</sup>(Полотскъ)に, スヴァトポルク [07] をトゥーロフ<sup>438)</sup>(Туровъ)に, ヤロス

429) 「ムスチスラフ」[18](Мьстислав)は[№ 76]のリストで、「別の〔チェコ人の〕女」から生まれた息子で(スヴァトスラフ [11]とは同腹の兄弟), ログネダの息子とされる「ムスチスラフ」[18A] ([№ 76]と『物語』のリスト)が早世したあとで生まれ, 同名を名付けられたと推定される。トムタラカン公で, のちに兄にあたるヤロスラフ [13]とルーシの地を分割して統治した。1036年に没している。

430) 「ボリス」(Борис)[14]は,[№ 76]と『物語』のリストでは「ブルガリア人の女」から生まれたとなっている。1015年にスヴァトポルク [07]によって謀殺された。

431) 「グレーブ」(Гльб)[15]は, 兄ボリスと同様に, [№ 76]と『物語』のリストで「ブルガリア人の女」から生まとされている。1015年に兄ボリスとともに謀殺された。

432) 「スタニスラフ」[12](Станислав)は, *HKI (НСГ)*の異読ではモレンスクの公座に据えられた(...Станислава в Смоленскъ)とある。かれについてはここが唯一の言及であり, かれ以外に同名の公(князь)は史料に登場しない。早世したか, もしくは12(キリストの使徒の数)という数を揃えるために付け加えられた可能性もある。

433) 「ボズヴィズド」[16](Позвизд)は, スタニスラフと同様に, ここが唯一の言及であり, かれ以外に同名の公(князь)は史料に登場せず, 前注と同様に実在性については不明。

434) 「スーデイスラフ」[17](Судислав)については, *HKI (НСГ)*の異読では「ブスコフの公座に据えられた」(...Судислава в Пльсковъ)とある。これは, *ПВЛ* 1036年の記事(*HI-M*にはない)で「ヤロスラフはスーデイスラフをブスコフで投獄した」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 151]とあることからなされた補筆だろうが, 実際かれはブスコフ(チューチ人の中心都市)に代官としては据えられていたのではないか。リストの最後にあることから, 最年少者と推定され,*HKI*では1063年が没年と確認できる限りウラジーミルの息子の中ではもっとも遅く没している。

435) この段落でウラジーミルが息子たちを代官として据えて(посадити)いる城市は, ほとんど(ドレヴリャネの地を除いて)キエフから遠隔の地であり, ベレスラヴリやチェルニゴフのような本来の「ルーシの地」の拠点城市は含まれていない。これは明らかに, 支配下にある諸部族の反抗を防ぎ, 徴税, 賦役, 軍役を管理するための措置である。

436) 「ノヴゴロド」はスロヴェネ人の拠点城市だった。*ПВЛ*の民族誌的記述(*HI-M*にはない)に「スロヴェネ人はノヴゴロドで自らの氏族を支配していた」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 10]とある。

437) 「ポロツク」はポロチャネ人の拠点城市。前注と同様に「ポロタ川にいたのがポロチャネ人である」とある。ウラジーミルは980年にこれを占領している[№ 68]。ここは, クリヴィチ人に対する支配の拠点だったとも考えられる。

438) 「トゥーロフ」については980年記事でその城市名の起源について触れられているが[ノヴゴロド第一年代記(1): 注418], 居住する部族についての言及はない。おそらく, ドウレゴヴィチ人(дреговичи)の中心城市だったのだろう。

ラフ [13] をロストフ<sup>439)</sup> (Ростовь) に据えた<sup>440)</sup>。最年長の、ヴィシエスラフ [09] がノヴゴロドで死ぬと、ヤロスラフ [13] をノヴゴロドに、ボリス [14] をロストフに、グレーブ [15] をムーロム<sup>441)</sup> (Муромь) に、スヴァトスラフ [11] をドレヴリャネ人のところ<sup>442)</sup> (Древляне, Дереве) に、フセヴォロド [10] をヴラジミル<sup>443)</sup> (Володимирь) に、ムスチスラフ [18] をトムタラカン<sup>444)</sup> (Тмуторокань) に据えた<sup>445)</sup>。

ウラジーミル [06] は言った。「キエフのそばに城市が少ないのは良くない」。そして、デスナ川 (Десна)、ヴォストリ川 (Вьстрь)、トルーベジ川 (Трубежь)、スーラ川 (Сула)、およびストクグナ川 (Стugna) に沿って城市を建て始めた。そして、スロヴェネ人 (словене)、クリヴィチ人 (кривичи)、チュヂ人 (чюдь)、ヴァティチ人 (вятици)、すべての城市から<sup>446)</sup>、最良の家臣た

439) 「ロストフ」については、*ПЛВ* の民族誌的記述に「ロストフ湖にはメリヤ人がおり、クレシチノ湖にもメリヤ人がいる」(на Ростовскомъ озерѣ меря, а на Клещинѣ озерѣ меря же) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 10–11] とあり、メリヤ人の拠点城市だった。

440) この「据えた」(посади) は、970 年記事でスヴァトスラフ [03] が息子たちに対して行ったと同様に [№ 54]、ウラジーミル [06] も支配城市の管轄のために息子たちを代官(посадник) (後代の用語では наместник) として派遣したということ。

441) 「ムーロム」は *ПЛВ* 冒頭の民族誌的記述で「オカ川はヴォルガ川に流れ入るが、そこにムーロマ人がいる」(по Оцѣ рѣцѣ, где втечь в Волгу, мурома языкъ свой) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 10–11] と記され、「ルーシ人に貢税を収めている」民族(язык)の中に挙げられている。このムーロマ人の中心城市がムーロム(Муром 現在も同名)であり、周辺のチェレミス人(черемись)やモルドヴィア人(морьдва)への支配の拠点ともなっていただろう。

442) 「ドレヴリャネ人のところ」はオリガの復讐によって征服され、オレーグ [05] が支配していた地で、当時の拠点城市はオヴルーチ(Овруч)だった [ノヴゴロド第一年代記(1): 注 400]。

443) 「ヴラジミル」(Владимирь, Владимирь) は西ブーグ川中流域の城市。ウラジーミル公 [06] の名の所有形容詞形が城市名であることから、ウラジーミルがこの地域の住民 (*ПЛВ* 冒頭の民族誌的記述に「ブジャネ人はブーグ川に居住した。のちのヴォルニニ人である」(бужане, зане съдоша по Бугу, послѣже же вельняне) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 10] とある) を支配する拠点として創建し、息子のフセヴォロドを支配公に据えたと考えられる。

444) 「トムタラカン」はここが初出で、965 年の記事 [№ 45] でスヴァトスラフ [03] が征服したとされる ([ノヴゴロド第一年代記(1): 注 312, 313]) ヤース人(ясы)とカソグ人(касоги)を支配するための拠点だったと考えられる (1022 年の記事も参照)。

445) ウラジーミル [06] は自分の息子たちを比較的遠方の支配都市に派遣している。古くからルーシの地に属するキエフから近い支配都市、例えばチェルニゴフ、ペレヤスラヴリ、リユーベチ、ヴィシエゴロド、ヴィティチェフ(Витичев)などへは、重臣貴族(бояре)たちを代官(посадники)として派遣していたと考えられる [Горский 2016]。

446) 「すべての城市から」(от всѣх град) は、支配下の諸部族のすべての拠点城市からという意味で、上述のウラジーミルが息子たちを据えた諸城市(上注 428 参照)がその代表である。なお、*ПЛВ* では「これらの者たちの中から、[建設した] 城市に住ませた」(и от сихъ насели грады)となっているが、これは、分かりやすくするための二次的な改変だろう。

ち<sup>447)</sup>を徴集し始めた。ペチェネグ人<sup>448)</sup>(печенеги)から〔防衛する〕戦争があったからである。そして、かれら〔ペチェネグ人〕と戦い、かれらに打ち勝った。

**【ルーシ各地に聖職者が配置される。ノヴゴロドにおけるペルーン像の破壊】** [№ 105]  
6497(989)<sup>449)</sup>年

ウラジーミル [06] は受洗し、すべてのルーシの地〔も受洗した〕。キエフに府主教が置かれ、ノヴゴロドに大主教<sup>450)</sup>が置かれた。他の諸都市に主教<sup>451)</sup>、司祭、輔祭が置かれた。至る所に喜びがあった。

[160] ノヴゴロドにケルソン人のアキム<sup>452)</sup>(Аким Корсунянинъ)が大主教としてやって来た。かれは供犠場(требище)を破壊し、ペルーン(Перун)〔の木像〕を伐り倒して、これをヴォルホフ川(Волхово)まで引っ張って行くよう命じた。〔人々は〕縄を巻き付けて、これを糞の上

447) 「最良の家臣たち」(мужи лучьшии)の表現はドレヴリャネ人が求婚のためにオリガのもとに派遣した20人の重臣たちについて[№ 29, 31]で使われており、「ドレヴリャネの地を支配する」者たちとされている。これから推定すると、ここに示されているウラジーミル支配下の諸部族の部族長か氏族の首長クラス者たちのことを指しているのだろう。もちろん、この「家臣」たちとともにその配下の住民たちも徴発・徴用され、国境地帯防衛のための〈防人〉として、上述の川沿いに建設した城市・城砦に移住させられたのである。

448) 「ペチェネグ人」については、[ノヴゴロド第一年代記(1):注318]を参照。

449) この「6497(989)年」(в лѣто 6497)は、その前の記事が6496(988)の年紀のもとに置かれている([№ 97-104])ことから、次の年が振られたと理解できるが、[№ 112] (年紀だけの記事で *ПВЛ (Ип)* と共通)にも в лѣто 6497 の年紀があり、*НІ-М* においては、年紀が重複している(下注777)。これは、明らかに[№ 105-111]が後年の *НІ-М* 編集段階における挿入であることに拠っており、ここの в лѣто 6497 の年紀は、一連の挿入記事に対して、15世紀前半の *НІ-М* 編者が付したものだろう。

450) この「大主教」(архиепископ)は下注452のイオアキム(アキム)を指しているが、ノヴゴロドに大主教座が置かれたのは、12世紀後半の1165年頃のことであり、それまでは主教(епископ)がノヴゴロドの教会の首長だった。「大主教」は、ノヴゴロドにすでに大主教座があった、この記事が書かれた(挿入された)時代状況(15世紀前半と推定される)を投影したものである。

451) キエフ府主教が管轄したルーシ諸都市の主教座については[№ 110]を参照。

452) 「アキム」(Аким)は「イオアキム」(Иоаким; Ἰωακείμ)のロシアにおける通称形。*Бр* では *Иоакимъ* と綴られているが、これは後代の補訂によるものだろう。「ケルソン人」(корсунянинъ)とあることから、ウラジーミルがケルソンから連れてきた[№ 100]ギリシア人聖職者のひとりだったと推測される。ノヴゴロドで40年近く勤め、教会の建設事業を行い、1030年頃に没している[Карпов 2017: C. 163-164]。

で引っ張り、杖で叩いた。<sup>453)</sup> [イオアキムは] 誰も、何処にあっても、これを受け入れることを禁じた

朝早く、ピディバ川沿いの住人<sup>454)</sup> (пидьбянинъ) が [ヴォルホフ] 川へ向かって歩いていた。焼き物 (горънци) を [ノヴゴロドの] 城市へ運ぼうとしていたのである。すると、ペルーンは木組みの堰杖 (いぐい) のところに流れついていた。[男は] 棹で突き放してこう言った。「おい、ペルーンよ (Перушице), お前はもう飽きるほど呑んで食べただろう。今はあっちへと流れて行け」。こうして、悪しき者 (окошное)<sup>455)</sup> [ペルーン] はこの世から流れ [去った]。

### 【キエフにおける諸公の交替：キエフ公表】 [№ 106]

見よ、次が聖なる受洗後のキエフの公座について [の記述] である。

受洗後の、再び<sup>456)</sup>、最初のキリスト教の公 (князь крестиянны) はウラジーミル [06]。かれの死後に呪われたスヴァトポルク<sup>457)</sup> (Святополкъ Оканнны)[07]。かれが追放された後にヤロスラフ<sup>458)</sup> (Ярославъ)[13]。ボリスとグレーブの兄弟 (брат Борисовъ и Глѣбовъ) でウラジーミル [06]

---

453) この箇所には *HKI (HCT)* では、15世紀になされた次の内容の挿入がある。「[川へと] 押し出した。その時、ペルーンの中に悪鬼 (бѣс) が入り込みこう叫んだ「おお、呪われよ、おお、このわしを。この情け容赦のない手がわしに触れた」。そして、かれ[ペルーン]をヴォルホフ川に突き落とした。かれは、[ソフィア街区と商業区を結ぶ] 大橋を通りすぎたとき、橋の上に自分の棍棒を落とした。今では正気を失った者たちは、その[棍棒] でもって殺し合いをして、悪鬼どもを慰めているのである」[ПСРЛ Т. 42: С. 55]。

454) ピディバ川 (Пидьба, 現在の名称は Питьба) はヴォルホフ川左岸の支流で、河口はノヴゴロド内城 (детинец) から6kmほど下流にある。

455) 「悪しき者」と訳した окошное は *HI-M, HKI* では異読はないが、意味をとるのが難しい。*CI* の諸写本には、некошное, некощное, в кошныи [ПСРЛ Т. 5, Вып. 1, 1925: С. 73] などの異読があり、後代の写字生が読解に苦しんだあとがうかがわれる。17世紀編集の『ノヴゴロド第三年代記』の並行記事では、некощное, сирѣчь ко тму кромѣшную と後代の挿入注記があり [ПСРЛ Т. 3, 1879: С. 173]、「地獄へ向かって」と解釈していたことがわかる。ここでは、ダーリの民俗語辞典が示している、некошной, некощной の「悪魔」(недобрый, нечистый, вражий, дьявольский, сатанинский) の言い換え語としての語義 (現代の方言辞典にもノヴゴロド方言が確認できる [СРНГ Вып. 21: С. 63]) に拠って、「悪しき者」として、ペルーンを指す言葉と解釈した。

456) この「再び」(пакы) の語は、6497(989)年の [№ 105] の記事冒頭の「ウラジーミルは受洗し、すべてのルーシの地 [も受洗した]」の文言を受けて、同じ内容を繰り返すという意味合いで付されたのだろう。

457) ウラジーミル [06] は1015年7月15日に没し、*ПВЛ, HI-M* の1015年記事「ボリス (とグレーブ) 殺害について」の冒頭に「スヴァトポルク [07] が父のあとを [継いで] キエフに座した」とある [ПСРЛ Т. 1: Стб. 132][НПЛ: С. 169]。かれが「呪われた」(Оканнны, Окаянный) と通称されるのは、この殺害物語の中においてである。

458) *ПВЛ* 1016年記事の末尾に「スヴァトポルク [07] はリャフ人のもとに逃げた。一方ヤロスラフ [13] はキエフで父と祖父の座に就いた」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 142] とある。

の息子。ヤロスラフ [13] が逝去し<sup>459)</sup>、息子たちが残った。最年長がイジャスラフ (Изяславь)[B]、真ん中がスヴァトスラフ (Святославь)[C]、最年少がフセヴォロド (Всеволод)[D]<sup>460)</sup>。かれらは土地<sup>461)</sup> (земля) を分け合った。最年長のイジャスラフ [B] が、キエフとノヴゴロド、他にキエフの領内にある (во предѣлах) 多くの城市を取った。スヴァトスラフ [C] はチェルニゴフとすべての東の地方<sup>462)</sup> (вѣсточная страна) をムーロムまで [取った]。フセヴォロド [D] は、ペレヤスラヴリ、ロストフ、スーズダリ、ベロオゼロ、沿ヴォルガ地方 (Поволожье) [を取った]<sup>463)</sup>。

イジャスラフ [B] が戦争で殺された<sup>464)</sup>。かれの兄弟〔フセヴォロド [D]〕がキエフに座した<sup>465)</sup>。フセヴォロド [D] が逝去した後、かれ〔フセヴォロド〕の甥 (братань) でイジャスラフ [B] の息子のスヴァトポルク [B3] が〔キエフの〕公座に座した<sup>466)</sup>。スヴァトポルク [B3] が逝去した後、フセヴォロド [D] の息子である大いなるウラジーミル [D1]<sup>467)</sup>。かれの後にその息子ムスチ

459) ヤロスラフ [13] の死去については *ПВЛ* 1054 年記事にあり、「聖テオドロスの齋戒の第一土曜日 [1054 年 2 月 20 日]」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 162] のことである。

460) ヤロスラフ [13] の息子たちについては、かれの遺言が述べられている *ПВЛ* 1054 年記事に記されているが、この三人だけでなく他にイーゴリ [F]、ヴァチエスラフ [E] についても触れている。ここでは、のちにキエフの公座を巡って争うことになる三人だけを、本記事の筆者が選び、兄弟の序列 (年代記で名が挙げられている順番からの推定だろう) を付したと考えられる。

461) この「土地」(земля) は一族の支配地を指「ルーシの地」(русская земля) のことを言っており、これを省略したもの。

462) この「東の地方」とはノヴゴロド・セヴェルススキイからデスナ川沿いの諸城市、ヴァティチ人の地、さらにリャザン地方を指している。なお、トムタラカン (Тьмтаракан) もスヴァトスラフ [C] の世襲領地だったが、12 世紀後半には支配を失ったことから、ここには入っていない。

463) この三人の息子たちのルーシの地の分割 (разделиша землю) については、*ПВЛ* 1054 年記事の後半と、1055 年の記事で簡単に述べられているが「イジャスラフ [B] にキエフ、スヴァトスラフ [C] にチェルニゴフ、フセヴォロド [D] にペレスラヴリ」と主要な都市名が示されているだけで、本記事ほど詳しくはない [ПСРЛ Т. 1: Стб. 161-162]。さらに、*ПВЛ* 1097 年のいわゆる「リユーベチ諸公会議」の記事では、この三人の兄弟の息子たちにあたる諸公が、父たちの「世襲領地」(отчина) を守ることを取り決めているが、具体的には示されていない [ПСРЛ Т. 1: Стб. 256-257]。本記事はこの「世襲領地」の城市・領地名が具体的に示されており、これは、本記事の編者が、年代記記事などから得た、諸公の領地 (волость) についての知見をとりまとめて、ここに記したのではないか。

464) *ПВЛ* 1078 年記事によれば、イジャスラフ [B] は同盟諸侯とともに、1078 年にスヴァトスラフ [C] の一族とネジャタ原で戦い (Нежати́на Нива), 10 月 3 日に戦死している [ПСРЛ Т. 1: Стб. 201]。

465) *ПВЛ* 1078 年記事の末尾に「フセヴォロド [D] はキエフで父と兄に座に就いた」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 204] とされている。

466) *ПВЛ* 1093 年記事によると、フセヴォロド [D] は 1093 年 4 月 13 日に没しており [ПСРЛ Т. 1: Стб. 216]、その後、息子のウラジーミル [D1] が譲歩したことによって、イジャスラフ [B] の息子スヴァトポルク [B3] が 4 月 24 日にキエフの公座に就いた [ПСРЛ Т. 1: Стб. 218]。

467) *Ип* 1113 年記事によるとスヴァトポルク [B3] は 1113 年 4 月 16 日にキエフで病没し、その後起きた暴動をしずめるためにウラジーミル・モノマフ [D1] が招聘され、4 月 20 日に公座に就いた [ПСРЛ Т. 2: Стб. 275-276]。

スラフ<sup>468)</sup>[D11]。ムスチスラフの死後、かれの兄弟ヤロポルク<sup>469)</sup>[D15]。ヤロポルクの死後<sup>470)</sup>、オレーグ[C4]の息子フセヴォロド<sup>471)</sup>[C41]。そしてその後、ヴァチェスラフ[D16]がイジャスラフ[D112:I]とともに<sup>472)</sup>。イジャスラフ[D112:I]の死後<sup>473)</sup>、ユーリイ・ウラジーミロヴィチ[D17] (Юрги Володимиричь)。その後、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ<sup>474)</sup>[C35]。かれは追放されて<sup>475)</sup>、ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ<sup>476)</sup>[D116:J]が〔キエフの公座に〕座した<sup>477)</sup>。

### 【ノヴゴロドにおける諸公の交替：ノヴゴロド公表】 [№ 107]

[161] 見よ、次がノヴゴロドにおける〔諸公である〕。

- 
- 468) ムスチスラフ[D11]は、1125年5月19日に没した父ウラジーミル[D1]を継いで、翌5月20日にキエフの公座に就いた[ПСРЛ Т. 2: Стб. 289]。
- 469) *Ип*1133年記事によると、ムスチスラフ[D11]は1132年4月15日に没し、かれの遺言によって弟のヤロスラフ[D15]がキエフの公座に就いている[ПСРЛ Т. 2: Стб. 294]。
- 470) ヤロポルク[D15]は1139年2月18日に病没しており、かれの後は兄弟のヴァチェスラフが一時公座に就いている[ПСРЛ Т. 2: Стб. 302]が、これについては本記事では触れられていない。
- 471) フセヴォロド[C41]は1140年3月にヴァチェスラフ[D16]から讓位を受けるかたちでキエフに入城して公座に就き[ П СРЛ Т. 2: Стб. 302–303]、1146年8月1日に没しているが[ПСРЛ Т. 2: Стб. 321]、その後のキエフ支配を巡る混乱とキエフ公の乱立については本表では省略されている。
- 472) 1150年始めにイジャスラフ[D112:I]はキエフの公座に就くが、叔父のヴァチェスラフ[D16]の反感を受けて、かれに讓位している[ПСРЛ Т. 2: Стб. 398–400]。さらに1159–51年の期間、キエフの公座をめぐって、イジャスラフ[D112:I]とユーリイ[D17]の陣営の間で激しい戦いが展開され、1151年5月のルート川の戦いの勝利によってイジャスラフ陣営がキエフを獲得し、1151年の後半にイジャスラフは叔父ヴァチェスラフ[D16]と共同統治を行った[ПСРЛ Т. 2: Стб. 445]。
- 473) イジャスラフ[D112:I]は1154年11月14日にキエフで病没している[ПСРЛ Т. 2: Стб. 469]。その後、ヴァチェスラフ[D16]の采配のもとでロスチスラフ[D116:J]が、さらにイジャスラフ[C35]が短期間キエフの公座に就いているが[ПСРЛ Т. 2: Стб. 470–477]、これについては本表では省略されている。
- 474) 長年公座を狙い、キエフを攻略したこともあったユーリイ手長公[D17]は、イジャスラフ[C35]に公位を譲られるかたちで1155年3月20日にキエフに入城して安定した公座に就いた[ПСРЛ Т. 2: Стб. 478][ИПЛ: С. 29, 216]。
- 475) ユーリイ手長公[D17]がキエフで病死すると(1157年5月15日)場内で市民の暴動がおこり、チェルニゴフにいたイジャスラフ[C35]はこれに乗じて、5月19日にキエフに入城して公座に就いた[ПСРЛ Т. 2: Стб. 489–490]。
- 476) キエフ公イジャスラフ[C35]はガーリチ公ヤロスラフ[A1211]を討伐する遠征を企み付属都市ベルゴロドに移るが、ガーリチ公はムスチスラフ[I1]と同盟して反対にベルゴロドを攻撃して勝利し、イジャスラフ[C35]は、ヴィシエゴロド、ゴミイ、ヴァティチ人の地へと逃れた。1158年10月～12月のことである[ П СРЛ Т. 2: Стб. 498–502]。
- 477) イジャスラフを破ったムスチスラフ[I1]とヤロスラフ[A1211]はキエフに入城し、キエフ公としてロスチスラフ[D116:J]を招聘する[ПСРЛ Т. 2: Стб. 502–503]。かれがスモレンスクからキエフに入城し公座に就いたのは、*Ип*-1160年記事によれば、〔1159年〕4月12日のことである[ПСРЛ Т. 2: Стб. 504]。

洗礼後の最初の公は、ウラジーミルの息子ヴィシエスラフ [09](Вышеславъ)。その後、かれの兄弟ヤロスラフ [13]<sup>478)</sup>。〔ノヴゴロドの〕地を領有した。〔ヤロスラフは〕キエフへ行った。そして、ノヴゴロドにはコスニャチン・ドブリニチ<sup>479)</sup> (Коснятин Добрыниц) を代官として据えた (посади)。ヤロスラフに息子イリヤ (Илья)[Z] が生まれた。〔かれを〕ノヴゴロドに代官として据えたが、かれは死んだ<sup>480)</sup>。その後、ヤロスラフはコスニャチンに怒りを発しかれを投獄した<sup>481)</sup>。そして、自分の息子ウラジーミル [A] をノヴゴロドに代官として据えた<sup>482)</sup>。そしてヤロスラフは文書を書いて、こう言った。「この文書にしたがってお前たちは歩くがよい<sup>483)</sup>」

ウラジーミル [A] がノヴゴロドで逝去した後<sup>484)</sup>、イジャスラフ [B] は自分の息子ムススラ

---

478) ヴィシエスラフ [09] がノヴゴロド公になり、その死後にヤロスラフ [13] がノヴゴロドの公座に就いたことについては上注 423 を参照。

479) 「コスニャチン・ドブリニチ」(Коснятин Добрыниц) は、ウラジーミルの母方の伯叔父ドブリニャ (Добрыня) の息子。かれについては、*ПВЛ*1018 年記事でヤロスラフ [13] に仕え、かれを諫めるノヴゴロドの代官 (посадник) として言及されている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 143]。下注 655 も参照。

480) ヤロスラフの息子イリヤ (Илья)[Z] については、この箇所が唯一の史料における言及である。キエフ・ルーシ時代に「イリヤ」の名をもつ公はかれ以外に存在しないことから、この公そのものの存在も確かではない。ただし、本記事の著者 (編者) が公の洗礼名だけが記されているノヴゴロドの教会関係資料に拠ってこの部分を書いたとすれば、おそらく夭折したこの公が存在した可能性はある。

481) これについては、*СЛ*-1019 年記事の末尾に「そのときコンスタンティン (Костянтин) はノヴゴロドにいたが、大公ヤロスラフがかれに怒りを発し、ロストフに幽閉した。そして、3 年目 [1021 年] にオカ川沿いのムーロムにおいてかれを殺害するように命じた」[ПСРЛ Т. 6: Стб. 172] とあり、これが本記事の典拠である可能性が高い。ただし、その場合、1019 年から 1036 年 (次注) まではノヴゴロドには公も代官もない空白期間になってしまう。

482) ウラジーミル [A] は、*ПВЛ* 記事によれば、1020 年に生まれ、16 歳になった 1036 年にノヴゴロド公として据えられている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 150]。

483) この文言は「ルーシ法典」(Русская правда) について、*НЛ-М*-1016 記事にあるヤロスラフの言葉、рекъ тако: «по сеи грамотѣ ходите».[НПЛ: С. 176] とまったく同であり、これからとったのだろう。

484) ウラジーミル [A] は 1052 年 10 月 4 日に死去している [НПЛ: С. 16, 181]。その後の、1052-1054 年はノヴゴロドにおける公座の空白期だった可能性もある (次注参照)。

フ[B1]を据えた<sup>485)</sup>。そして、かれ〔ムスチスラフ〕はチェレハ川<sup>486)</sup>(Череха)で打ち破られ<sup>487)</sup>、〔かれは〕キエフへと逃げた<sup>488)</sup>。城市が占領されてのちに戦争が止んだ<sup>489)</sup>。

スヴァトスラフ[C]は自分の息子グレーブ[C1]を〔ノヴゴロドの公座に〕据えた<sup>490)</sup>。〔人々は〕かれを城市から追放した。かれ〔グレーブ〕はヴォロクの向こうへ逃げた。そしてチューズ人が〔かれを〕殺した<sup>491)</sup>。

イジャスラフ[B]の息子スヴァトボルク[B3]が〔ノヴゴロドの〕公座に座した<sup>492)</sup>。〔かれは〕

---

485) イジャスラフ[B]が最初にキエフ公になったのは、ヤロスラフ[13]が没した1054年であり、おそらくその直後に、キエフ公の権利として息子のムスチスラフ[B1]をノヴゴロドに派遣したのだろう。ただし、これについては史料に直接記されていない。ウラジーミル[A]の死去直後の1052年に、トゥーロフにいたイジャスラフ[B]が息子をノヴゴロドに派遣したという説も出されている。

486) 「チェレハ川」(Череха)は、現在のチェリョーハ(Черёха)川のこと、プスコフ州南部から北にながれ、ブコフ湖にそそぐ。

487) 「かれはチェレハ川で打ち破られ」は *Км побѣдиша на Черехи* だが *Ак, Бр* では *побѣдиша и на Черехѣ* であり、補語が示されている後者の読みを採用した。и はムスチスラフ[B1]をうける代名詞対格である。この戦いについては、本記事以外に史料には見当たらないが、1066/67年冬にポロツクからノヴゴロドに向けて遠征を行ったフセスラフ・ブリャチェスラヴィチ呪術公[0811:L]の軍隊に対して、ムスチスラフ[B1]は自ら迎撃の遠征を行い、途中の現在のプスコフ州のチェレハ(チェリョーハ)河畔で戦闘となり、フセスラフは迎撃部隊を打ち破って、そのままノヴゴロドへの遠征を続けたと考えられる(下注489参照)。

488) 「キエフへと逃げた」(*бѣжа къ Києву*)は主語が示されていないが、文脈から見て、ノヴゴロド公だったムスチスラフ[B1]のことだろう。かれはノヴゴロドの防衛を放棄して、そのとき父イジャスラフ[B]が公座に就いていたキエフへと逃げたと考えられる。

489) この「城市が占領されてのちに戦争が止んだ」(*по взятъ города преста рать*)の(*прес*)*га рать*の部分は写本でも文脈上でも不分明な読み。ひとまず *Км* に拠れば、この占領は、*НІ-С1066* 記事に「フセスラフ[0811:L]が来襲して、ノヴゴロドを占領して女と子供を〔捕虜に〕獲り、聖ソフィア〔教会〕の金を奪った」とあり、*НІ-М* では1067年の項にも対応する記事がある、ポロツク公フセスラフ[0811:L]によるノヴゴロド遠征と略奪を指している可能性がもっとも高い[Комментарии 1950: С. 396–397]。これは、1066/67年冬のことと考えられる。

490) グレーブ・スヴァトスラヴィチ[C1]は、1064年までトムタラカンに公座を得ていたが、ロスチスラフ[A1]によって追い出され(*НІ-М-1064* 記事[НПЛ: С. 184])、父スヴァトスラフ[C]のチェルニゴフに身を寄せていた。その後、1067年頃に洞窟修道院出身のニーコンの懇請によってトムタラカンの公座に復位した(*НІ-М1065* 記事[НПЛ: С. 184])。なお、1068年の銘がある「トムタラカン碑文」(*Тмутараканский камень*)には支配公と思われる「グレーブ公」(*Глѣбъ князь*)の名がある[Энциклопедия СПИ-5: С. 122–123]。だが、1069年にはおそらくキエフ公に復位したイジャスラフ[B]の要請によって、1067年以降公座が空白だったノヴゴロドに公座を移したと考えられる。*НІ-С1069* 年記事では、1069年10月には、再度ノヴゴロドに来襲したフセスラフ[0811:L]を、グレーブ[C1]はノヴゴロド人とともに打ち破っている[НПЛ: С. 17]。

491) *НІ1079* 年記事では1079年5月30日の出来事[НПЛ: С. 18, 201]。ただし、記事には「追放」について「チューズ人」が殺したことについての記録はない。

492) *Н4-1079* 記事では、この年にフセヴォロド[D]がキエフ公となったことにかかわり、スヴァトボルクがノヴゴロドの公座に就いている。



キエフに行った<sup>493)</sup>。フセヴォロド [D] が自分の孫でウラジーミル [D1] の息子のムスチスラフ [D11] を〔ノヴゴロドへ〕派遣した。〔ムスチスラフは〕一年間公支配してから、ロストフへ行った。ダヴィド [C3] が公支配のためにノヴゴロドにやってきた<sup>494)</sup>。2年後に〔ノヴゴロド人は〕かれ〔ダヴィド〕を追放した。ムスチスラフ [D11] が再びやってきた<sup>495)</sup>。そして、〔ムスチスラフは〕ノヴゴロドで20年間公座に座した<sup>496)</sup>。かれは、父のもとに行った。そして、父の公座に就いた<sup>497)</sup>。

そして、〔ムスチスラフは〕自分の息子のフセヴォロド [D11] をノヴゴロドに据えた<sup>498)</sup>。フセヴォロド [D11] は20年間〔ノヴゴロドの公座に〕座した<sup>499)</sup>。〔ノヴゴロド人は〕かれを追放して<sup>500)</sup>、オレーグ [C4] の息子スヴァトスラフ [C43] を〔ノヴゴロドへ公として〕連れてきた<sup>501)</sup>。かれは2年間〔公座に〕座して、〔ノヴゴロド人は〕かれを追放した<sup>502)</sup>。そして、ウラジー

493) フセヴォロド [D] が1093年に没したため、キエフ公に招かれ1093年4月24日にキエフに到着した [ПСПЛ Т. 1: Сгб. 218]。

494) *HI-C* 6603(1095) 記事では、スヴァトボルク [B3] とウラジーミル [D1] がスモレンスクのダヴィド [C3] を攻める遠征を行い、ダヴィド [C3] はスモレンスクから退いて、ノヴゴロド公になっている。

495) *H4* の6603年記事では、この年が終わる頃、すなわち1096年の1月～2月にダヴィド [C3] はスモレンスクに戻っており、そのためノヴゴロド人はロストフに行きムスチスラフ [D11] を招請し、ノヴゴロドに連れてきたと書かれている。

496) *HI-C* 1117年記事ではムスチスラフ [D11] は1117年3月17日にキエフに向かっている [НПЛ: С. 20]。前注で1096年2月にノヴゴロド公になったとすると、1117年3月までだとちょうど20年(21年?)になる。

497) *In* 1117年記事によれば、父ウラジーミルの命令でノヴゴロドからベルゴロドに公座を移したのである [ПСПЛ Т. 2: Сгб. 284]。ただ前注の *HI-C* 1117年記事では「公座に〔就くため〕ノヴゴロドに行った」 [НПЛ: С. 20] と、あたかもキエフ公になったかのような書き方がされており、本記述はこれに拠り、誤解して「父の公座に就いた」と記したのだろう。

498) *HI-C* の前注の記事に続いて「〔ムスチスラフは〕ノヴゴロドに息子のフセヴォロド [D11] を公座に就けた」 [НПЛ: С. 20] とあり、文字通りここからとっている。

499) *HI-C* 1136年記事によると、1136年5月28日にノヴゴロド人の追放謀議によってフセヴォロド [D11] は家族ともに幽閉され、7月15日に追放されている [НПЛ: С. 24]。1117年～1136年の期間の在位だから20年になる。

500) *HI-C* 1136年記事では前注のフセヴォロドを幽閉したのち、ノヴゴロド人はフセヴォロドの息子ウラジーミル [D113] を受け入れているが、7月にウラジーミルは父フセヴォロドとともに追放されている。実質2か月の支配であり、本表には加えられていない。

501) *In* 1138年記事ではフセヴォロドの追放に続いてすぐに「スヴァトスラフ・オリゴヴィチを自分たちのもとに連れてきた」とある [ПСПЛ Т. 2: Сгб. 300]。並行記事は *HI-C* 1136年記事にあり、そこでは1138年7月19日にスヴァトスラフがノヴゴロドに到来している [НПЛ: С. 24]。

502) *HI-C* 1138年記事によると、1138年4月17日にスヴァトスラフはノヴゴロドを追放され、在位は「2年に3ヶ月欠ける」期間と記されている [НПЛ: С. 25]。

ミル [D1] の孫ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] を連れてきた<sup>503)</sup>。

かれは1年と4ヶ月〔公座に〕座した。そして城市から逃げ去った<sup>504)</sup>。オレーグ [C4] の息子スヴァトスラフ [C43] が再び連れてこられた<sup>505)</sup>。かれは1年〔公座に〕座して、城市から逃げ去った<sup>506)</sup>。ユーレイ [D17] の息子ロスチスラフ [D171] が再び連れてこられた<sup>507)</sup>。

しばらく後に<sup>508)</sup>、スヴァトボルク [D114] がやってきた<sup>509)</sup>。〔ノヴゴロド人は〕ロスチスラフ [D171] に道を示した<sup>510)</sup>。スヴァトボルク [D114] は公座に座した。1年間座すと、たちまちかれの兄弟のイジャスラフ [D112:I] がかれをルーシへ召喚した<sup>511)</sup>。そして、自分の息子のヤロスラフ [I2] を〔ノヴゴロドへ〕派遣した<sup>512)</sup>。

---

503) スヴァトスラフの追放については、*In*1138 記事にもあり、続いてロスチスラフ [D171] を公座に就かせたとある [ПСРЛ Т. 2: Стб. 301]。HI-C1138 年記事には5月10日に「ウラジーミルの孫、ユーレイの息子ヤロスラフ (Ярославъ)」がノヴゴロドの公座に入ったとあるが (HI-M も同じ)、これは明らかに「ロスチスラフ」の誤記である [НПЛ: C.25]。

504) HI-C1139 年記事に「ロスチスラフが〔1139年〕9月1日にノヴゴロドからスモレンスクの父のもとへと逃げ去った」[НПЛ: C.25] あり、続いて HI-M1139 年記事で「1年と4ヶ月座した」[НПЛ: C.211] (HI-C は「8年4ヶ月」とあるがこれは誤り) と記されており、本記事に対応している。

505) HI-C1139 年記事によれば、スヴァトスラフの復位は1139年12月25日である [НПЛ: C.25]。

506) HI-C1141 年記事では1141年4月にキエフ公フセヴォロド [C41] がスヴァトスラフ [C43] をキエフに召喚し、息子 (スヴァトスラフ [C411:G]) をノヴゴロド公に据えようとした。スヴァトスラフは交代期間にノヴゴロド人が裏切るのを恐れて、すぐさま逃げ去っている [НПЛ: C.26]。スヴァトスラフ [C43] の在位期間は1139年末から数えると1年3ヶ月だが、ここでは「1年」としている。

507) HI-C1141 年記事によれば、スヴァトスラフ [C43] の逃走から9か月後に、ノヴゴロド人がユーレイ [D17] に公座就位を請願したが、ユーレイは自分の代わりに息子ロスチスラフ [D171] を送り、1141年11月26日にノヴゴロドに入城した [НПЛ: C.26]。

508) これはロスチスラフ [D171] の在位期間になるが、HI-C1142 年記事によれば4ヶ月である [НПЛ: C.26]。

509) HI-C1142 年記事では、スヴァトボルク [D114] は1142年4月19日にノヴゴロドに来ている [НПЛ: C.26]。

510) 「道を示した」(показаша путь) は、自主的な退去を促したということ。この時の公座交代の原因はユーレイ [D17] がノヴゴロド人への誓いを破ったことにあり [НПЛ: C.26]、ロスチスラフ [D171] には直接の非はなかったため、このような表現になったのだろう。

511) HI-C1148 年記事では、イジャスラフ [D112:I] は「スヴァトボルク [D114] をその悪行ゆえに〔ノヴゴロドから〕斥けた (выведе злобы его ради)、かれにヴラジミルを与えた」[НПЛ: C.26] とある。

512) HI-C1148 年記事で1148年の秋にキエフからヤロスラフ [I2] が派遣されている [НПЛ: C.26]。

かれは [I62] 1年間〔公座に〕座した<sup>513)</sup>。ノヴゴロド人はかれを追放した<sup>514)</sup>。そして、ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] を連れてきた<sup>515)</sup>。そして、1年間〔公座に〕座して、〔ロスチスラフは〕ルーシに行った。〔そのときロスチスラフは〕自分の息子のダヴィド [J3] を〔ノヴゴロドに〕残していった<sup>516)</sup>。かれ〔ダヴィド〕に対しては、かれ〔ロスチスラフ〕の後を〔追って行くよう〕道を示された<sup>517)</sup>。そして、ムスチスラフ・ユーリエヴィチ [D17A] が連れてこられた<sup>518)</sup>。

そして、〔ムスチスラフは〕2年1か月〔公座に〕座して、〔ノヴゴロド人は〕かれ〔ムスチスラフ〕を追放した<sup>519)</sup>。そして、ロスチスラフ [D116:J] を再びスモレンスクから連れてき

513) 原文は сѣдив лѣто (1年間座した) だが、ヤロスラフ [I2] は、1148年秋から1154年3月までの約5年半という長い間支配公を勤めていた。сѣдив лѣто は前後に同様の表現があることから、不注意で繰り返されたのではないかと推定している。

514) *HI-C1154* 年記事によると、1154年の3月26日にヤロスラフ [I2] は追放されている [НПЛ: C.29]。これについては *Леп*1154 年記事全く同じ文言がある。この追放についてソロヴィヨフはヤロスラフが市民との約定を破ったことが原因と推定しており [Соловьев 1988: C. 480]。ヤーニンが都市内の貴族の対立によるものではなく、公の抑圧に反発した民衆の暴動によるものではないかと考えている [Янин 1962: C. 99]。

515) *HI-C1154* 年記事では、前注の追放に続いて、「ムスチスラフ [D11] の息子ロスチスラフ [D116:J] を4月17日に連れてきた」 [НПЛ: C.29] とあり、本記事はこれに拠っている。なお、*In* 1154 年記事ではこれと異なり「ノヴゴロド人たちはヤロスラフ [I2] を追放し、ロマンを〔公座に〕据えた」 [ПСРЛ T. 2: Стб.469] とある。この「ロマン」は、ロスチスラフ [D116:J] の息子 [J1] を指すと思われるが、通説では、ロマン [J1] のノヴゴロド公就位は重視されておらず、*HI* 記事のロスチスラフ [D116:J] がノヴゴロドの公になったとされている。ただし、*In* 記事によれば、1154年11月のイジャスラフ [D112:I] の死のときに、ロスチスラフ [D116:J] はスモレンスクに滞在していることから考えて、ロスチスラフは息子のロマン [J1] を代官として短期にノヴゴロドに派遣した可能性はある。

516) *HI-C1154* 年記事によれば、1154年11月14日のキエフ公イジャスラフ [D112:I] の死を契機に、ロスチスラフ [D116:J] はキエフの公座に就くためにノヴゴロドを離れ (1154年末)、息子のダヴィド [J3] をノヴゴロドに残したとある [НПЛ: C. 29]。本記事はこれに拠っている。

517) *HI-C1154* 年記事では続いて、ロスチスラフ [D116:J] に不満だったノヴゴロド人は「かれのあとからかれの息子〔ダヴィド [J3]〕を追放した」 [НПЛ: C. 29] とあり、ダヴィド [J3] は1155年の1月にはノヴゴロドを去ったことになる。1ヶ月ほどの在位だった。

518) 前注の記事に続いて *HI-C1154* 年記事ではノヴゴロド人は大主教ニーフォントをスーズダリのユーレイ [D17] のもとに「その息子を迎えるために派遣した。そして、ユーレイの子ムスチスラフ [D17A] を連れてきた。〔1155年〕1月30日のことだった」 [НПЛ: C. 29] とある。これは、ロスチスラフ [D116:J] の政敵を味方につけることによって、その報復を防ごうとしたのだろう。

519) *HI-C1157* 年記事では、ノヴゴロド人の内争が激しくなり、ロスチスラフ派の導きによって、二人の息子スヴァトスラフ [J4] とダヴィド [J3] がノヴゴロドに入城し、対抗できなくなったムスチスラフ [D17A] はノヴゴロドから逃げ出した [НПЛ: C. 30]。年代記には日付はないが、本記事のムスチスラフの在位期間「2年1ヶ月」から換算すると、1155年1月30日 (前注) から1157年2月までの間在位して、3月に逃走したことになる。

た<sup>520</sup>。そして〔ロスチスラフは〕自分の息子スヴァトスラフ [J4] を〔ノヴゴロドの公座に〕据え<sup>521</sup>、自分は公座に〔就くために〕キエフへ行った<sup>522</sup>。

そして、スヴァトスラフ [J4] が追放され、ユーリイ [D17] の孫のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [D1711] が連れてこられた<sup>523</sup>。そして、かれは1年間〔公座に〕座した<sup>524</sup>。そして、〔かれの〕父方の叔父<sup>525</sup>〔アンドレイ [D173]〕がその意志によってかれ〔ムスチスラフ [D1711]〕を〔ノヴゴロドの公座から〕斥けた<sup>526</sup>。そして、スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] が再び連れてこられた<sup>527</sup>。

---

520) 前注の HI-C1157 年記事の続きで、ムスチスラフ [D17A] の逃亡の「3日ののちには〔スモレンスクからノヴゴロドは近い〕ロスチスラフ [D116:J] が自ら〔ノヴゴロド城市〕に入り、兄弟たちも集まった〔スヴァトスラフ [J4] とダヴィド [J3] のことだろう〕。いかなる悪行も〔ノヴゴロドには〕なかった」[HIIJ: C. 30] とある。1157 年の3月にはノヴゴロドはロスチスラフ派の優勢によって平穏を取り戻したことになる。

521) HI-C1158 年記事によれば、「ロスチスラフ [D116:J] がスモレンスクへ行き、一方でかれは自分の息子のスヴァトスラフ [J4] をノヴゴロドの公座に就け、ダヴィド [J3] はノーヴィ・トルグの公座に就けた」[HIIJ: C. 30] となっている。これは HI-C1158 年記事の冒頭に置かれており、時間系列から見て、1158 年3月～4月頃の出来事だろう。なお、この時点ではまだロスチスラフのキエフ行きとは関係がない。

522) ロスチスラフ [D116:J] がキエフをめぐる諸公の政争ののちに、ムスチスラフ [I1] 等の招請を受けてスモレンスクからキエフへ行き、キエフの公座に座すのは1159 年4月12日のことである [ICPJ T. 2: C. 504]。

523) HI-C1160 年記事によれば、ノヴゴロド人はノヴゴロド公だったスヴァトスラフ [J4] をラドガに追放し、1160 年6月21日にムスチスラフ [D1711] を〔公座に〕引き入れたとしている [HIIJ: C.30-31]。スヴァトスラフ [J4] は2年と数か月ノヴゴロドの公座に座していたことになる。なお、In1161 年記事では、スヴァトスラフ [J4] 追放劇が詳しく記されたあとで、アンドレイ愛神公 [D173] がノヴゴロドの使節の要請に応じて、初めに弟のムスチスラフ [D17A] をノヴゴロド公に据えようとしたが、すでに過去に公だったことを理由に使節に拒まれ、最終的には甥のムスチスラフ [D1711] を据えることになった [ICPJ T. 2: Cr6.510-511] と経緯が書かれている。

524) 次注の HI-C1161 年記事の続きに〔ムスチスラフ [D1711]〕は「1年に1週間足りない期間〔ノヴゴロドの公座に〕座していた」とあり、本記事はこれに対応する。ムスチスラフの公座就位は1160 年6月21日（前注）だから、「斥けられた」（追放された）のは正確には1161 年6月14日前後ということになるだろう。

525) ここで「アンドレイ愛神公」[D173] の名を直接出さず、「父方の叔父」(строи) の語を使っているのは、スーズダリ＝ウラジーミル公国の創建者であり、ノヴゴロドを攻撃したアンドレイに対する筆者（本表の作成者）の反発のあらわれだろう。

526) HI-C1161 年冒頭記事によれば、「ロスチスラフ [D116:J] とアンドレイ [D173] がノヴゴロドについて合意し、ユーリイ [D17] の孫ムスチスラフ [D1711] を斥けた」とある [HIIJ: C. 31]。

527) 前注の HI-C1161 年記事の続きで「スヴァトスラフ [J4] を再びその自由な意志によって〔公に〕たてた。〔1161 年〕9月28日のことだった」[HIIJ: C. 31] としている。

そして、〔スヴァトスラフ [J4]〕は城市から逃げ出した<sup>528)</sup>。そして、イジャスラフ [D112:I] の孫であるロマン・ムスチスラヴィチ [I11] が連れてこられた<sup>529)</sup>。その後リューリク・ロスチスラヴィチ [J2] が〔ノヴゴロドの公座に〕座した<sup>530)</sup>。その後、ユーリイ・アンドレエヴィチ [D1733] が座した<sup>531)</sup>。そして、ユーリイ [D1733] のあとは、ユーリイ [D17] の曾孫 (внук) であるスヴァトスラフ・ムスチスラヴィチ [D17111]<sup>532)</sup>。

その後、かれの父ムスチスラフ無眼公 (Безокий)[D1711]<sup>533)</sup>、その後ユーリイ [D17] の孫ヤ

528) *HI-C1167* 年記事によれば、「この年にスヴァトスラフ公 [J4] がノヴゴロドを出てルーキに行き、ノヴゴロドに使者を遣って〈わしはお前たちのもて公でありたくない〉と言った」〔НПЛ: C. 32〕とある。同じ年の記事に「聖シメオンの日」(9月1日)から公がいなくなったとあることから、スヴァトスラフ [J4] の逃亡は1167年9月1日のことと考えられる。

529) *HI-C1168* 年記事の冒頭に「イジャスラフ [D112:I] の孫、ムスチスラフ [I1] の息子ロマン [I11] が公座に就くためにノヴゴロドにやってきた。〔1168年〕4月14日のことだった」とある〔НПЛ: C. 33〕。

530) *HI-C1170* 年記事に「リューリク・ロスチスラヴィチ公 [J2] がノヴゴロドにやって来た。10月4日のことだった」〔НПЛ: C. 33〕とある。かれは、*HI-C1171* 年記事によれば、「この年の冬〔1171/72年〕にノヴゴロドから出た」〔НПЛ: C. 34, 220〕。*Лер* 1174年記事では「リューリクはノヴゴロドから逃げ出した」(Выбъже Рюрикъ из Новгорода)とある〔П СРЛ Т. 1: Стб. 365〕。リューリク [J2] のノヴゴロド退去は、ノヴゴロド内部の親アンドレイ [D173] の貴族によって半ば追放されたか、あるいは、アンドレイ [D173] の間接的な指示によるものだろう。

531) *HI-1172* 年記事の冒頭に「ユーリイ [D17] の孫、ユーリイ・アンドレエヴィチ [D1733] がノヴゴロドにやって来た」〔НПЛ: C. 34〕とあり、記事の系列から見て、1172年3月以降の春のことである。

532) *HI-1175* 年記事の冒頭に「〔ノヴゴロド人は〕アンドレイ [D173] の息子ユーリイ公 [D1733] をノヴゴロドから追放した。他方ムスチスラフ [D1711] は自分の息子をノヴゴロドに据えた」〔НПЛ: C. 34, 223〕とあり、この「息子」あとの記事からスヴァトスラフ [D17111] であることが分かる。これは、記事の時系列から判断して1175年3月以降の春のことである。

533) の前注の *HI-1175* 年記事の続きに「同じ年、自分〔ムスチスラフ [D1711]〕はノヴゴロドに来た。自分の叔父ミハルコ [D175] と戦ったのである。そして、ノヴゴロドの公座に就いた」〔НПЛ: C. 34, 223〕とある。これは、ムスチスラフが1175年6月15日のヴラジミル郊外で戦いに敗れて (*Лер* 1176年記事〔ПСРЛ Т. 1: Стб. 377〕)、ノヴゴロドに逃げ帰り、息子の公座に自ら就いた(6月後半)のである。なお、「無眼公」(Безокий)の通称は、のちに囚われて、1177年に城市ヴラジミル=ザレスキイで民衆の手で目を潰されたことによっている。

ロスラフ美麗公 (Красныи)[D17A1]<sup>534)</sup>, その後再び無眼公 [D1711]<sup>535)</sup>。かれが逝去すると、かれの兄弟ヤロポルク [D1712] がトルジョクから連れてこられた<sup>536)</sup>。それから、ボリス・ロマノヴィチ [J13] が〔連れてこられた〕<sup>537)</sup>。ボリスのあとは、かれの父ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が入城した<sup>538)</sup>。その後、かれ〔ロマン〕の兄弟のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ勇猛公 (Храбрыи)[J5]<sup>539)</sup>。ムスチスラフ [J5] のあとウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2]<sup>540)</sup>。

その後〔ウラジーミル [G2] の〕父スヴァトスラフ [C411:G]<sup>541)</sup>, かれはオレーグ [C4] の孫で

534) *Лер* 1177 年記事では、ムスチスラフ [D1711] はミハルコ [D175] の死に乗じて再度ウラジミル奪還を策すが失敗してノヴゴロドへ逃げた (1176 年 6 月 27 日 [ПСРЛ Т. 1: Стб. 382])。HI-1176 年記事によれば、逃げ帰ったムスチスラフをノヴゴロド人は受け入れず「息子のスヴァトスラフ [D1711] とともに道を示した〔追放した〕。そして、ノヴゴロド人はフセヴォロド [D177:K] のもつからヤロスラフ・ムスチスラヴィチ [D17A1] を自分たちのもとに受け入れた」[НПЛ: С. 34, 223]。これは、1176 年 7 月頃のことだろう。「美麗公」(Красныи)の通称はこの箇所が出典と思われるが、その理由は不明。

535) HI-1177 年記事に、冬 (1177/78 年) に敗北して盲目にされたムスチスラフ [D1711] とヤロポルク [D1712] が「ノヴゴロドにやって来た。ノヴゴロド人はムスチスラフ [D1711] を公座に、ヤロポルク [D1712] はノーヴィ・トルグ (トルジョク) の公座に、ヤロスラフ [D17A1] はヴォロク・ラムスクの公座に据えた。これは〔ノヴゴロド人の〕意志による裁量だった」[НПЛ: С. 35, 225] としている。

536) HI-1178 年記事冒頭で、4 月 20 日にムスチスラフ [D1711] が逝去し、兄弟のヤロポルク [D1712] がノヴゴロドの公座に就いたとある [НПЛ: С. 35, 225]。

537) ヤロポルク [D1712] の退位については、HI-1178 年即位記事のあとに「するとフセヴォロド [D177:K] はノヴゴロド商人をとらえた。そこで〔ノヴゴロド人は〕ヤロポルク [D1712] に道を示した」[НПЛ: С. 36, 225] とあり、フセヴォロド大巢公の圧力に屈したことが分かる。ヤロポルクの在位は非常に短期間だったのだろう。

ボリス・ロマノヴィチ [J13] の即位については HI をはじめ年代記には記述はない。父ロマン [J1] が入城 (次注) するまで間があることから、それまでの期間 (1178 年 5 月頃～1179 年 2 月始め)、先行してノヴゴロドに派遣され、過渡的に公座に就いていたのではないか。

538) HI-1178 年記事の末尾に「ノヴゴロド人はロマン [J1] を呼びにスモレンスクに使者を遣った。〔ロマンは〕大斎第一週に〔1179 年 2 月 11～18 日〕やって来て〔ソフィア〕聖堂に入った」[НПЛ: С. 36, 225] とある。スーズダリのフセヴォロド大巢公 [D177:K] の意を受けたのだろう。

539) HI-1179 年記事に「この年〔夏〕、ロマンがノヴゴロドからスモレンスクへ行った。そのとき、ノヴゴロド人はかれの兄弟ムスチスラフ [J5] を招聘するためルーシ〔スモレンスクのこと〕へ使者を遣った。ムスチスラフはクジマとダミアンの日、〔1179 年〕11 月 1 日にノヴゴロドに入った」[НПЛ: С. 36, 225] とある。この招聘の経緯は *In*1178 年記事 [ПСРЛ Т.2: Стб.606-607] に詳しい。

540) HI-1180 年記事によれば、ムスチスラフ [J5] が 1180 年 6 月 14 日にノヴゴロドで死去し、ノヴゴロド人は「ルーシ〔チェルニゴフのこと〕のスヴァトスラフ [C411:G] のもとに息子を招聘するために使者を遣り、ウラジーミル [G2] を連れてきて、〔1180 年〕8 月 17 日に公座に据えた」[НПЛ: С. 36, 226] とある。

541) HI-1180 年記事の後半部で、スヴァトスラフ [C411:G] とウラジーミル [G2] はそれぞれフセヴォロド [D177:K] 討伐の遠征を行い、ノヴゴロド人 300 人が殺されている。その関係でウラジーミル [G2] の支配だけでは不十分と見たのだろう、ノヴゴロド人はスヴァトスラフ [C411:G] 自身をノヴゴロド公として迎え入れている (1180/81 年冬) [НПЛ: С. 36, 226]。ただし、息子ウラジーミル [G2] もノヴゴロドに残ったようである。

ある。スヴァトスラフ [C411:G] のあとはヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153]<sup>542)</sup>、かれはフセヴォロド [D177:K] の姻戚 (своякъ) である<sup>543)</sup>。それからムスチスラフ・ダヴィドヴィチ [J32]<sup>544)</sup>。それから再びヤロスラフ [D1153]<sup>545)</sup>。それから、オレーグ [C4] の孫にあたるヤロポルク・ヤロスラヴィチ [C4122] が連れてこられた<sup>546)</sup>。それから再び、フセヴォロド [D177:K] の姻戚であるヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153] がノーヴィ・トルグから連れてこられた<sup>547)</sup>。

それからユーレイ [D17] の孫で大いなる (Великий) フセヴォロド [D177:K] の息子スヴァト

---

542) *HI*-1181 年記事によれば、フセヴォロド大巢公 [D177:K] がノヴゴロド領トルジョクを包囲攻撃して陥落させ、トルジョク公だったヤロポルク [D1712] を捕虜とした。その頃 (1181 年夏)、スヴァトスラフ [C411:G] はキエフ公になっており、ノヴゴロドには息子ウラジーミル [G2] が残された。公の支配の弱体化を恐れたノヴゴロド人はフセヴォロド側につくことにして、ウラジーミルを追放し (*Ип* では 1181 年秋、*HI* では 1181/82 年冬)、「フセヴォロド [D177:K] のもとに使者を遣って、公の派遣を求めた。フセヴォロドは自分の姻戚〔ヤロスラフ [D1153]〕を与えた」[НПЛ: C. 37, 227] とある。

543) この「姻戚」(своякъ) の関係について直接的な史料はないが、フセヴォロド大巢公 [D177:K] は妻 (ヤース人のマリア) の姉妹を積極的に政略結婚に使っており、ヤロスラフ [D1153] の妻もマリアの姉妹だったと推定されている [Домбровский 2015: C. 614-616]。

544) *HI-C*-1184 年記事によれば「フセヴォロド [D177:K] は人を派遣して、姻戚のヤロスラフ [D1153] をノヴゴロドから連れ出させた。ノヴゴロド人はかれ〔ヤロスラフ〕に憤慨していた。かれはノヴゴロドの領地に多くの悪事を行ったからである」。それに続いて「〔ノヴゴロド人は〕評議すると、スモレンスクのダヴィド [J3] のもとに使者を遣って息子を〔公座に〕要請した。かれらにムスチスラフ [J32] を与えた。かれをノヴゴロドに連れてきて公座に据えた。〔1184 年〕9 月のことだった」[НПЛ: C. 37] とある。

545) *HI-C*-1187 年記事によれば「ノヴゴロド人はムスチスラフ・ダヴィドヴィチ [J32] を追放した。そしてヴラジミルのフセヴォロド [D177:K] のもとに、ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153] を招聘する使者を遣った。かれはノヴゴロドに入り、〔1187 年〕11 月 20 日に公座に就いた」[НПЛ: C. 38-39, 229] とある。

546) ヤロスラフ [D1153] の在位は 9 年間続いたが、ノヴゴロドの内争のなかで 1196 年秋 (11 月 26 日) にノヴゴロドから「道を示されて」追放され、トルジョクへ行った。そして、チェルニゴフのヤロスラフ [C412] のもとに使者を遣り、息子を招請したが、ひと冬のあいだ〔1196/97 冬〕公なしだった (*HI-C*-1196 年記事 [НПЛ: C. 43, 236])。そして、*HI-C*-1197 年記事で「ヤロポルク・ヤロスラフヴィチ [C4122] が 3 月の聖枝祭〔1197 年 3 月 30 日〕にチェルニゴフからやって来た」[НПЛ: C. 43, 237] とある。

547) 前注の *HI*-1197 年記事に続いて、ヤロポルク [C4122] は「聖枝祭からシメオンの日〔1197 年 9 月 1 日〕まで〔公座に〕座した。それから、ノヴゴロドからかれを追放し、再びヤロスラフ [D1153] を〔*HI-M* では「トルジョクから」〕招請する使者を〔*HI-M* では「ヴラジミル〔のフセヴォロド [D177:K]〕のもとに〕遣った。(…)ヤロスラフ [D1153] は冬の神現祭の一週間後〔1198 年 1 月 13 日〕に到来して、自分の公座に座した」[НПЛ: C. 43, 236] とある。

スラフ [K6] が連れてこられた<sup>548)</sup>。それからフセヴォロド [D177:K] は自分の年長の息子コンスタンティン [K1] を〔ノヴゴロドの公座に〕与えた<sup>549)</sup>。そして、コンスタンティン [K1] は連れ出され、〔フセヴォロドは〕再びスヴァトスラフ [K6] を〔ノヴゴロドの公座に〕与えた<sup>550)</sup>。そして、ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] がトルジョクへやって来て、かれ〔ムスチスラフ〕がノヴゴロドへ連れてこられた<sup>551)</sup>。

それから<sup>552)</sup> ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [K4]<sup>553)</sup>。そして再びムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51]<sup>554)</sup>。それからロマン [J1] の孫であるスヴァトスラフ・ムスチスラヴィチ [J121]<sup>555)</sup>。

548) *HI*-1199年記事の冒頭に「フセヴォロド [D177:K] は使者を遣って、ヤロスラフ [D1153] をノヴゴロドから連れ出し、自分のところに連れてこさせた」。さらに、ノヴゴロドから使節団を呼び寄せ、かれらに「自分の息子スヴァトスラフ [K6] を与えた」[HPII: C. 44, 238]とある。*Леп*-1200年記事にはスヴァトスラフがウラジミールを出発したのは〔1199年〕12月12日であり[PCPI T. 1: Cr6. 416]、*HI*-1199年記事では「スヴァトスラフ公は〔1200年〕1月1日の聖ヴァシーリイの日〔*HI-M*では1月30日〕にノヴゴロドにやって来た」[HPII: C. 44, 238-239]とあり、ウラジミールからノヴゴロドまでの行程が18日（*HI-M*では48日になる）であったことが分かり興味深い。

549) *HI*-1205年記事に「大なるフセヴォロド公 [D177:K] がノヴゴロドに使者を遣り、こう言った。〈そなたたちの地で戦争が起こっている。そなたたちの公でわしの息子スヴァトスラフ [K6] は年少である。わしの最年長の息子コンスタンティン [K1] を与える〉」[HPII: C. 49-50, 246]とある。当時スヴァトスラフ [K6] は10歳ほどだった。コンスタンティン [K1] は20歳ほどで、1205年3月20日にノヴゴロドに到着している。

550) *HI*-1209年記事に「フセヴォロド [D177:K] は自分の息子スヴァトスラフ [K6] をノヴゴロドに遣った。断肉の主日〔1210年2月21日〕だった」[HPII: C. 51, 248]とある。

551) *HI*-1210年記事に、「この年の冬〔1210/11年冬〕ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] がトルジョクに到来して、スヴァトスラフ [K6] の士族（ドヴォリャネ）たちを捕らえ」[HPII: C. 51, 249]で、ノヴゴロドを自分の「父の地」（世襲領）として要求した。ノヴゴロド人はこれに迎合して、スヴァトスラフ [K6] を監禁し、ムスチスラフを公座につけた。その後、ムスチスラフとフセヴォロド [D177:K] との交渉によって、スヴァトスラフは解放された。これは、1211年2月までに起こった出来事と考えられる。

552) ここから暫くは公の名が羅列されているだけであり、依拠した資料が変わった可能性がある。

553) *HI*-1215年記事によると「ムスチスラフ [J51] は自分の意志でキエフへ行った」[HPII: C. 53, 252]。これは1215年3～5月のことである。これを受けて、ノヴゴロド人はウラジミールに使者を遣り、ヤロスラフ [K4] を公として迎え入れている。

554) *HI*-1215年記事によれば、ヤロスラフの在位期は自然災害とかれの悪政によって国が乱れ、1216年2月11日に「ムスチスラフ [J51] はこの災いを知ってノヴゴロドに入り」、トルジョクにいたヤロスラフを追放して公座に就いた [HPII: C. 54, 253-254]。

555) *HI*-1218年記事によれば、ムスチスラフ [J51] は民会に対して「自分はガーリチの公位を得たい」と言って、ノヴゴロド人の引き留めにもかかわらずノヴゴロドを去った [HPII: C. 57, 258-259]。そのため、「ノヴゴロド人はスヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ〔ムスチスラヴィチの誤り〕 [J121] を招聘するためモレンスクに使者を遣り、かれは〔1218年〕8月1日にノヴゴロドに来た」[HPII: C. 58]。



それから、かれ〔スヴァトスラフ〕の兄弟のフセヴォロド [J122]<sup>556)</sup>。それから、フセヴォロド [D177:K] の孫のフセヴォロド・ユーリエヴィチ [K31]<sup>557)</sup>。それから再びヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [K4]<sup>558)</sup>。再びフセヴォロド・ユーリエヴィチ [K31]<sup>559)</sup>。それから、オレーグ [C4] の末裔 (Олговъ внукъ) のミハイル・フセヴォロドヴィチ [C41]<sup>560)</sup>

[I63] そして再びヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ<sup>561)</sup> [K4]。そして再びミハイル・フセヴォロドヴィチ<sup>562)</sup> [G41]。そして〔ミハイルは〕自分の息子ロスチスラフ [G411] を〔ノヴゴロドの〕

556) *HI*-1219 年記事冒頭に、「ムスチスラフ・ロマノヴィチ大公 [J12] が、キエフから自分の息子フセヴォロド [J122] を〔ノヴゴロドへ〕派遣して言った。〈フセヴォロドを受け入れよ。兄のスヴァトスラフ [J121] をわしのもとに来させよ〉。ノヴゴロド人はその意志の通りにした」[HPL: C. 59, 260]とあり、キエフ公（父親）の指示による公座交代であったことが分かる。1219 年 3 月以降の春のことである。

557) *HI*-1221 年記事に「ノヴゴロド人はフセヴォロド [J122] を追放して言った。〈われらはあなたを望まない。好きなところに行け〉。かれはルーシ(キエフ)の父のもとに行った」[HPL: C. 60, 262]とあり、1221 年に追放された。翌 *HI*-1222 年の冒頭記事では、ノヴゴロド人はヴラジミルのユーレイ・フセヴォロドヴィチ [K3] のもとに使者を遣り、「〔ユーレイは〕ノヴゴロド人の総意によりかれらにフセヴォロド公 [K31] を与えた」[HPL: C. 60, 262]とある。1222 年 3 月以降の春のことである。

558) *HI*-1222 年記事の末尾によれば、フセヴォロド [K31] は冬〔1222/23 年冬〕に「密かに自分の士族とともにノヴゴロドから逃げ出した。ノヴゴロド人は〔ヴラジミルの〕ユーレイ [K3] のもとに上級家臣を遣って〔請願した〕。〈あなたの息子たちがノヴゴロドを支配するのに支障があるなら、兄弟を与えよ〉。〔ユーレイは〕自分の弟のヤロスラフ [K4] を与えた」[HPL: C. 61, 263]とある。ヤロスラフ [K4] は 1223 年の 3 月頃にノヴゴロドに来ている。

559) *HI*-1223 年記事によれば、ヤロスラフ [K4] は遠征で得た戦利品を手にベレスラヴリに行ってしまう（1123 年末～1124 年初）。「ノヴゴロド人はユーレイ [K3] のもとに息子を招請する使者を遣り、〔ユーレイは〕自分の息子フセヴォロド [K31] を与えた」[HPL: C. 61, 263]。フセヴォロドは 1224 年の春（3 月以降）にノヴゴロドに到着している。

560) *HI*-1224 年記事によれば、1224 年末に、ノヴゴロド内の反ヴラジミル勢力討伐のため、フセヴォロド [K31] はトルジョクに移り、父のユーレイ [K3] と一族諸公が大軍を率いてトルジョクに兵を布いて威嚇した。そして、ノヴゴロド人との交渉の結果、ユーレイの姻戚にあたるミハイル [G41] をノヴゴロド公に据えることを承知させた。ミハイル [G41] は 1225 年春（3 月以降）にノヴゴロドに来ている [HPL: C. 64, 268]。

561) *HI*-1225 年記事によれば、ミハイル [G41] は着座まもなく、ノヴゴロドとトルジョクの貢税を取めるためにヴラジミルのユーレイ [K3] のもとに行き、ノヴゴロドに帰ると「自分はお前たちのところで公支配したくない、チェルニゴフへ行く」と言って公座を去った。ノヴゴロド人はすぐにベレスラヴリのヤロスラフ [K4] に招聘の使者を遣り、かれは翌 1226 年春にノヴゴロドに来ている [HPL: C. 64, 268-269]。

562) *HI*-1228 年記事によれば、ヤロスラフ [K4] はプスコフを巡る紛争から、1228 年夏に妃とともにノヴゴロドを立ち去って自領地ベレスラヴリに行き、ノヴゴロドには二人の息子フョードル [K41] とアレクサンドル [K42] を残した [HPL: C. 66, 271]。その後、1229 年 2 月 20 日二人の息子たちもノヴゴロドから逃げ、ノヴゴロド人はチェルニゴフのミハイル [G41] に招聘の使者を遣り、かれは 4 月 22 日にノヴゴロドに到着した [HPL: C. 68, 274]。

公座に据えて、自分はチェルニゴフへ〔行った〕<sup>563</sup>。そして再びヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [K4]<sup>564</sup>。かれのあとに、かれの息子アレクサンドル勇猛公 (Храбрыи)[K42]。かれのあとに、かれの兄弟アンドレイ [K43]。そして再びアレクサンドル [K42]。それからヤロスラフ・ヤロスラヴィチ [K45]。

その後、ドミートリイ・アレクサンドロヴィチ [K423]。かれは3ヶ月〔ノヴゴロドの公座に〕座して、城市を出た。それからヴァシーリイ・ヤロスラヴィチ<sup>565</sup> [K49]。それからアンドレイ・アレクサンドロヴィチ<sup>566</sup> [K421]。それからミハイル・ヤロスラヴィチ [K453:P]。かれは1ヶ月も座さずに城市を出た<sup>567</sup>。それからアレクサンドル勇猛公 [K42]の孫ユーリイ・ダニーロヴィチ<sup>568</sup> [Q1]。

それから、ドミートリイ・ミハイロヴィチ<sup>569</sup> [P1]。ドミートリイのあとは、かれの兄弟アレクサンドル<sup>570</sup> [P2]。それからイヴァン・ダニーロヴィチ<sup>571</sup> [Q2]。その後かれの息子のセミョーン<sup>572</sup> [Q21]。その後かれ〔イヴァン [Q2]〕の別の息子のイヴァン [Q23]<sup>573</sup>。それからドミートリ

---

563) ミハイル [G41] は1229年夏～秋に、息子のロスチスラフ [G411] をノヴゴロドに残して、ノヴゴロド人の代表とともにチェルニゴフに行き、そのまま戻らなかった [НПД: С. 68, 275]。

564) *HI*-1230年記事によれば、ロスチスラフ [G411] は約束した飢餓解消のための遠征を行わなかったことを理由に、1230年12月6日に追放された。ノヴゴロド人はヤロスラフ [K4] を招聘し、かれは12月30日のノヴゴロドに到着した。

565) ヴァシーリイ [K49] は1272/73年冬から1276/77年冬までの4年間ノヴゴロドにいた。

566) アンドレイ・アレクサンドロヴィチ [K421] は、1284年、1294–1296年、1298–1304年の間をあけて三回ノヴゴロド公になっている。ここが、どの時のことを指しているかは不明。

567) ミハイル・ヤロスラヴィチ [K435:P] は1305年から1314年までの10年間ノヴゴロドの公座に座している。この「1ヶ月も座さずに」という記述は不思議である。

568) ユーリイ [Q1] はモスクワ公ダニールの息子で、1315年1月から1316年2月までノヴゴロドの公座に就いている。

569) ドミートリイ・ミハイロヴィチ [P1] は、「恐るべき眼」(Грозные очи) と通称されている公で、1318年からはトヴェーリ公、1322年にはヴラジミル大公になっている。この頃から、ハンに大公位(ヴラジミルの、のちにモスクワの)を認証された公が、ノヴゴロド公を兼ねるようになったことから、ここでは大公であった1322～1326年の期間のことを指しているのだろう。

570) アレクサンドル [P2] は、1326～1327年にヴラジミル大公になっており、この期間を指しているのだろう。

571) イヴァン・ダニーロヴィチ [Q2]、いわゆる「巾着公」(Калита) は、ヴラジミル大公になった1328年から1337年の10年間、ノヴゴロド公としても座していた。

572) セミョーン [Q21] 公は、いわゆる「傲慢公」(Гордый) と通称されたモスクワ公で、1340～1353年にヴラジミル大公位に就いており、その期間ノヴゴロド公でもあった。

573) イヴァン [Q23] (二世) はいわゆる「美麗公」(Красный) と通称されるモスクワ公で、1354～1359年にヴラジミル大公で、ノヴゴロド公でもあった。

イ・コンスタンティノヴィチ<sup>574)</sup> [K43314], ドミートリイ・イヴァノヴィチ<sup>575)</sup> [Q231:R]。かれの息子のヴァシーリイ<sup>576)</sup> [R1]。それからヴァシーリイ・ヴァシーリエヴィチ<sup>577)</sup> [R11]。

### 【ルーシにおける府主教表】 [№ 108]

見よ<sup>578)</sup>, 次がルーシの府主教たち (русьи митрополиты) である<sup>579)</sup>。最初のルーシの府主教はフェオペンプト<sup>580)</sup> (Феопентъ)<sup>581)</sup>, イラリオン<sup>582)</sup> (Ларрионъ), ゲオルギイ<sup>583)</sup> (Георгии), イオアン〔二世〕<sup>584)</sup> (Иоан), イオアン〔三世〕<sup>585)</sup> (Иоан), ニコライ<sup>586)</sup> (Никола), ニキーフォ

---

574) ドミートリイ・コンスタンティノヴィチ [K43314] はスーズダリとニージニイ・ノヴゴロドを所領に持つ公で、1360～1363年にヴラジミル大公でノヴゴロド公も兼ねた。

575) ドミートリイ・イヴァノヴィチ [Q231:R] は「ドンスコイ」(Донской) と通称されたモスクワ公で、1363～1389年にヴラジミル大公兼ノヴゴロド公だった。

576) ヴァシーリイ [R1] (一世) は1389～1425年の間、ウラジミルおよびモスクワの大公で、ノヴゴロド公を兼ねていた。

577) ヴァシーリイ・ヴァシーリエヴィチ [R11] (二世) は1425～1433年の間ウラジミルおよびモスクワの大公兼ノヴゴロド公だった。その後、シェミヤカー族との政争によってノヴゴロドはシェミヤカとその同盟者の拠点となっている。ヴァシーリイ二世は1447年に大公位に復帰して1462年に没しているが、この公名表は、大公位をめぐる混乱が始まる前の1425年から1433年までの間に作成された可能性が高い。なお、すべての写本においてこの公名表はヴァシーリイ二世で終わっている。

578) ここから以下にキエフの府主教、ノヴゴロドの主教、ルーシの主教座のリストが置かれたのは、[№ 103]の冒頭の「キエフに府主教が置かれ、ノヴゴロドに大主教が置かれた。他の諸都市に主教、司祭、輔祭が置かれた」の記述との関連によるだろう。

579) 以下の府主教および大主教名は標準綴りの人名を音写して訳し、括弧内に底本 (*Km*) の綴りを示した。底本の綴りが通称形の場合には、注釈で標準綴りを示すと同時に、[Карпов 2017] に拠っておよその在位期間を示した。

580) Феопемпт 年代記史料で確認できる最初のキエフ府主教。ギリシア人。1036年頃叙任され1039年以降没。

581) フェオペンプトとイラリオンの間に府主教の空白期があり、このときキリル (Кирилл) が務めたという記録があるが確かではない。教会の伝統では、かれを「キリル一世」としている。

582) Иларион 最初のルーシ人出身の府主教。1051年叙任、1054/55年に退任。『律法と恩寵についての説教』の著者。

583) ギリシア人。1062年に叙任、1073年以降に没している。

584) Иоанн 順番から見て、イオアン二世 (在位 1077/1080-1089年) のこと。ギリシア人。史料では「善良な」(Добрый) と呼ばれている。

585) Иоанн イオアン三世 (在位 1090-1091年) ギリシア人で「奄人」(скопец) と呼ばれている。

586) Николай (在位 1096 - 1101年以降)。ギリシア人と推定。

ル〔一世〕<sup>587</sup> ( Никифоръ ), ニキータ<sup>588</sup> ( Никита ), ミハイル<sup>589</sup> ( Михаилъ )<sup>590</sup> , コンスタンティン<sup>591</sup> ( Костянтинъ )<sup>592</sup> , イオアン〔四世〕<sup>593</sup> ( Иоанн )<sup>594</sup> , ニキーフォル〔二世〕<sup>595</sup> ( Никифоръ ), ディオニーシイ<sup>596</sup> ( Деонисии ), マトフェイ<sup>597</sup> ( Матфѣи ), キリル〔二世〕<sup>598</sup> ( Кириль )<sup>599</sup> , マクシム<sup>600</sup> ( Максимъ ), ピョートル<sup>601</sup> ( Петръ ), フェオグノスト<sup>602</sup> ( Феогнасть ), アレ

---

587) ニキーフォル一世 (在位 1104-1121 年)。ギリシア人。

588) ニキータ (在位 1122-1126 年)。ギリシア人。

589) ミハイル一世 (ただし、992 年頃に没したとされる伝説上の初代キエフ府主教ミハイルを数えて、「二世」と呼ぶこともある) 在位は 1130 - 1147 以前。ギリシア人。

590) ミハイル一世の後に、1147 年 7 月 27 日ロシアの主教たちによってクリメント・スモリャティチ (Климент, Клим Смолятич) が二人目のロシア人府主教として選任された。その後、キエフ公位をめぐる諸公の争いのなかでかれの正当性が問題にされたが、対立主教 (コンスタンティン一世) が擁立される 1156 年まで務めた。おそらく正式に叙任されていない府主教として、本表には記載されていない。

591) コンスタンティン一世 (ギリシア人) は、コンスタンティノポリスで叙任を受けて、1156 年夏にキエフに到来し 1158 年 12 月まで務めた。その後、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] によって追放されてチェルニゴフに逃げ、1159 年に没している。

592) コンスタンティン一世の後に、キエフ大公ロスチスラフ [D116:J] の要請で新しい府主教が招請され、フェオドル (Феодор) (ギリシア人) が 1159 年 4 月に叙任され、1160 年 8 月にキエフに到来した。1163 年 6-8 月に没している。

593) イオアン四世はフェオドルの死後 1164 年～1166 年の期間在任している。

594) イオアン四世の後に、コンスタンティン二世 (在位 1167～1170 年頃)、ミハイル三世 (1171 年春叙任) が府主教を務めているが、ロシアの史料にはなく、本表でも記載されていない。

595) ニキーフォル二世は 1183 年 7 月～8 月頃からの活動が知られており、1198 年に死没するまで府主教を務めていた。

596) ディオニーシイについては、本記事以外に史料での言及はない。1198 年～1210 年頃の期間の府主教が空白であることから、この人物に当てられる可能性はある。

597) マトフェイは 1210 年以前に府主教となり、1220 年 8 月 19 日に死没するまで務めていた。

598) キリル二世は、1224/25 年に府主教となり、1233 年夏に没している。

599) キリル二世の後に、ヨシフ (ギリシア) (在位 1236 年～1240 年頃) が府主教となり、1240～1244 年は府主教空白期間、1244 年ごろにキリル三世が府主教となり、1281 年 12 月 6 日に没するまで務めている。本表ではこの二人について記載がないが、「キリル」の名が続いているため誤認したものか。

600) マクシム (ギリシア人) は、1283 年に府主教に叙任され、1305 年 12 月 6 日に没している。在任中に実質的な府主教座をモスクワに移した。

601) ピョートル (ロシア人) は、1308 年に叙任され、1326 年 12 月 21 日に死没するまで、一貫してモスクワに居住した。

602) フェオグノスト (ギリシア人) は 1328 年に叙任され、1353 年まで務めている。

クシイ<sup>603)</sup> (Алекси<sup>604)</sup>, ディオニーシイ<sup>605)</sup> (Дионисии), <sup>606)</sup> ピーメン (Пуминь), キプリアン<sup>607)</sup> (Киприянь), フォーチイ<sup>608)</sup> (Фотии), <sup>609)</sup> ゲラシム (Герасимь)。

【ノヴゴロドにおける主教表】 [№ 109]

見よ、次がノヴゴロドの大主教たちである。最初のノヴゴロド大主教はケルソン人アキム<sup>610)</sup> (Акимъ Корсунянинь<sup>611)</sup>, ルカ<sup>612)</sup> (Лука), ステファン<sup>613)</sup> (Стефань), フェオドル<sup>614)</sup> (Федорь), ゲルマン<sup>615)</sup> (Германь), ニキータ<sup>616)</sup> (Никита), イオアン・ポピアン<sup>617)</sup> (Ивань Попиань)。<sup>618)</sup>かれは 20 年間に在位して、大主教の座を剥奪された。ニーフォント<sup>618)</sup> (Нифонтъ),

603) アレクシイ (ロシア人) は、世俗名は「エレフェリイ」(Елевферий Фёдорович Бяконт) と伝えられている。1354 年に叙任され、1378 年まで務めている。

604) アレクシイの後に、ドミートリイ・ドンスコイ公の引き立てによって、ミハイル(ミチャイ(Митяй)(ロシア人) が 1379 年に府主教の座に就いたが、正式な叙任を受けておらず、同年にロシア教会代表団の首席として赴いたコンスタンティノポリスで死没している。そのことから、本表には記載されていないのだろう。

605) ディオニーシイ (ロシア人) は、1383 年に正式に府主教に叙任され、1385 年まで務めている。

606) ピーメン (ロシア人) は、ミハイル (ミチャイ) (上注 604) の死を受けて 1382 年にディオニーシイと競うかたちで叙任され、フィレンツェ公会議にルーシの教会の代表として出席した。1389 年にはモスクワ公の追求を受けてビザンツに逃げている。

607) キプリアン (ブルガリア人) は 1375—1380 年に「キエフとルーシとリトアニア」の府主教になり、1380—1389 年には「小ルーシとリトアニア」の府主教を名乗った。その後ピーメンの逃亡を受けて、1390 年から 1406 年 9 月 16 日に没するまで「キエフと全ルーシ」の府主教を務めた。

608) フォーチイ (ギリシア人) は、1408 年 9 月 2 日に叙任され、1431 年 7 月 2 日に没するまで府主教を務めた。のちに列聖。

609) ゲラシムは本表の最後の府主教で、在位期間は 1433-35 年。これは上掲のノヴゴロド公表にある最後のヴァシーリイ二世の在位期間 1425 年～ 1433 年 (上注 577) とほぼ一致する。なお、すべての *HI-M* 写本において府主教名表はゲラシムで終わっている。

610) 「アキム」すなわちノヴゴロド大主教イオアキムについては上注 452 を参照。

611) *НСГ* 1030 年記事によれば、ヨアキムの死後(1030 年)にその弟子エフレム(Ефрем) (おそらくギリシア人) が「われらを教えた」(иже ны учае) とあることから、1030 年から 1035 年ころまで主教を勤めたと思われるが、叙任式を経ていないためだろう、本表には加えられていない。

612) この「ルカ」は Лука Жидята でのちに聖人となっている。在任は 1036 年～ 1058 年 10 月 15 日

613) ステファンの主教在任は 1059 年頃～ 1068 年頃。

614) フェオドルの主教在任は 1069/70 年～ 1077/78 年。

615) ゲルマンの在任は 1078 年頃～ 1095 年頃で、のちに列聖されている。

616) ニキータの在任は 1096 年頃～ 1109 年 1 月 30 日で、のちに列聖されている。

617) イオアン一世。ポピヤン(Попьян)はおそらくは «попъ Янь» のことで、司祭(поп)の出身であることがあだ名になったのだろう。1110 年 12 月 20 日にノヴゴロドに到来し、1130 年に主教座を剥奪されており、確かに 20 年間になる。

618) ノヴゴロド到来が 1131 年 1 月 1 日で 1156 年 4 月 21 日に没している。のちに列聖されている。

アルカージイ<sup>619)</sup> (Аркадии), イオアン<sup>620)</sup> (Иоанн), グリゴリーイ<sup>621)</sup> (Григории), マントウー  
リイ<sup>622)</sup> (Мантурии), ミトロファン<sup>623)</sup> (Митрофанъ), アントーニイ<sup>624)</sup> (Антонии)<sup>625)</sup>, スピリ  
ドン<sup>626)</sup> (Спиридонъ), ドルマト<sup>627)</sup> (Далматъ), クリメント<sup>628)</sup> (Климентъ), フェオクティス  
ト<sup>629)</sup> (Феоктисть), ダヴィド<sup>630)</sup> (Давыдъ), モイセイ<sup>631)</sup> (Моисии)。かれは自らの意志で主教  
座を去った。かれの後はヴァシーリイ<sup>632)</sup> (Василии), 再びモイセイ<sup>633)</sup> (Моисии), アレクシ

---

619) 1156年に選任され、主教叙任は1158年8月10日。1163年9月19日に没している。のちに列聖。

620) イオアンはスヒマ修道士になったときの名で、主教のときの名は「イリヤ」(Илия)。1165年3月28日に叙任され、1186年9月7日に退位している。のちに列聖。かれの在位の頃から、ノヴゴロドの主教座は大主教座に昇格したと考えられる [Поппэ 1996: С. 443]。

621) グリゴリーイはスヒマ修道士のときの名で、大主教としては「ガヴリール」(Гавриил)。1186年に選任され、1187年3月29日に叙任。ノヴゴロドには同年5月31日に到着している。1193年5月24日に死没。のちに列聖される。

622) 標準綴りでは「マルティリイ」(Мартирий)。1193年12月10日に叙任され、1199年8月24日に死没している。のちに列聖される。

623) ミトロファンは1199年に選任され、1201年7月3日に叙任され、同年9月14日にノヴゴロドに到来。1210年1月22日に退任。

624) アントーニイは1210年に叙任され、1219年にペレムィシェリ主教として転任するまで務めた。俗世での名はドブリニャ・ヤドレイコヴィチ(Добрыня Ядрейкович)。のちに列聖される。

625) アントーニイが1219年に大主教座を去ってのち、ミトロファン(再任1220年3月17日～1223年6月3日)、アルセーニイ(叙任なし1223年7月3日～1225年)、アントーニイ(再任1225～1228年)、アルセーニイ(再任1228年)、アントーニイ(再々任1228～1229年:1232年10月8日に死没)と短期間で延べ5人の大主教が交代しているが、本表では省かれている。

626) スピリドンは1229年に選任、1230年に叙任。同年5月19日にノヴゴロドに到来して、1249年に死没するまで務めた。

627) ドルマトは1249年に選出され、1251年5月25日に叙任、1274年10月21日に死没するまで務めた。

628) クリメントは1276年8月2日に叙任され、1299年5月22日に死没するまで務めた。

629) フェオクティストは1300年6月29日に叙任(選任)され、1309/10年冬に病気を理由に退位。1310年12月23日に死没。のちに列聖される。

630) ダヴィドは1309年6月5日に叙任され、1325年2月5日に死没。

631) モイセイは1325年にモスクワで叙任され、1331年に病気による衰弱を理由に退位。

632) ヴァシーリイは「カリカ(巡礼者)」(Калика)と通称された。1331年8月25日に叙任され、プスコフ出張時に罹ったペストによって1352年7月3日死没。

633) モイセイ(上注631)はヴァシーリイ・カリカの急死を受けて、1352年に再任され、1359年まで務めた。1362年2月25日に死没。のちに列聖された。

イ<sup>634</sup> (Алексѣи), イオアン<sup>635</sup> (Иванъ), シメオン<sup>636</sup> (Семеонъ)<sup>637</sup>, エフィーミー<sup>638</sup> (Еуфимей)。

【ルーシにおける主教座の所在地】 [№ 110]

[164] 見よ, 次がルーシにおいて主教座が幾つあるかの数えたものである<sup>639</sup>。第一にキエフの府主教座。その後, ノヴゴロドの大主教座<sup>640</sup>。同様に, チェルニゴフ<sup>641</sup>, ペレヤスラヴリ<sup>642</sup>,

---

634) アレクシイは1360年に叙任され、1375年に一時的に自分の希望によって退位するが、ノヴゴロド人の懇願をうけてすぐに主教座に復帰。1388年に退位して隠棲する。1389年2月3日に死没。ノヴゴロド地方的な聖人として尊崇されていた。

635) イオアン三世。1388年1月17日に叙任。1415年1月20日に退位して隠棲。1417年6月27日に死没。

636) シメオンは、1415年に選任され、1416年3月15日に叙任。1421年6月15日に死没するまで務める。

637) シメオンの後に、フェオドーシー一世(Феодосий)が1421年6月～9月に選任され、1423年8月30日まで務めたが、正式な叙任を受けていないためだろう、本表には記載されていない。

638) エフィーミー〔一世〕(標準綴りはЕвфимий; Εὐθύμιος)の世俗名は「エメリアン」(Емелиан)で「髭の」(Брадатый)と通称された。1424年に、1429年11月1日に死没するまで務めた。本表の最後の記載であることから、本表は1424～1429年の期間に作成されたことが推定される。これは、ノヴゴロド公表の最後のヴァシーライ二世の在位期間1425年～1433年(上注577)とほぼ一致する。なお、すべてのHI-M写本においてノヴゴロド大主教名表はエフィーミーで終わっている。

639) キエフ主教管轄の主教座については、[Поппэ 1996]を参考に注記した。

640) ルーシ受洗直後にノヴゴロドのソファ聖堂(Софийский собор)に主教座がおかれる。1165年頃に大主教座に昇格してからは、キエフ府主教管区の首席主教座(πρωτόθρονος)とみなされていた。

641) ルーシの第二の都市であったチェルニゴフには、受洗直後(988年)に主教座が置かれた。首座教会は主の変容教会(Спас-Преображенский собор)。およそ1060-85年の期間はキエフ府主教がここに座を移した。

642) ペレヤスラヴリはПВЛの992年記事に都市成立由来譚があるが、ルーシの古い城市であり、受洗と同時に主教座が置かれた。首座教会は大天使ミハイル教会(Михаил-Архангельский собор)。およそ1072-1100年の期間キエフ府主教が座を移した。

ベルゴロド<sup>643</sup>、ヴラジミル<sup>644</sup>、ユーリエフ<sup>645</sup>(юрговская)、ロストフ<sup>646</sup>、ポロツク<sup>647</sup>、スモレンスク<sup>648</sup>、トヴェーリ<sup>649</sup>、リャザン<sup>650</sup>であり、22<sup>651</sup>〔の主教座〕である。

【ノヴゴロドにおける市長官表】 [№ 111-1]

---

643) ベルゴロドの建設は *ПВЛ* によれば 991 年であり、そのときに主教座も置いたと考えられる。首座教会は聖使徒教会 (Собор св. Апостолов)。1165 年頃までは府主教管区的首席主教座 (πρωτόθρονος) とされていた。

644) ヴラジミル = ヴォルィンスキイの主教座設置は 1078/85 年。首座教会は聖母就寝教会 (собор Успения Богоматери)。

645) ユーリエフ (Юрьев) はローシ川 (Рось) 沿岸に建てられた国境防衛城市。1036 年以降に主教座が設けられた。首座教会は聖ゲオルギイ教会 (Собор св. Георгия)。1165 年から約 25 年の間主教座はカーネフ (Канев) に移されていた。

646) ロストフの主教座設置は 1073/76 年。首座教会は聖母就寝教会 (собор Успения Богоматери)。1093 年以降主教座が空位になり、1136 年に復位する。1160 年以降はスーズダリにも副主教座を持つようになる。

647) ポロツクにおける主教座設置は受洗直後 (988 年) もしくは 1015/1024 年。首座教会はソフィア聖堂 (Софийский собор)。

648) スモレンスクにおける主教座設置は 1134/1136 年で、ベレスラヴリの主教座から分かれて置かれた。首座教会は聖母就寝教会 (собор Успения Богоматери)。

649) トヴェーリの主教座設置は遅く 1250 年頃。ここに記されたのは、リストが作成された 15 世紀前半の公国の地位が高かったことによるだろう。

650) リャザンの主教座設置は 1190 年以降。首座教会は聖母就寝教会 (собор Успения Богоматери)。チェルニゴフ主教座から分かれて置かれた。記された理由は前注のトヴェーリと同様だろう。

651) この 22 の数字は *Км* にのみある読みで、*Ак*、*Бр* にはない。実際に数えてみると 12 の主教座になるので、22 の数の表記は *Км* の写本系統における編集で誤って挿入されたと考えられる。



見よ、次はノヴゴロドの市長官<sup>652)</sup> (посадници) たちである<sup>653)</sup>。

最初はゴストムィスル<sup>654)</sup> (Гостомысль), コスニャチン<sup>655)</sup> (Коснятинъ), オストロミー

652) ノヴゴロドの「市長官」の原語は посадники で、この語は本年代記では 977 年記事 [№ 65] に「ヤロポルク [04] の посадники」として初めて記されているが、ここでは、ヤロポルクが支配下の諸城市に派遣してそこに、「据え」(посадити)、その地の支配と徴税を代行させていた重臣貴族たちを指していた。そして、そのような場合にはこの語は「代官」と訳した([ノヴゴロド第一年代記(1): 注 401] 参照)。しかし、ノヴゴロドの посадник の場合は、最初期(10 世紀～11 世紀初め)にはキエフ公が派遣した行政官を指すことがあったものの、その後 12 世紀になると посадник がノヴゴロドの在地貴族の間から選出され、大主教と並んで実質的な行政の長の役割を担うようになった。そのため、ノヴゴロドについては посадник は「市長官」という訳語を当てることとした。なお、1477 年のイヴァン三世との協定によってノヴゴロドの「市長官」の職は廃止され、かわりにモスクワ大公によって代官(наместник)が派遣されてこの都市を支配するようになった。

653) 本表の市長官たちの名前はノヴゴロドでの呼称がそのまま書き留められていることから、翻訳の日本語表記でも、これまでの諸公の場合のような、標準綴りに基づく表記は採用せず、本表に綴られた読みをそのまま転記することにした。また注釈では市長官名の後の(№ )内に数字を付したが、これはヤーニンの研究で使われている市長官の参照番号(список А)である[Янин 2003: C. 25–26]。

以下の市長官の注釈では、在任期間等についてはヤーニンの研究書の記述や索引[Янин 2003: C. 501–511]に基本的に拠り、索引に記されている標準綴り(年代記や別の市長官表などの史料にある父称や別称なども含めて)を転記したが、重要な点については *Н1*, *Н4* の年代記記事を直接参照したのものもある。

654) ゴストムィスル(№ 1) Гостомысл は伝説的なノヴゴロド市長官で、ノヴゴロド・ソフイア年代記グループ(1448 年集成)の冒頭にも、ドナウ川スロヴェネ〔スラブ〕人がイルメニ湖河岸に移住してノヴゴロドを建設したという記述に続いて「長老のゴストムィスルを据えた」(посадиши старѣйшину Гостомысла)として、ノヴゴロド建設と同時に市長官になった〔スロヴェネ人がノヴゴロドの長老＝市長として据えた?〕ように書かれている[ПСРЛ Т. 42 (НК1): C. 22]。なお、この記事は本表のこの部分が典拠と推定されている[Янин 2003: C. 65–67]が、本表と同時に他の典拠(伝承)が使われた可能性もある。16 世紀の「ウラジーミル諸公物語」では、「ヴァリヤーク人招致」の筋立ての中に、ゴストムィスル(воевода とされている)の遺言によってブルシアの地から同族のリューリクを招聘したというモチーフが加わる[Петрухин 1999: C. 20–21]。

655) コスニャチン(№ 2) Коснятин (Константин) Добрынич 1016–30 年在任。かれについては、上掲ノヴゴロド公表[№ 116]にヤロスラフ [13] がノヴゴロドに「コスニャチン・ドブリニチを据えた」(посади Коснятина Добрынича)という文言があり(上注 479)、まだ公の配下であったことが推察される。また、*ПВЛ*1018 年の項に、海の向こうに逃げようとするヤロスラフ [13] の船を壊して引き留めたノヴゴロドの代官〔市長官〕(посадник)として記されている[ПСРЛ Т. 1: Стб. 143]。なお、かれ父親がウラジーミル公 [06] の母方の伯父のドブリニャ(Добрыня)であったことは明らかだが、ドブリニャは посадник として本表には登場しない。

ル<sup>656</sup> (Остромиръ), ザヴィド (Завидъ), ペトリヤタ (Петрята), コスニヤチン (Костянтинъ), ミロネグ (Миронѣгъ), サヴァ (Сава), ウレブ (Ульбъ), ギュリヤタ (Гюрята), ミクーラ<sup>657</sup> (Микула), ドブリニヤ<sup>658</sup> (Добрыня), ドミトル<sup>659</sup> (Дмитръ), コスチャンチン<sup>660</sup> (Костянтинъ), ボリス<sup>661</sup> (Борисъ), ザヴィド<sup>662</sup> (Завидъ), ダニーロ<sup>663</sup> (Данило), ペト

656) オストロミール (№ 3) Остромир は前市長官コスニヤチンの息子と推定される。NKI-1054 年記事では、イジャスラフ公 [B] が父ヤロスラフ [13] を継いでキエフの公座に就いたこの年に、公がオストロミールをノヴゴロドに「代官として据えた」(посади)とあり、それに続く記事で、同年にかれはチューチ人への遠征で戦死したことになる。一方、1056-57 年にノヴゴロドで筆写された『オストロミール福音書』(Остромирово Евангелие)の後書きにも、オストロミールの洗礼名はヨシフ (Иосиф) であり、イジャスラフは近親 (близкии) のオストロミールにノヴゴロドの統治 (правити) を委ねたとある。ここでは、かれの死について触れられていないことから、1057 年の時点でまだ生きていた可能性もある。

なお、ドブリニヤ⇒コスニヤチン (№ 2) ⇒オストロミール (№ 3) と三代にわたって実質的な市長官職が息子に継承されたとすると、最初期のノヴゴロド посадник は、キエフ公配下の貴族 (боярин) で軍司令官 (воєвода) の役割も担っており、公の代官 (наместник) の性格が強い。

657) ザヴィド (№ 4), ペトリヤタ (№ 5), コスニヤチン (№ 6), ミロネグ (№ 7), サヴァ (№ 8), ウレブ (№ 9), ギュリヤタ (№ 10), ミクーラ (№ 11) の 8 人については、ヤーニンによればムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D11] (上注 496) がノヴゴロドの公座にあった 1096 年～1117 年の約 20 年 (ヤーニンによれば 1088 年から) の間に市長官を務めた人物の名であるが [Янин 2003: С 78–88], 本表以外の史料にその名を見出すことはできない。本表の作成者 (前後の諸表の作成者と同一であれば 15 世紀 20 年代) は、現存していないなんらかの年代記記述、もしくは市長官についての記録を使って 8 人の市長官名を写し取ったことが想定される。なお、ギーモンは初期の市長官の表はすでに早い時期、1160 年代には作成されていたと考えている [Гимон 2012: С. 613–614]。

これらの市長官の在任の時代 (1088 年～1117 年) は、ムスチスラフ偉大公 [D11] がノヴゴロドの公座に就いていた時期と重なるが、ちょうどこの時期にキエフ公とは一定の独立性を持った「新しいタイプ」の市長官の制度が始まったと考えられている [Янин 2003: С 84–85]。

658) ドブリニヤ (№ 12) HI-1117 年の項に 12 月 6 日に посадник новгородкыи の Добрыня が逝去したという記事がある [НПЛ: С. 20, 204]。この記事が、年代記 (HI) で確認できる、独立的なノヴゴロドの行政の長としての посадник (市長官) についての最初の年代記における言及と考えられる。

659) ドミトル (№ 13) Дмитр Завидович 1117-18 年在任 [Янин 2003: С. 93]。(№ 4) の息子である。

660) コスチャンチン (№ 14) Костянтин Мосеевич 1119 年まで在任、おそらく 1118 年就任 [Янин 2003: С. 93]。

661) ボリス (№ 15) Борис はキエフから派遣されたと考えられ、1120 年に就任し 1125 年まで務めた。

662) ザヴィド (№ 16) Завид Дмитрович 1128 年の記事で在任が確認できる [Янин 2003: С. 93]。(№ 13) の息子と推察される。

663) ダニーロ (№ 17) Данила из Києва は 1129 年記事で在任が確認できる [Янин 2003: С. 93]。Данило из Києва (表 B) とあることから、フセヴォロド公 [D111] がキエフから招いた可能性がある。

リヤタ<sup>664)</sup> (Петрята), イヴァンコ<sup>665)</sup> (Иванко), ミロスラフ<sup>666)</sup> (Мирославъ), コスチャンチン<sup>667)</sup> (Костянтинъ), ヤクーン<sup>668)</sup> (Якунъ), スーディロ<sup>669)</sup> (Судило), ネジャチン<sup>670)</sup> (Нъжатиный), ザハリア<sup>671)</sup> (Захария), ヤクーン<sup>672)</sup> (Якунъ), ジロスラフ<sup>673)</sup> (Жирославъ), イヴァン

- 
- 664) ペトリヤタ (№ 18) Петр (Петрята, Петрило) Микульич は 1130-34 年在任 [Янин 2003: С. 93]。 (№ 11) の息子か。
- 665) イヴァンコ (№ 19) Иван (Иванко) Павлович 1134-35 年に在任。1135 年に殺されている [Янин 2003: С. 93]。
- 666) ミロスラフ (№ 20) Мирослав Гюрятинич は 1135-36 年に在任 (再任?) して, 1136 年に死亡 [Янин 2003: С. 93]。HI によれば, 1127 年から, おそらく 1128 年まで Мирослав Гюрятинич が在任しており, 順番は離れるがこの人物である可能性もある。
- 667) コスチャンチン (№ 21) Костянтин (Константин) Микульич は 1136-37 年に在任 [Янин 2003: С. 93]。(№ 11) の息子で (№ 18) の兄弟か。HI-1137 年記事に 3 月 7 日に追放されたフセヴォロド公 [D111] のもとに逃げたことが記されている [НПЛ: С. 24, 209] [Янин 2003: С. 150]。その後, 1146-47 年に再任し, 1147 年に死亡。
- 668) ヤクーン (№ 22) Якунъ Мирославич は 1137-41 年に在任。HI-1137 年記事に前任のコスチャチンの代わりに市長官に任命されたことが記されている [НПЛ: С. 24, 209]。さらに, 1156 年に追放されたスーディロ (№ 23) に代わって任命され [НПЛ: С. 29, 216] [Янин 2003: С. 150], 1160 年まで務めた。
- 669) スーディロ (№ 23) は, Судило Иванковичь で (№ 19) の息子か。1141 年に逃亡したヤクーンに代わって市長官に任命され [НПЛ: С. 26, 212]。1147 年には, コスチャチン ((№ 21) の再任) の死にもなって再任されている [НПЛ: С. 27, 214]。1156 年には追放され 5 日目に没している [НПЛ: С. 29, 216] [Янин 2003: С. 150]。
- 670) ネジャチン (№ 24) Нъжатиный は Нъжата の誤記。HI と表 Б では Нъжата Твердятич と記されている。1144 年に市長官になり [НПЛ: С. 27, 213], 1146 年に職を解かれている [НПЛ: С. 27, 213]。しかし, 1160 年の記事で再度任命され, 1161 年に職を解かれている [НПЛ: С. 31, 218] [Янин 2003: С. 150]。
- 671) ザハリア (№ 25) Захария はネジャタの代わりに 1161 年に任命され [НПЛ: С. 31, 218], 1167 年に殺害されている [НПЛ: С. 32, 220] [Янин 2003: С. 150]。
- 672) ヤクーン (№ 26) Якун は殺されたザハリアの代わりに 1167 年末に任命された [НПЛ: С. 32, 220]。1170 年に職を去っている [Янин 2003: С. 150]。
- 673) ジロスラフ (№ 27) Жирослав は 1169 年に任命されるが 1171 年にリユーリク [J2] によって追放され, スーズダリの アンドレイ公 [D173] のもとに逃げた。さらに, リユーリクが公座を去ったことによって 1172 年初頭には公座に復帰している [НПЛ: С. 34, 222]。1175 年にはイヴァンコの病没にともない復帰するが, 1176 年初頭に職を追われる [Янин 2003: С. 150]。

コ<sup>674</sup> (Иванко), ザヴィド<sup>675</sup> (Завидъ), ミハイロ<sup>676</sup> (Михалко), ミロシカ<sup>677</sup> (Мирошка), その息子ドミトル<sup>678</sup> (Дмитръ), トヴェルディスラフ<sup>679</sup> (Твердиславъ), ドミトル<sup>680</sup> (Дмитръ), ギュルギ<sup>681</sup> (Гюрги), スメン<sup>682</sup> (Смень), イヴァンコ<sup>683</sup> (Иванко), ヴネズド・ヴォドヴィク<sup>684</sup> (Внѣздъ Водовикъ), ステパン<sup>685</sup> (Степанъ), ズブイスラフ<sup>686</sup> (Сбыславъ), オナニヤ<sup>687</sup> (Онанья), ミハルコ<sup>688</sup> (Михалко), ミハイル<sup>689</sup> (Михаиль), パフシャ<sup>690</sup> (Павша), ミハイロ<sup>691</sup> (Михаило), セメ

---

674) イヴァンコ (№ 28) Иванко Захарниниць は (№ 25) の息子と推定されるが、1171年にジロスラフに代わって任命されるが、同年リユーリクが公座を去ったことにともなうて解任され、翌1172年に再任されている。1175にノヴゴロドで没している。[НПЛ: С. 35, 223] [Янин 2003: С. 150]。

675) ザヴィド (№ 29) Завид Неревинич として1175-76年, 1177-80年, 1184-86年に在任 [Янин 2003: С. 165]。

676) ミハイロ (№ 30) Михалко Степанович として1176-77年, 1180-84年, 1186-89年, 1204-05年に在任 [Янин 2003: С. 165]。

677) ミロシカ (№ 31) Мирошка Несдинич として1189-1204年に在任 [Янин 2003: С. 165]。

678) ドミトル (№ 32) Дмитр Мирошкинич として1205-07年に在任 [Янин 2003: С. 165]。

679) トヴェルディスラフ (№ 33) Твердислав Михайлович として1207-11年, 1215年まで, 1216-19年, 1219-20年と四度にわたって就任 [Янин 2003: С. 165] [Янин 2003: С. 227]。

680) ドミトル (№ 34) Дмитр Якунович は1211年に就任 [Янин 2003: С. 227]。

681) ギュルギ (№ 35) Гюрги (Юрий) Иванович は1215-16年に在任 [Янин 2003: С. 227]。(№ 25) の息子と推定される。

682) スメン (№ 36) Смен (Семен) Борисович は1219年に就任, 1230年に殺害されている [Янин 2003: С. 227]。

683) イヴァンコ (№ 37) Иван (Иванко) Дмитрович は1220-29年に在任。1238年に殺害されている [Янин 2003: С. 227]。

684) ヴネズド・ヴォドヴィク (№ 38) Внѣзд Водовик は1229-30年に在任。1231年に没している。 [Янин 2003: С. 227]。

685) ステパン (№ 39) Степан Твердиславич は1230-43年在任。1243年に没している [Янин 2003: С. 227]。(№ 33) の息子だろう。

686) ズブイスラフ (№ 40) Сбыслав Якунович は1243年に就任。在任期間は不明だが, 1255年までに没している。 [Янин 2003: С. 227]。

687) オナニヤ (№ 41) Ананья (Онанья) Феофилатович は1255年まで在任したが, 就任時期は1243年以降だが不明。1256年に没している。 [Янин 2003: С. 227]。

688) ミハルコ (№ 42) Михаил (Михалко) Степанович は1255-56年に在任。1256年に殺害されている [Янин 2003: С. 227]。(№ 39) の息子だろう。

689) ミハイル (№ 43) Михаил Федорович は1256-68年に在任。1268年に戦死している [Янин 2003: С. 227]。

690) パフシャ (№ 44) Павша (Павел) Онаньинич (Ананьинич) は(№ 41) の息子で, 1268-72年, 1272-73年在任。1273年に没している。 [Янин 2003: С. 227]。

691) ミハイロ (№ 45) Михаил Мишинич は1272年, 1273-80年に在任 [Янин 2003: С. 227]。

オン<sup>692</sup> (Семеонъ), アンドレイコ<sup>693</sup> (Андрѣико), ユーライ<sup>694</sup> (Юрьи), セメオン<sup>695</sup> (Семеонъ), ヴァルフロメイ<sup>696</sup> (Вальфромѣи), フェドル・アフマイル<sup>697</sup> (Федоръ Ахмыль), ザハリヤ<sup>698</sup> (Захарья), マトフェイ・コスカ<sup>699</sup> (Магфѣи Коска), フェドル<sup>700</sup> (Федоръ), オスタフィヤ<sup>701</sup> (Остафья), その兄弟アレクサンドル<sup>702</sup> (Александръ), オンツィフォル<sup>703</sup> (Онцифоръ), フェドル<sup>704</sup> (Федоръ), ヤコフ<sup>705</sup> (Яковъ), イヴァン・ムートリツァ<sup>706</sup> (Ивань Муторица), その兄弟アレクサンドル<sup>707</sup> (Александръ), セリヴェストル<sup>708</sup> (Селивестръ), イヴァン・ス

692) セメオン(№46) Семен Михайлович は1280-86年に在任 [Янин 2003: С. 227]。

693) アンドレイコ(№47) Андрей Климович 1286-91年に在任, おそらく1294-99年再任。それ以降1316年まではプスカヤ街区(Пруская улиц) (区としては, ほぼリューディン区とザゴロド区 Люднн и Загородский концы と重なる) を代表する市長官だった [Янин 2003: С. 240-241, 252-253]。この頃から(ほぼ14世紀に入ってから), ノヴゴロドの市長官は各区(конец)や街区(улица)を単位として選ばれる傾向が認められ, 同時期に複数の市長官が存在するようになる。

694) ユーライ(№48) Юрий Мишинич 1291-92年に在任。その後1300-16年の期間はネレフスキイ区(Неревский конец)を代表する市長官だった [Янин 2003: С. 240-241, 252-253]。

695) セメオン(№49) Семен Климович 1292-93年に在任。それ以降1316年まではプスカヤ街区を代表する市長官だった [Янин 2003: С. 240-241, 252-253]。

696) ヴァルフロメイ(№50) Варфоломей Юрьевич は1316-32年に在任で, ネレフスキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 261-262]。

697) フェドル・アフマイル(№51) Федор Ахмыл は1329-32年に在任していたと考えられる。

698) ザハリヤ(№52) Захария Михайлович は1316-35年にプロトニツキイ区(Плотницкий конец)の市長官。1335年に没している。 [Янин 2003: С. 261-262]。

699) マトフェイ・コスカ(№53) Магфей Варфоломеевич (№50) の息子で, 1333-45年に父を継いでネレフスキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 261-262]。

700) フェドル(№54) Федор Данилович は1335-36, 1338-39, 1342-43年にプスカヤ街区(Пруская улица)の市長官 [Янин 2003: С. 261-262]。

701) オスタフィヤ(№55) Евстафий Дворянинец(表B)は1346年にプロトニツカヤ区の市長官だった。

702) アレクサンドル(№56) Александр Дворянинцев は1347年にプロトニツカヤ区の市長官。(№55)の兄弟だろう。

703) オンツィフォル(№57) Онцифор Лукич は1347-50年にネレフスキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 288-289]。

704) フェドル(№58)はおそらく Фодор Юрьевич で1347年にプスカヤ街区の市長官 [Янин 2003: С. 288-289]。

705) ヤコフ(№59) Яков Хотов (表Bによる)はおそらく(№49)の息子でプスカヤ街区代表。1352-82年に市長官 [Великий Новгород. Энциклопедический словарь: С. 545] [Янин 2003: С. 288-289]。

706) イヴァン・ムートリツァ(№60) Иван Мутрица Семенович (表Bによる)は1354-69, 1371-77年に市長官 [Янин 2003: С. 288-289]。

707) アレクサンドル(№61) Александр Семенович は(№60)の兄弟で, 1360-61年に市長官 [Янин 2003: С. 288-289]。

708) セリヴェストル(№62) Сильвестр Лентеев (表Bによる)は1354-80年にスラヴァンスキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 288-289, 294]。

ミヤタンカ<sup>709)</sup> (Ивань Смятанка), オンドレヤン<sup>710)</sup> (Ондрѣянь), ユーライ<sup>711)</sup> (Юрьи), ミハイロ<sup>712)</sup> (Михаило), グリゴリーイ<sup>713)</sup> (Григории), ミキータ<sup>714)</sup> (Микита), ヴァシーレイ・フョードロヴィチ<sup>715)</sup> (Василии Федорович), ヴァシーレイ<sup>716)</sup> (Василии), フェドル<sup>717)</sup> (Федоръ), エスカ<sup>718)</sup> (Еска), ボグダン<sup>719)</sup> (Богданъ), ティモフェイ<sup>720)</sup> (Тимофѣи), エシフ<sup>721)</sup> (Есифъ), ユーライ<sup>722)</sup> (Юрьи), オレクサンドル<sup>723)</sup> (Олександръ), キュリル<sup>724)</sup> (Кюриль), イヴァン<sup>725)</sup> (Ивань), フォ

---

709) イヴァン・スミヤタンカ (№ 63) Иван Федорович Смятанка は 1354-60, 1372-77 年にブルスカヤ街区の市長官 [Янин 2003: С. 288-289, 294]。

710) オンドレヤン (№ 64) Андреян Захарьинич は 1354-84 年にプロトニツキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 288-289, 294]。

711) ユーライ (№ 65) Юрий Иванович (表 B による) は 1371-72, 1373-74, 1375-80 年に市長官。全城市を代表する高位市長官 (степенный посадник) であったか [Янин 2003: С. 288-289, 294]。

712) ミハイロ (№ 66) Михаил Данилович は 1372-92 年にブルスカヤ街区の市長官。

713) グリゴリーイ (№ 67) Григорий Якунович 1386-89 年に在任していた [Янин 2003: С. 291]。

714) ミキータ (№ 68) Никита Магфеевич は 1360 年に市長官の記録がある [Янин 2003: С. 291]。

715) ヴァシーレイ・フョードロヴィチ (№ 69) Василий Федорович 1384-92 年にブルスカヤ街区の市長官 [Янин 2003: С. 294]。

716) ヴァシーレイ (№ 70) Василий Иванович は、1383-89 年にブルスカヤ街区の市長官 [Янин 2003: С. 294]。

717) フェドル (№ 71) Федор Тимофеевич は 1385-1421 年にスラヴァンスキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 294]。

718) エスカ (№ 72) Есиф Захарьинич は 1388-1409 年にプロトニツキイ区の市長官 [Янин 2003: С. 294]。

719) ボグダン (№ 73) Богдан-Феодосий Обакунович 1390-1402 年頃に市長官。1415 年死亡。

720) ティモフェイ (№ 74) Тимофей Юрьевич 1392-1409 年在任。1409 年死亡。

721) エシフ (№ 75) Есиф Захарьевич プロトニツキイ区市長官。1388-1409 年在任。1385 年からの就任の可能性もある。

722) ユーライ (№ 76) Юрий Дмитриевич はブルスカヤ街区の市長官で 1397-1409 年在任。1409 年に死亡。

723) オレクサンドル (№ 77) Александр Фоминич Царько ブルスカヤ街区の市長官で、在任は 1403-21 年。1398 年から就任の可能性もある。1421 年に死亡。

724) キュリル (№ 78) Кирилл Андреянович プロトニツキイ区の市長官で 1403-09 年在任。1410 年死亡。(№ 64) の息子。

725) イヴァン (№ 79) Иван Александрович スラヴァンスキイ区の市長官。1409-17 年在任。1417 年死亡。

マ<sup>726</sup> (Фома), ユーリイ・オンツィフォロヴィチ<sup>727</sup> (Юрьи Онцифоровиць), フォマ・エシフォ  
 ヴィチ<sup>728</sup> (Фома Есифовиць), グリゴリー・ボグダノヴィチ<sup>729</sup> (Григорий Богдановиць), キュ  
 リラ・ドミートリエヴィチ<sup>730</sup> (Кюрила Дмитриевич), イヴァン・ダニーロヴィチ<sup>731</sup> (Иванъ  
 Данилович), アンドレイ・イヴァノヴィチ<sup>732</sup> (Андрѣи Иванович), イヴァン・ボグダノヴィ  
 チ<sup>733</sup> (Иванъ Богданович), セメオン・ヴァシーリエヴィチ<sup>734</sup> (Семеонъ Васильевич), その兄弟  
 のティモフェイ・ヴァシーリエヴィチ<sup>735</sup> (Тимофѣи Васильевич)。

【ノヴゴロドにおける市長官表 (アカデミイ写本による補遺)<sup>736</sup>】 [№ 111-2]

オナニヤ・セメノヴィチ<sup>737</sup> (Онанья Семенович), オレクサンドル・イグナチエヴィ

- 726) フォマ (№ 80) Фома Иванович 1409 年にスラヴァンスキイ区の市長官を務める。(№ 79) の従兄弟。  
 なお、本表においてこの「フォマ」(№ 80) までは市長官は名 (имя) だけで示されており、次の市長官 (№  
 81) からは「名」と「父称」(отчество) で示されているという表記のスタイルに相違が認められる。そ  
 のことから、本市長官表は、(№ 1) ~ (№ 80) のリストが最初に作成され (基本表)、以下はこれに補足  
 されるかたちで完成されたと推定される [Янин 2003: С. 27]。
- 727) ユーリイ・オンツィフォロヴィチ (№ 81) Юрий Онцифорович は 1409-16 年にネレフスキイ区の市  
 長官。1417 年死亡。(№ 57) の息子。
- 728) フォマ・エシフォヴィチ (№ 82) Фома Есифович 1409-11 年にプロトニツキイ区の市長官。
- 729) グリゴリー・ボグダノヴィチ (№ 83) Григорий Богданович 1409-15 年にブルスカヤ街区の市長  
 官。(№ 73) の息子。
- 730) キュリラ・ドミートリエヴィチ (№ 84) Кирилл Дмитриевич 1414 年にブルスカヤ街区の市長官。  
 1414 年に死亡。
- 731) イヴァン・ダニーロヴィチ (№ 85) Иван Данилович 1414-15 年にプロトニツキイ区の市長官。  
 なお、ユーリイ (№ 81) からイヴァン (№ 85) までの 5 人については、父称の語尾が -иць という方言  
 的な色彩が強い表記になっている。そのことからこの 5 人のリストは別個の資料が存在し、そこから基  
 本表 (上注 726) に補足された (第一補足) と考えられる。この補足は 1414 年までには、年代記に付  
 されたと考えられる [Янин 2003: С. 27, 28]。
- 732) アンドレイ・イヴァノヴィチ (№ 86) Андрей Иванович 1415-21 年にネレフスキイ区の市長官。
- 733) イヴァン・ボグダノヴィチ (№ 87) Иван Богданович 1415-16 年にブルスカヤ街区の市長官。1419  
 年死亡。
- 734) セメオン・ヴァシーリエヴィチ (№ 88) Семен Васильевич 1416 年に市長官に選ばれている。
- 735) ティモフェイ・ヴァシーリエヴィチ (№ 89) Тимофей Васильевич 1416 年に選任されている。(№  
 88) の兄弟。アンドレイ (№ 86) からここまでの 4 人の市長官名については、父称の語尾が -ичь で表さ  
 されており、さらに補足がなされたことが推測される (第二補足)。この補足 (すなわち本表の完成)  
 は 1418 年以前には年代記に付されたと考えられる [Янин 2003: С. 27]。
- 736) 底本の *Km* の市長官表はティモフェイ (№ 89) で終わっているが、これ以降の部分で写本 *Ac* には本  
 文の筆跡とは異なる筆跡で 39 人の大幅な市長官名の補足が認められる (*Ac* 補遺)。そこには 15 世紀の  
 10 年代末から 1477 年にノヴゴロド市長官職が廃止されるまで期間の市長官名が記されており、史料と  
 して興味深いことから本翻訳でも扱うことにした。
- 737) オナニヤ・セメノヴィチ (№ 90) Ананья Семенович 1442 年に高位市長官、1439 年に千人長に選任  
 されている。

チ<sup>738</sup> (Олександръ Игнатъевич), ボリス・ユーリエヴィチ<sup>739</sup> (Борись Юрьевич), グリゴリー・ユーリエヴィチ<sup>740</sup> (Григоръи Юрьевич), グリゴレーイ・キュリロヴィチ<sup>741</sup> (Григорей Кюрилович), グリゴレーイ<sup>742</sup> (Григорей Данилович), サムソン・イヴァノヴィチ<sup>743</sup> (Самсонъ Иванович), フェドル・ダニーロヴィチ<sup>744</sup> (Федоръ Данилович), エシフ・グリゴリーエヴィチ<sup>745</sup> (Есифъ Григоръевич), エシフ・オンドレヤノヴィチ<sup>746</sup> (Есифъ Ондrejaнович), スメネ・ペズディヤ<sup>747</sup> (Смене Пъздья), フェオドル・ヤコリチ<sup>748</sup> (Федоръ Яколич), その兄弟のエシフ<sup>749</sup> (Есифъ), イヴァン・ヴァシーリエヴィチ<sup>750</sup> (Иванъ Васильевич), イヴァン・イヴァノヴィチ<sup>751</sup> (Иванъ Иванович), その兄弟のヤコフ・セズネヴィチ<sup>752</sup> (Яковъ Селезневич), ミ

---

738) オレクサンドル・イグナチエヴィチ (№ 91) Александр Игнатъевич は 1416 年からネレフスキイ区の市長官。それまでは千人長だった。

739) ボリス・ユーリエヴィチ (№ 92) Борис Юрьевич は 1435-36 年に高位市長官。かれについて年代記に記述はない。

740) グリゴリーイ・ユーリエヴィチ (№ 93) Григорий Юрьевич は 1434 年以前に市長官に選任。かれについて年代記に記述はない。

741) グリゴレーイ・キュリロヴィチ (№ 94) Григорий Кириллович Посахно は 1428 年以前に市長官に選任され、1437 年に在任。かれについて年代記に記述はない。

742) グリゴレーイ (№ 95) Григорий Данилович は 1423 年に市長官に選任され、1456 年に在任。かれについて年代記に記述はない。

743) サムソン・イヴァノヴィチ (№ 96) Самсон Иванович はネレフスキイ区の市長官。1434 年以前に選任され、1448 年に在任の記録がある。

744) フェドル・ダニーロヴィチ (№ 97) Федор Данилович は 1435 年以前に市長官に選任されている。かれについて年代記に記述はない。

745) エシフ・グリゴリーエヴィチ (№ 98) Есиф Григоръевич はブルスカヤ街区の市長官で 1443 年以前に選任されている。

746) エシフ・オンドレヤノヴィチ (№ 99) Есиф Андреевич (Андреевич) Горошков は 1443 年までに選任され、1463 年在位の記録がある。

747) スメネ・ペズディヤ (№ 100) Семен Пъздья Васильевич は 1421-23 年に在位。かれについて年代記に記述はない。

748) フェオドル・ヤコリチ (№ 101) Федор Яковлевич は 1440 年までに選出され、1466 年に没している。

749) エシフ (№ 102) Есиф Васильевич Носов はブルスカヤ街区の市長官で、1456 年に殺害されている。

750) イヴァン・ヴァシーリエヴィチ (№ 103) Иван Васильевич Сокира は 1436 年以前に選出され、1442 年に在任の記録がある。

751) イヴァン・イヴァノヴィチ (№ 104) Иван Иванович はネレフスキイ区の市長官で、1470 年代に在任。かれについて年代記に記述はない。

752) ヤコフ・セズネヴィチ (№ 105) Яков Иванович Селезнев はネレフスキイ区の 1460-70 年代の市長官。



キフォル・ボリソヴィチ<sup>753</sup> (Микифоръ Борисович), イヴァン・マクシモヴィチ<sup>754</sup> (Иванъ Максимович), イヴァン・ラヴレンチエヴィチ<sup>755</sup> (Иванъ Лаврентьевич), イサーク・オンドレエヴィチ<sup>756</sup> (Исакъ Ондръевич), ドリトリイ・ヴァシーリエヴィチ<sup>757</sup> (Дритрии Васильевич), ミハイラ・オナニイニチ<sup>758</sup> (Михаила Онаньинич), オレクサンドル・カフスキシ<sup>759</sup> (Олександръ Кавьскыш), ヴァシーリイ・ステパノヴィチ<sup>760</sup> (Василен Степанович), ミハイル・トウーチャ・ゴールイ<sup>761</sup> (Михаил Туча(Голыи), イヴァン・オフォノソフ<sup>762</sup> (Иванъ Офоносовъ), オフォノス・グルーズ<sup>763</sup> ([Офо]нось Грузъ), イヴァン・ルーキン<sup>764</sup> (Иванъ Лукинъ), ヴァシーリイ・エシフォフ<sup>765</sup> (Василен Есифов), その兄弟のスヴェクラ・オフォノス<sup>766</sup> (Свекла

---

753) ミキフォル・ボリソヴィチ (№ 106) Никифор Борисович は 1470 年代に在任。かれについて年代記に記述はない。

754) イヴァン・マクシモヴィチ (№ 107) Иван Максимович は 1444 年以前に選任され 1460 年代まで務めていた。

755) イヴァン・ラヴレンチエヴィチ (№ 108) Иван Лаврентьевич は 1445 年以前に選任され、1461 年の在任の記録がある。

756) イサーク・オンドレエヴィチ (№ 109) Исак Андреевич Борецкий 1428 年以前に選任されて 1460 年代に没している。

757) ドリトリイ・ヴァシーリエヴィチ (№ 110) Дмитрий Васильевич Глухов は 1437 年以前に選任されて、1456 年頃に在任の記録がある。1436 年には千人長に選任。

758) ミハイラ・オナニイニチ (№ 111) Михаил Онаньинич は 1423 年に選任。1424 年に在任。かれについて年代記に記述はない。

759) オレクサンドル・カフスキシ (№ 112) Александр Васильевич Кавский は 1450-60 年代の市長官。かれについて年代記に記述はない。

760) ヴァシーリイ・ステパノヴィチ (№ 113) Василий Степанович は 1446 年以前に選任され、1460 年代末に修道士となり (修道名 Варлаам) その後死亡。

761) ミハイル・トウーチャ・ゴールイ (№ 114) Михаил Иванович Туча Голый はプスカヤ街区の市長官で、1446 年以前に選任。1456 年にモスクワ公ヴァシーリイ二世によって捕虜となる。

762) イヴァン・オフォノソフ (№ 115) Иван Афанасьевич は 1459 年以前に選任。1476 年に捕虜となってモスクワへ送還される。

763) オフォノス・グルーズ (№ 116) Афанасий (Офанас) Остафьевич Груз は 1448-78 年在任のスラヴァンスキイ区の市長官。

764) イヴァン・ルーキン (№ 117) Иван Лукинич Щока 1438 年に選任、1471 年に在任の記録。1475 年に死亡。

765) ヴァシーリイ・エシフォフ (№ 118) Василий Есифович 1416 年プロトニツキイ区の市長官。ただし、この位置に書かれているのは、1475-76 年に千人長を務めた同名のヴァシーリイ・エシフォヴィチと誤認したため。

766) スヴェクラ・オフォノス (№ 119) Афанасий (Офанас) Есифович Свекла 1418 年よりプロトニツキイ区の市長官。(№ 75) の息子。

Офон[ось]), ヴァシーリイ・カリミール<sup>767)</sup> (Василей Каримирь), キリラ・ゴリシ<sup>768)</sup> (Кирила Гольш), ヤコフ<sup>769)</sup> (Яко[въ]), ザハリヤ・グリゴリーエフ・オトヴィネ<sup>770)</sup> (Захарья Григорьевъ Отвин), フィラト・スクーポイ・ポロチカ<sup>771)</sup> (Филать Скупой Порочка), クーズマ・セメノヴィチ<sup>772)</sup> (Кузма Семеновичъ), フェドル・グラゾエメチ<sup>773)</sup> (Федоръ Глазоемечъ), ミハイラ・チャピノガ<sup>774)</sup> (Михаила Чапинога), ボグダン・ミキティニチ<sup>775)</sup> ([Бог]данъ Микитиничъ)<sup>776)</sup>。

**【空の2年の年紀：989～990年】** [№ 112]

[165]

6497年<sup>777)</sup> (989)

6498年 (990)

**【ウラジーミルによる聖母教会（十分の一教会）の建設：991年】** [№ 113]

6499(991)年

---

767) ヴァシーリイ・カリミール (№ 120) Василий Александрович Казимир 1459年以前に選任, 1478年まで在任。

768) キリラ・ゴリシ (№ 121) Кирилл Яковлевич Гольш 1470年代のネレフスキイ区の市長官。かれについて年代記に記述はない。

769) ヤコフ (№ 122) Яков Александрович Короб Неревфский区の市長官で 1471年以前に選任。1478年に在任の記録がある。

770) ザハリヤ・グリゴリーエフ・オトヴィネ (№ 123) Захарья Григорьевич Овин (Отвин) はブルスカヤ街区の市長官で 1445年以前に選任され, 1476年に在任の記録がある。1477年に殺害される。

771) フィラト・スクーポイ・ポロチカ (№ 124) Филать Скупой Порочка (Захарьинич) プルスカヤ街区の市長官で 1471年以前に選任。1478年在任。かれについて年代記に記述はない。

772) クーズマ・セメノヴィチ (№ 125) Кузьма Семенович 1470年代の市長官。かれについて年代記に記述はない。

773) フェドル・グラゾエメチ (№ 126) Федор Акинфьевич Глазоемец 1470年代のブルスカヤ街区の市長官。

774) ミハイラ・チャピノガ (№ 127) Михаил Семенович Чапинога 1460年代の市長官で, 1475年までに没している。かれについて年代記に記述はない。

775) ボグダン・ミキティニチ (№ 128) Богдан Микитинич 1439-41年頃の高位市長官。

776) Ак 補遺 (上注 736) は, 上掲の注釈からも分かるように, 必ずしも市長官在位の時系列にそって配置されているわけではなく, 年代記に記録のない市長官名が多く登場し, さらに 1470年代の年代記に記されている重要な市長官の何人かの名が書き込まれていない。年代記とは別個の性格の史料を用いて補足がなされたことが推察される [Янин 2003: С. 30–32]。

777) この 6497年 (в лѣто 6497) の年紀は, 上注 449 にもあり重複である。この重複は, [№ 105–111] の記事が後代 (15世紀前半) に挿入されたことによっている。年紀としては, こちらが本来の資料 (ПВЛ と共通の資料) のものを残していると考えられる。

その後、ウラジーミル [08] はキリスト教の法の中に暮らしていたが、聖母教会<sup>778)</sup> (церковь святых Богородица) を創建することを考えて使者を遣り、ギリシア人のもとから職人たちを連れて来た。かれは建て始め<sup>779)</sup>、そして教会〔建築を〕終える<sup>780)</sup> と、それを尊い聖像で飾って、司祭の (ереи) ケルソン人アナスタシオス<sup>781)</sup> (Анастас) に委ね、そこで奉事するようケルソンの主教たち<sup>782)</sup> (епископы) を任命した。かれはそこにケルソンで手に入れた物をすべて与えた<sup>783)</sup>。聖像 (иконы) も聖器物も尊い十字架、それは宝石で飾られていた<sup>784)</sup>。

778) この「聖母教会」は以下にみるように、いわゆる「十分の一教会」(Десятинная церковь) のこと [№ 117] (下注 794 参照)。これまでも、983 年のヴァリヤグ人殉教記事 [№ 82]、ケルソンからの戦利品の記述 [№ 100] (上注 378) などですでに言及されてきた。

779) 「建てる」の動詞は、*ПВЛ* では здати だが、*Н1-М* 全写本では ставить になっている。これは次注に示したような *Н1-М* 編者の改変によるものだろう。なお、建て「始め」(наченшо же ему) とあることから、この記事の 991 年は十分の一教会の定礎 (закладка) の年と考えることができる。さらに、11 世紀の修道士ヤコフの『ルーシ公のウラジーミルへの記念と称賛の詞』(Память и похвала Русскому Владимиру) の中に、「〔洗礼の〕4 年目に聖なる聖母の石造りの教会を定礎した。(…) 9 年目に、キリストを愛する至福のウラジーミル公は、聖なる聖母教会に自分の財産 (имение) から十分の一を与えた」[БЛДР Т. 1: С. 324] の記述がある。ここからまず「聖母教会」が石造りであることがわかる (遺構からも確認できる)。年代については、ヤコフはルーシ洗礼を 987 年とみなしていた (上注 310 参照) ことから、4 年目の教会の定礎は 990 年で、9 年目の十分の一税の制定 (献堂) は 995 年となり。本年代記の年紀には合致していない。

なお、『聖ウラジーミル伝：簡素版プロローグ』には「十分の一聖母教会献堂の物語」(Сказание об освящении Киевской церкви св. Богородицы Десятинной) が含まれており、そこでは 5 月 12 日を献堂の記念日としている。シャフマトフによれば、通常献堂式は日曜日に行われ、5 月 12 日が日曜であるのは 995 年であることから、ヤコフの示した年代 (年紀法) がより正確であるとしている [Шахматов 2014: С. 86, 312]。

780) *Н1-М* 全写本は сконча церковь だが、*ПВЛ* では сконча, зижа になっている。これは、*ПВЛ* の зижа (зъдати のアオリスト 3 単形) の読みを、*Н1-М* の編者が理解できず、分かりやすい構文に改めたのだろう。以下に見るように、この聖母教会建設記事 [№ 113] には、*Н1-М* 編者による、分かりやすさのための改変が目立っている。

781) 「アナスタシオス」(Анастас) については、上注 289 を参照。なお、「司祭のアナスタスに」(ерею Анастасу) は *Н1-М* 全写本にあるが、*ПВЛ* 諸写本には ерею (司祭の) はなく、*Н4, С1* は Анастасу ерею と語順が換わっている。これも、上注 780 と同様の趣旨の *Н1-М* 編者による補筆だろう。

782) 「主教たち」(епископы) の *Н1-М* の読みは、*ПВЛ* では попы (司祭たち) であり、*ПВЛ* の読みが内容と文脈から見て自然であり、*Н1-М* の読みは教会建設を誇張して讃えようとした編者による改変ではないか。

783) ウラジーミルがケルソン征服で得た「戦利品」をこの教会に与えたことについては、上注 378 の記述からもうかがうことができる。

784) 「十字架」(кресты) のあとに、*Н1-М* では честныя съ драгым каменемъ (尊く、宝石で飾られていた) の文言が補筆されている。*ПВЛ* で削除する動機付けがないことから、明らかに上注 780 で指摘した *Н1-М* 編者による改変 (補筆) によるものである。

【ウラジーミルによる城市ベルゴロドの建設：992年】 [№ 114]

6500(992)年

ウラジーミル [08] はベルゴロド<sup>785</sup> (Бѣльгород) の城市を定礎した, そこに〔住まわせるために〕他の諸城市から多くの人々を集め, そこに入れた<sup>786</sup>。かれがこの城市を好んでいたからである。

【ウラジーミルはホルヴァート人への遠征を行う：993年】 [№ 115]

6501(993)年

ウラジーミル [06] は, ホルヴァート人<sup>787</sup> (хорваты) を攻める遠征を行った<sup>788</sup>。

【空の2年の年紀：994～995年】 [№ 116]

6502(994)年

6503(995)年

【ウラジーミルは聖母教会に対して十分の一税の供与を定める：996年】 [№ 117]

6504(996)年

ウラジーミルは, [聖母] 教会ができあがった<sup>789</sup> のを見て, その中に入り, 神に祈って, こう言った。「主なる神よ, 天からご覧下さい。自分の葡萄畑を訪れ, あなたが右手で植えられた〔株

---

785) 「ベルゴロド」 (Бѣльгород) は本年代記ではこの個所が初出 ([№ 110] の後代の挿入は除く)。キエフの中心地から 21km ほど西南西のイルベニ川 (Ирпень) 河岸に建てられた城砦で, 現在の「ピロホロドカ村」 (Білогородка) に相当し, 土塁で囲われた遺構がある。南方からのペチェネグ人の攻撃からキエフを防衛する拠点として建てられた。бѣл- (白い) は, 最初期のスラブ人の色彩方位で「西」を意味していることから [Етимологічний словник 1985: С. 28], キエフ西方の城砦という意味で命名されたのだろう。

786) ウラジーミルが, 国境地帯の防衛のために, 征服地の城砦から徴用した住民を, 新たに建てた城砦に一種の〈防人〉として住まわせる政策をとっていたことについては, 上注 447 を参照。

787) 「ホルヴァート人」 (хорваты) については, *НИ-М* ではこの個所が初出だが, *ПВЛ* では民族誌的記述でスラブ人 (словене) 諸族として二個所, さらに 907 年と 942 年の記事で言及されている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 6, 12, 29, 45]。その最初の言及では「白ホルヴァート人」 (хорвате бѣлии) と呼ばれており, カルパチア山脈東麓のドニエートル川 (Днестр) およびサン川 (Сан) の最上流地域に居住していた民族と考えられる。これは, 南へ移動して南スラブの「クロアチア人」となった集団とは別にこの地域に定住していた。この個所の「ホルヴァート人」もこの「白ホルヴァート人」を指すのだろう。

788) この記事の後に *ПВЛ* では, トゥルーベジ川を挟んでの対峙, 双方からの勇士が組打ちをした約 430 語の物語があり, 全体として城市ペレスラヴリ (Переяславль) の地名由来譚になっている。この物語は, *НИ-М* の資料となった *КНС* ではなく, 12 世紀初めの *ПВЛ* 編纂のときに挿入されたものと考えられる。

789) この記事は 991 年の聖母教会定礎の記事 [№ 113] から内容的に接続しており, 十分の一 (聖母) 教会の完成, すなわち「献堂」 (освящение) のことを記しているだろう (年紀については上注 779 を参照)。完成と同時に, ウラジーミルはルーシの教会組織を運営するための財政措置を定めたのである。

を] 顧みて下さい<sup>790)</sup>。この新しい民 (новыя люди си) を [顧みて下さい]。あなたは、その心を英知へと向け<sup>791)</sup>、真なる神たるあなたを知らしめたのですから<sup>792)</sup>。この教会をご覧下さい。あなたの不肖の僕 [である] 私が、あなたを産んだ母である永遠の処女マリア<sup>793)</sup> の名において建てたのです。そして、誰かがこの教会で祈るなら、聖なる聖母の祈りによって、その者の祈りを聞き届け、かれの罪を赦して下さい」。

そしてかれは祈って、こう言った。「わたしはこの聖母 [教会] に、わたしの財産 (имѣние) とわたしの諸城市 [からの貢税の] 十分の一の部分 (десятая часть) を与えます<sup>794)</sup>」。かれは誓約の文書 (клятва) を書いて<sup>795)</sup>、この教会に置き<sup>796)</sup>、こう言った。「もし、誰かこれに違反する者

790) ここは、『詩編』79:15-16 (邦訳80:15-16) の *боже сил, обрати ся убо, и призри с небесе и видждь, и посети виноград сей: и соверши и, егоже насади десница твоя, и на сына человеческого, егоже укрепил еси себе.* (万軍の神よ、立ち帰ってください。天から目を注いで御覧ください。このぶどうの木を顧みてください。あなたが右の御手で植えられた株を。御自分のために強くされた子を [新共同訳]) を部分的に典拠としている。

791) 「心を英知へと向け」(обратиль еси сердце в разумъ) は [№ 38] のオリガへの讃詞で引用されている『箴言』2:6 からの文言「あなたは英知に心を向ける」(и приложиши сердце твое в разумъ) に対応している。

792) ウラジーミルの祈りのこの部分は、かれがキエフ人を洗礼し、ベルーン像を倒すことを命じたときの祈りの文言 [№ 102] と「新しい民」(новыи люди)、「真の神であることを知らせる」(познати тебе истинного Бога) などの表現が繰り返されており、明らかにこれに対応している。

793) 「永遠の処女マリア」приснодѣвья Марія は *Н1-М* 全写本の読みだが、*Ип* приснодѣвья Марья Богородица; *Лер, Н4, С1* приснодѣвья Богородица と異読がある。これは、祈祷文における聖母の呼び名の定型表現である Богородица и приснодева Марія (Θεοτόκος καὶ Ἀειπαρθένος Μαρία) に近い *Ип* の読みが本来であり、他の二つはそれぞれの部分が脱落した結果と考えるのが妥当だろう。

794) 「わたしはこの聖母教会に、わたしの財産とわたしの諸城市の十分の一の部分を与えます」(Се, даю святѣи Богородици сеи от имѣния моего и от град моих десятую часть) の文言は、明らかに恵与文書の一部 (おそらく冒頭) を抜き書きしたもので、例えば、1150 年成立とされる『スモレンスク公ロスチスラフの恵与状』(Уставная и жалованная грамота смоленского князя Ростислава Мсиславича церкви Богородицы и епископу, связанная с учреждением епископии в Смоленске) の第 4 条項の «И се даю святѣи Богородици и епископу десятину от всѣх даней смоленских...» [Щапов 1976: С. 141] の文言と内容と構文がほぼ一致している。ただし、この恵与状が年代記記事を参照して作成された可能性もある。

795) 「書いて (...) 置き」は *Км* では *положив, написа* だが、*Ак, Бр, Ип, Лер* では *положи, написав* で、儀式的順番から考えて後者が本来の読みだろう。

796) 「誓約の文書」(клятва) は、内容的には現在の用語で言う「恵与状」(жалованная грамота) にあたるが、ここでは、その内容の遵守をウラジーミルが誓った文書という意味で使っている。その文書を教会に置く (положи) とは、誓約式を行うために教会の台 (奉献台?) の上に文書を置いたのだろう。後代になると十字架接吻が誓約の儀式になるが、ここでウラジーミルがどのような儀式を行ったかについては不明。なお、клятва の語は、誓うと同時にこれを破った場合の呪われる事態も含み込んだ意味内容を持っている。

があれば、その者は呪われよ<sup>797)</sup>」。

そしてかれはケルソン人アナスタシオス<sup>798)</sup> (Анастас) に、十分の一税<sup>799)</sup> (десятина) を与えた [166]。

この日にかれは貴族たち (боляре) と諸城市の長老たち (старци градскыи) のために盛大な祭りをを行い、貧しい人々に多くの財産を分け与えたのである<sup>800)</sup>。

### 【ヴァシリエフにおける主の変容教会の建設：996年】 [№ 118]

この後、ペチェネグ人ヴァシレフ<sup>801)</sup> (Василев) に〔攻めて〕来たので、〔ウラジーミル [08] は〕少数の従士たちとともに反撃して、かれらは交戦したが〔ウラジーミルは〕持ちこたえられなかったので逃げ、橋の下にいて、やっと敵から隠れることができた。その時、ウラジーミル [08] は、ヴァシレフに主の変容 (святое Преображение Господне) の教会を建てることを約束した。そのとき戦闘があった〔からである〕<sup>802)</sup>。

---

797) 「もし、誰かこれに違反する者があれば、その者は呪われよ」 (аще кто посудит сего, да будет проклят) の文言は、文書形式学 (дипломатика) で言う「制裁条項」 (sanctio) に相当する文言がここに抜き書きされていることは明らかである。例えば、『ウラジーミルの教会規定』 (Устав князя Владимира Святославича о десятинах, судах и людях церковных) (下注 799) の Троицкая редакция の本文の最後には制裁条項が記されており、«аще же вся сия преобидит кто, и имет вступатися и отнимати и судити (...) да не будет на немъ милости божи в сем вѣцѣ и в будущем и да будет проклять» [Щапов 1976: С. 81] と共通の語句が使われている。

798) 「アナスタシオス」については上注 289 参照。上注 781 に「司祭」 (перен) とあるように、聖母教会の司祭 (管理者) に任じられていたのである。

799) 「十分の一税」と訳した десятина は、ここでは「わたしの財産」 (от имѣния) と「わたしの諸城市〔からの貢税〕」 (от град моих) の十分の一と簡単に説明されているが、おそらく 11 世紀初頭に書かれ 12 世紀後半に形が整えられたと想定される『ウラジーミルの教会規定』 (上注 797) では、教会組織の権限と運営のための財源についてより具体的に記されており、徴収した裁判手数料 (案件ごとの徴収)、商業手数料 (週ごとの徴収)、支配領の各戸に課して家畜や収穫物として受け取る貢税 (年ごとの徴収) などの収入の十分の一も教会に (具体的にはキエフの聖母に納入されたのち各地の主教座に) に与えられるとしている [宮野 2012 : 85-86 頁] [Щапов 1976: С. 13-84] (税の起源と運用については [栗生沢 2015 : 397-399] を参照)。

800) この段落の表現は、ほぼそっくり次の [№ 118] のエピソードでも繰り返される。ウラジーミルのキリスト教君主としての「気前のよさ」をあらわす定型表現だろう。

801) 「ヴァシレフ」の城砦については、上注 311 を参照。この記事が教会の縁起譚になっていることから、この記事の 996 年の直前の時期におそらく建設されたか、建設途上だったのだろう。

802) 正教会の「主の変容」 (Преображение Господне) の祝祭日は 8 月 6 日であることから、これが戦闘の日ということになる。なお、*ПВЛ* では「その日に主の変容があったからである」 (бѣ бо въ тѣ днь Преображенье Господне) の文言があるが、*Н1-М* 編者がおそらく内容的な重複と判断して削除したのではないか。*Н1-М* には全写本でこの文言はない。

ウラジーミル [06] は、これ〔戦闘〕から生き残ったので教会を建て<sup>803)</sup>、盛大な祭りを行った。300 ベルコヴェスクの蜜を醸造した<sup>804)</sup>。自分の貴族たち (боляры своя) と、自分のすべての諸城市の (по всеъмь градомь своимь) 自分の長老たち<sup>805)</sup> (старѣишины своя) と自分の代官たち<sup>806)</sup> (посадники сова) を呼び集めた。貧しい人々に 300 グリヴナを分け与えた<sup>807)</sup>。〔ウラジーミル〕公は 8 日間祭りを行って<sup>808)</sup>、聖母就寝の日 (на Успение святых Богородица) にキエフに戻った。そこにおいて再び [同じように]、光輝ある祭りを行って<sup>809)</sup> 数えきれないほど多くの民衆を集めるようになった。かれは、人々がキリスト教徒であるのを見て、魂も肉体も喜びに満ちる

803) この教会を建てた時期について、リハチョフはウラジーミルが「生き残った」日と教会 (聖堂) 建設の日が、同一日に起こることはありえないとして、建設は一年後に行われたという見解を示している [Комментарии 1950: С. 349]。しかし、15 世紀以降のロシア (主にノヴゴロド、プスコフ地方) で災禍 (疫病など) 鎮静祈願の成就を記念して行われていた、前日の深夜から翌日の日の出前までの一日で木造の教会堂を建てる「一夜聖堂」(Обыденная храм; однодневная церковь) の風習を考慮に入れると、そのような事例の最初期のものであった可能性もある [Славянская энциклопедия-2: С. 73 (Обыденная церковь)]。実際、ヴァシレフの主の変容聖堂については、これ以降の史料には全く言及がないことから、すぐに取り壊されるような簡単な聖堂だったのではない。

804) 「300 ベルコヴェスクの蜜を醸造して」(300 бѣрковъсковь меду росьсыти) の росьсыти (рассытити [水を混ぜて発酵させる] のアオリスト形) の語は *Км* の固有読みで後代の挿入だろう。ここは、*ПЛЛ* では варя 300 провар/перевар медь となっている。варити медь も蜜酒を醸すことの表現で、провар/перевар は一回の煮る量 (「ひと鍋」という感じか) が単位になったものだが、*НМ* 編者には理解できなかったため、通用していた берковеск の単位に取り換えたのではない。берковеск は塩、蜜蝋、酒などの取引に使われた原材料の重量単位で、プード (пуд) の 10 倍を示し、およそ 163.8kg に相当する [Романова 2014: 69–70]。ここでは、ウラジーミルの気前良さを示すために使われたのだろう。

805) 「自分の長老たち」(старѣишины своя) はウラジーミルの支配下にあり貢税、徴用、徴兵の義務を負っている都市の「長老」(старцы)、すなわち城市と周辺地の豪族・族长たちのこと。

806) 「自分の代官たち」(посадники сова) は、ウラジーミルが自分の支配都市に、貢税の徴収や徴用の執行のために派遣している、配下の家臣のこと。主要な城市には息子たちを派遣したが、その場合も息子たちの監督役として高位の家臣たちが代官 (посадник) として同行した。

807) この「300 グリヴナ」(300 гривен) は、[№ 14] でイーゴリ [03] がノヴゴロドから徴収していた一年分の貢税額に匹敵する巨額なもの (銀重量にして 18kg ほど) [ノヴゴロド第一年代記 (1): 注 136] だが、この 300 の数は配下の従士階層に与えた蜜酒の 300 ヴェルコヴェスク (上注 804) の数と合わせるために、ここに書いたものだろう。そこには、「配下の者たち (貴族や長老)」と「民衆 (貧しい人々)」にそれぞれ気前よく与えたことを対比する手法 (下注 818 参照) によるもので、これは [№ 120] と [№ 121] の描き方にも採用されている。

808) ウラジーミルが戦闘から生き残って教会を建てたのが 8 月 6 日の深夜から翌 7 日にかけて (上注 803) だとすると (上注 802)、8 月 7 日～8 月 14 日の 8 日の間ヴァシレフで「盛大な祭り」(праздникъ великъ) を行い、翌日の 8 月 15 日 (次注) に近隣のキエフに戻ったというのがもっとも合理的な日程計算になる。

809) 聖母就寝祭は 8 月 15 日。この日に「再び光輝ある祭りを行った」(тут пакы праздникъ творяше свѣтель) ことから、ウラジーミルが建てた「聖母教会」は「聖母就寝」(Успение Богородицы) の祭りに献堂された教会であったことが推察される。

ようになった。そして、毎年このようなことを行った<sup>810)</sup>。

### 【人を憐み与えることについての聖書からの引用：996年】 [№ 119]

〔ウラジーミルは〕<sup>811)</sup> 聖書の言葉を愛していたが、ある時、福音言が読まれているのを聞いた。すなわち、「憐み深い人は幸いである。かれらは憐みを受けるであろう<sup>812)</sup>」、また「自分の持ち物を売って乞食たちに施しなさい<sup>813)</sup>」、また「あなたがたは自分のために宝を蓄えるな。地上では衣魚（しみ）や虫が損ない、盗人たちが穴をあけて〔盗み出す〕。自分のために天に財産を蓄えよ。天では衣魚や虫が損なうことなく、盗人たちが穴をあけて盗み出すこともない<sup>814)</sup>」。かれはまた、「幸いなるかな、憐みを施し、与える者は<sup>815)</sup>」とダビデが言っているのを聞いた。かれは、「貧しい者に与える者は神に貸すことになろう<sup>816)</sup>」とソロモンが言っているのを聞いた。

### 【ウラジーミルの民衆への施し：996年】 [№ 120]

〔ウラジーミルは〕 これらのことを聞いて、すべての乞食と貧しい者に、公の館 (дворъ княжь) に来て、あらゆる必要な物、飲み物と食べ物を、また国庫からは毛皮で<sup>817)</sup> 受け取るように命じた。〔ウラジーミルは〕 これを準備して、こう言った。「力のない者、病気の者たちは

---

810) この「毎年このようなことを行った」(и тако по вся лѣта творяше) は前述部分からのつながりから判断すると、聖母就寝祭における祝祭行事 (праздникъ творяше) であり、「このようなこと」(тако) は、次の [№ 119] が *KHC* 編集段階の挿入だとすると (次注参照)、その次の [№ 120] のエピソードにつながることであり、そこに描かれたような気前の良い施しの行事を指しているとして解釈できるのではないかと考えられる。これに、十分の一聖母教会が聖母就寝祭に奉献された聖堂 (献堂) であるという仮説 (上注 809) を併せて考えれば、毎年、8月15日聖母就寝祭にウラジーミルは全城市的な施しを行うことを定めたと思ふことができる。

811) ミヘエフによれば、この聖書の引用からなる訓話的なエピソード [№ 119] は *KHC* における挿入として [Михеев 2011: С. 203]。文脈や内容が前後とスムーズにつながっていないことからそう考えてよいだろう。

812) 『マタイによる福音書』5:7からの引用。

813) 『マタイによる福音書』19:21と『ルカによる福音書』12:33の文言の組み合わせ。

814) 『マタイによる福音書』6:19-20からの引用。

815) 原文は、блаженъ муж, милуя и дая で блажен муж は『詩編』1:1冒頭の語句を取ったもの。 милуя и дая (憐みを施し、与える) の句は『詩編』にはなく、文脈にあわせた引用者の作文だろう。

816) 『箴言』19:17からの引用。

817) 「国庫からは毛皮で」(от скотницъ кунами) の「毛皮」すなわち「クナ」(куна) は、本来は貂 (テン) やリスの毛皮を指しているが、11世紀頃からは貢税の課税の場合に、グリヴナの下位の金銭単位として用いられるようになった。ただし、ここでは文脈から見て、国庫 (скотница), すなわち貢税品の保管庫内の現物で納められた毛皮を、そのまま貧者に与えたと理解するのが妥当だろう [田中 1995: 88-89頁]。このような毛皮は、当時は金銭として流通していた。



わたしの館まで来ることができない」。そしてかれは、車を準備するように命じ [167]、パン、肉、魚、種々の果物 (овощь)、樽に入れた蜜酒、および他の〔樽に入れた〕クワス (квась) を載せて、城市中を「病人、乞食、歩けない者はどこにいるか」と訊ねながら、引いて歩くよう〔命じた〕。その者たちに必要に応じて分け与えたのである。

### 【ウラジーミルは従士たちを寵愛する：996年】 [№ 121]

かれはさらに、このことを日曜日ごとに自分の家来たち (люди свои) に対して行った<sup>818)</sup>。〔公の〕居館 (двор) や従士の館<sup>819)</sup> (гридница) において宴会 (пирь) を催したのである。貴族 (бояре) や平従士<sup>820)</sup> (гриди) たち、百人長 (сочкьи) や十人長 (десячьскьи)<sup>821)</sup>、身分の高い家臣<sup>822)</sup> (нарочитыя мужа) たちが、公がいてもいなくても来られるようにした。その昼食では<sup>823)</sup> 家畜や獣の肉がたくさんあり、すべてのものが豊富にあった。

かれらは酔った時に公〔ウラジーミル〕に不平を抱いて、こう言っていた。「悪いことである。

818) この и се же паки творяше людемь своимь по вся недѣль の文言は [№ 118] の最後の文「毎年このようなことを行った」(и тако по вся лѣта творяше) に対応しており、気前のよい施しは、民衆には「毎年」つまり年一回の祭日 (聖母就寝祭?) のときであるのに対して、家来には「日曜日ごと」に施されるという対比的な表現になっている。

819) 「従士の館」(гридница) は、公の居館 (двор) と一体となっており (もしくは隣接)、公に仕える「平従士」(гриди) たちが居住し、軍務のために待機する建物のこと。広い建物だったことが想定される。

820) 「平従士たち」(гриди) の語は、古スカンジナビア語で「仲間」「護衛」を意味する gridi からの借用で、公に仕える従士 (дружина) 集団を構成し貴族 (бояре) に次ぐ地位の、軍務に就いている階層を指している [Горский 2019: С. 93–96 (гридь)]。

821) 「百人長」(сочкьи) と「十人長」(десячьскьи) は、10人単位で編成され軍組織の指揮者の名称に起源をもつ職名だが、ここでは、公の支配下にある都市における公に属する官職名と推察される。「千人長」(тысяцкии) は主に大都市の軍事を管掌したが、「百人長」(сочкьи) と「十人長」(десячьскьи) の職は、ユシコフによれば、公の支配下の都市に、その支配のために派遣された駐留部隊が、支配が安定すると都市に定着して、行政、司法、警察などの機能を担うようになったものとしている。その職能は都市の政治・経済環境によって多様化し、住民の暴動の鎮圧などの治安維持、公から派遣された徴税人の活動の警備、交易活動の警備などが考えられる [Юшков 1949: С. 107-107]。他方、クーチキンによれば、都市担税民 (черные) の労働 (城砦の建設や整備、歩道舗装、狩猟や収穫作業など) の10人単位組織を指導・監督する役職を起源として、特に、かれらが都市民に対して金融業務を行っていた経済活動に注目している [Горский 2019: С. 315–316 (сотский)]。

822) 「身分の高い家臣」(нарочитыя мужа) の用語については、[ノヴゴロド第一年代記 (1): 注 227] を参照。そこでの用法と、この部分では職名の列挙の最下位に置かれていることから判断すると、支配や行政を担う階層とは別の、被支配民における名士、すなわち在地の都市の豪族・族長たちを指しているのではないか。

823) この обѣда (昼食) は、「日曜日ごと」に開かれていることからわかるように主日 (日曜日) の聖体礼儀のあとの祝いとして行われる宴会 (共食) を指している。なお、「昼食では」(на обѣдѣ) の句は *Лвр* にはないが、*Н1-М* 全写本と *Ип, Н4, С1* にはある読み。どちらが本来の読みであるかは判断が難しい。

われらは木の匙で食べさせられている。銀〔の匙〕ではなく」。すると、ウラジーミル [08] はこれを聞いて、従士たちが食べるために銀の匙をつくるように命じて、こう言った。「銀や金では従士たちは得られない。わたしの祖父やわたしの父が、従士たちによって金や銀を得たように<sup>824)</sup>、従士たちによって銀や金を得よう」。

ウラジーミル [08] は、従士たち (дружина) を愛していた。そして、土地の制度<sup>825)</sup> (строи земельский), 戦争<sup>826)</sup> [の遂行], 土地の規定<sup>827)</sup> (устав земной) について、かれらと相談していた<sup>828)</sup>。

### 【ウラジーミルは周辺国と平和を保つ：996年】 [№ 122]

かれ〔ウラジーミル〕は周辺の諸公、すなわちポーランドのボレスワフ<sup>829)</sup> (Болеслав Ляцкий), ハンガリーのイシュトヴァーン<sup>830)</sup> (Степан Угорский), チェコのオルドジ

---

824) この文言に内容的に対応しているのは、945年記事 [№ 28] の冒頭にイーゴリ [02] が自分の従士たちの進言にしたがってドレヴリャネ人から実力で貢税を取ったこと（その後、多くの従士を伴わないイーゴリは殺害される）。さらに、971年記事で [№ 57] スヴァトスラフ [03] が、ビザンツ皇帝からの贈物を自分ではとらず従士たちに渡し、さらに戦死した従士たちのために貢税を取ったエピソードなどを挙げることができるだろう。ただし、本文の著者がこれらの記事を念頭においていたかどうかは不明。

825) 「土地の制度」(строи земельский) とは次注の「土地の規定」と関連して、支配領民に対する貢税の種類や額、徴税の方法などを定めることを指しているのではないか。これらは徴税の実務を担う配下の従士たちの存在なしには考えられなかったはずである。

826) この「戦争」(рати) は [№ 118] のエピソードから見て、主にベチェネグ人の来襲に対する防衛戦争を指しているだろう。

827) 「土地の規定」(устав земной) については年代記ではこの個所だけの言及だが、この記述から、当時何らかの「土地」、すなわち支配領からの貢税の徴収についての規定（「ウラジーミルの教会規定」や「ルーシ法典」に相当するもの）が存在したことが考えられる。チェレプニンは、946年の記事でオリガが行った「規定と税額」(уставы и уроки) の制定の類する作業をウラジーミルが引き続き行ったと考えている [Черепнин 1965: С. 152–154]。

828) クリュチェフスキイはこの段落の一節に、のちに「貴族会議」(боярская дума) へと発展する君主の顧問団の原型を見ており [Ключевский 1902: С. 15]、その場合には、ここの「従士たち」(дружина) は公の側近である貴族たち (бояре) を主に指していることになる。

829) 「ボレスワフ」(Болеслав) は、ピヤスト王朝のポーランド公ボレスワフ一世 (Bolesław I) のこと。「勇敢公」(Chrobry), 「大いなる公」(Wielki) 公と通称されている。在位 992年～1025年。1025年の死に臨んでポーランド国王に就位している。ウラジーミルの死後に起こったスヴァトボルク [07] とヤロスラフ [13] との抗争において、前者に積極的に加担した。

830) 「イシュトヴァーン」(Степан) は、ハンガリー王国の初代国王イシュトヴァーン一世 (István I) のこと。在位は、997～1037年。1000年にキリスト教国王として戴冠した。のちに聖人に列せられる。

フ<sup>831)</sup> (Андрѣхл Чышьскыи) と平和に暮らしていた<sup>832)</sup>。かれらの間には平和があり、友好 (любовь) [もあった]。

**【ウラジーミルは主教たちの進言で死刑を復活するが、死刑をやめ人命金徴収に戻す：996年】** [№ 123]

ウラジーミル [06] は、神を畏れながら暮らしていた。

[すると] 強奪が増えた。主教たち<sup>833)</sup> は再びウラジーミル [06] にこう言った。「強盗 (разбойници) が増えています。あなたはなぜかれらを<sup>834)</sup> 処刑しないのですか<sup>835)</sup>」。すると、か

831) 「オールドジフ」(Oldřich) は、プシェミスル朝のチェコ (ボヘミア) 公で、在位は 1012 ~ 1033 年。*Км, Тр* Андрѣхл だが、*Ак* Андреи; *Бр* Андрѣан; *Ин* Ондроник; *Лвр, Н4, С1* Андрих と異読の幅が大きい。Андрих(л) は、Oldřich のイツ語綴り Odalric, Udalrich を伝えたものか。

832) 「暮らしていた」にあたる表現は *Км* では бѣ бо, рече, живушю ему だが *Ак, Бр Тр, ПВЛ, Н4, С1* 諸写本は бѣ бо живя であり、前者はこの写本の固有読み。なお、[№ 119] の段落の文は 3 個所で 〈бѣ бо + 分詞能動現在短語尾主格〉 という特徴的な構文で始まっており、明らかに同一の編集単位であることが分かる。

なお、上掲の三人の近隣諸国君主の在位期間から見る限り、この記事の書き手は、ほぼウラジーミル公が没した 1015 年頃の対外的な状況を念頭に置いていたと推察される。

833) この「主教たち」(епископы) は、ウラジーミルの顧問として行政に参画していたビザンツ渡来のギリシア人主教のことだろう。[№ 110] の主教管区リストによれば、府主教、ノヴゴロド大主教 (イオアヒム [№ 105, 109]) の他に、チェルニゴフ、ベレヤスラヴリ、ベルゴロド、ヴラジミル、ユーリエフ、ロストフなどに早い時期に主教が赴任していたことがわかる。このうち、ベレヤスラヴリ、ベルゴロド、ユーリエフの主教はキエフから近いことから、ウラジーミル公の行政の関する評議 (のちの дума にあたる) に参加していた可能性がある。なお、ウラジーミルが主教たちと評議していたことについては、1051 年にルーシ人として初めて府主教になったイラリオンが、その『立法と恩寵についての説教』の「ウラジーミル讃詞」のなかで次のように語っている。「あなたはわれらの新しい師父である主教たちと頻繁に会合して、大いなる謙抑とともに協議した。どのように、新たに主を知ったこの人間たちに法を定めるべきかについて」(ты же съ новыми нашими отци епископы сънимаяся чясто, съ многымъ съмѣрениемъ съвѣщавашеся, како въ чловѣцѣхъ сихъ ново познавшихъ Господа законъ уставити)[БЛДР Т. 1: С. 48]。これは、この年代記記事が事実に基づいていることの傍証になっている。

834) 「かれらを処刑しない」(не каниши их) となっているのは *Ак, Бр, Лвр Н4, С1* で их の語を欠いているのが、*Км, Тр, Ин* の読みである。

835) 主教たちが強盗の処刑を進言したのは、出身地のビザンツの法を適用しようとしたという説が研究者から出されている。特にミーロフは 8 世紀に発布されたビザンツ帝国の法律選集「エクログエ」(Εκλογή τῶν νόμων; Экллага) の第 17 項にある殺人者に死刑を定める過酷な刑罰条項が、何らかのかたちで主教たちの判断の基準になったと仮定しており、さらに、これを『ルーシ法典 (簡素版)』の成立と関連させて論じている [Милов 2006: С. 93-95, 103-106]。

なお、『ルーシ法典』の諸規定から推察すると、馬や牛などの他人の財産を強奪する時に、強盗が所有者や使用人などを現場で殺害する事件が頻繁に起こっていたようであり、その場合、のちに犯人 (強盗) が捕まっても、高額の人命金 (вира) (下注 837) 犯人に支払わせることで解決し、死刑を課すことはなかった。

れはかれらに言った。「わたしは罪を恐れている」。かれら〔主教たち〕はかれに言った。「あなたは悪しき者を処刑し、善き者に慈悲を〔与えるよう〕<sup>836)</sup> 神によって任じられたのです。あなたは強盗を処刑しなければなりません。ただし取調べた(испытание)上ですが」。

〔そこで〕ウラジーミル [06] は、人命金<sup>837)</sup> (вира) を廃止し、強盗を処刑し始めた。すると、長老と主教たち<sup>838)</sup> がこう言った。「戦争が多くあります<sup>839)</sup>。人命金(вира)を〔取って、それを〕武器や馬のために使いなさい<sup>840)</sup>。ウラジーミル [06] は、「そのようにしよう」と言った。

〔こうして〕、ウラジーミル [06] は、神と祖父と父の定め<sup>841)</sup> に従って暮らしていた<sup>842)</sup>。

836) 『ペテロの手紙上』2:14にローマ皇帝が行政官(ἡγεμών; князь)を派遣するのは「悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるため」(во отпущение убо злодеем, в похвалу же благотворцем) という一節があり、内容的におそらくこれを考慮に入れた発言だろう。

837) ここは *Км, Бр, Тр, Н4* が *вѣры* (信仰) で、*Ак, Ин, Лвр, С1* が *виры* (人命金) と異読がある。文脈から見て明らかに後者の *виры* が本来の読みであり、前者は誤った解釈に基づく後代の読みが伝わったものである。

*вира* (人命金) については本年代記の序文[№ 1]に言及がある。公の配下の者(主に家臣たち(мужи))の間で起こった殺人事件を裁くときに殺人者(及び殺害現場の共同体などその関係者)から公が徴収する高額な罰金のこと。人命金と引き換えに殺人者は罪を追及されなくなる。

838) *Н1-М(Км, Ак, Бр)* で *старци, епископ* だが、*Ин, Лвр, Н4, С1* は *епископи и старци* となっている。両者とも構文や文脈の上で自然であり、ここの *епископи* (主教たち) は前から引き継いだだけの付け足しで、*старци* (長老たち) に意味の中心があると考えたべきではないか。すなわち、戦争の際に軍兵(вои)の供出を担う在地(キエフ市民)の長老たち(*старци*)の意見が通って、ウラジーミルは、主教たちの進言によって一旦は定めた人命金廃止の方針を翻したと、考えることができる。なお、クルチェフスキイは、側近会議に出ている主教たちが戦争の頻発という状況の変化に応じて、進言の内容を変更したと解釈している[Ключевский 1902: С. 16]。

839) この「戦争」(рать)は上注 826 と同じくペチェネグ人に対する防衛戦争のことを指しているだろう。

840) この発言の、人命金(вира)を武器の調達に使うことについては、本年代記の「序文」[№ 1]に同様の内容が書かれている[『ノヴゴロド第一年代記(1): 注 33]。「序文」がこの個所のエピソードを参照して書かれたことは疑いない。

841) 「神と祖父と父の定め」(по устройению божию и дѣдно и отъню)は *Н1-М* 全写本で共通の読みだが、*Лвр, Ин, С1, Н4* では「神と」がない(по устройению дѣдно и отъню)。ПВЛ-НСГの編者の側に *божию* を削除する動機付けが見当たらず、内容や文脈から *божию* は不自然である(次注)ことから、後代の *Н1-М* 編者が「神の御心によって両眼を病み」(По божию же строю в се время разболѣся Володимирь очима)[№ 97]のような表現からの類推により *божию* を挿入した説明的補筆と考えるべきだろう。

842) 文脈から見て、「祖父と父の定め」(устройство дѣдне и отъне)とは、イーゴリ [02] やスヴァトスラフ [03] の時代から慣習法となってきた、家臣の間で発生した殺人事件の犯人からは、人命金を取って処刑しないという掟(「定め」)のことを指しており。ウラジーミルは伝統的な掟を遵守して、ビザンツ出身の主教たちが主張する殺人者の処刑を斥けたと理解することができる。この編集単位[№ 123]の冒頭にある「ウラジーミルは〜暮らしていた」(живяше Володимирь)の表現が、この編集単位末尾の文でも同じ表現で繰り返されていることによって、年代記記者はウラジーミルの「神を畏れて暮らす」と「祖父の定めに従って暮らす」ことは同じ趣旨であることを主張しようとしているのだろう。

【空の年紀(12年分)とウラジーミル公近親の物故者について。997～1013年】 [№ 124]

[168]

6505(997)年<sup>843)</sup>

6506(998)年

6507(999)年

6508(1000)年

マルフリダ<sup>844)</sup> (Мальфридъ) が逝去した。

この同じ年にヤロスラフ [13] の母ログネダ<sup>845)</sup> (Рогнедъ) も逝去した。

6509(1001)年

ブリヤチェスラフ [081] の父でウラジーミル [06] の子であるイジヤスラフ<sup>846)</sup> [08] が逝去した。

6510(1002)年

6511(1003)年

ウラジーミル [06] 孫でムスチスラフの<sup>847)</sup> 子であるフセスラフ [082] が逝去した。

---

843) この997年の年紀は *HI-M* では空白になっているが、*ПВЛ* では、ベチエネグ人のベルゴロド包囲と相手の使者を欺いた機知あふれる城砦防御についての約490語からなる物語が記述されている。上注788の物語と同様にベチエネグ人からの防衛についてのフォークロア伝承が資料となっており、この物語は *ПВЛ* 編者による後代(12世紀)の挿入である。

なお、997年～1013年の記事は記事の短さや内容から見て、同一の資料(おそらく十分の一教会に伝わったウラジーミルの近親者についての「過去帳」(синдоник)のようなもの)が使われたことは明らかである。見方を変えれば、998年～1013年のほぼ15年の期間については、ウラジーミルの統治と活動についての史料が残されていなかったことが推察される。

844) 「マルフリダ」(Мальфридъ; *Лер. Мальфрѣдъ*, 標準綴 Малфрида)は、ウラジーミル公の近親者の死亡記事という文脈から見てかれの妻の一人である可能性が高いが、この名はここが唯一の言及であるために特定できない。息子スヴァトスラフ [11] とムスチスラフ [18] の母親である「もう一人のチェコ人女」の名とする説もあるが根拠はない。ウラジーミル [06] の実母である「マルーシャ」(Малуша) (970年記事 [№ 54] 参照) を指しているという説もある [Древняя Русь: С. 474: Малуша]。

845) ウラジーミルがポロツクから略奪した妻「ログネダ」については、980年によるポロツク占領の記事 [№ 68] を参照。かの女がヤロスラフ賢公 [13] の母親であることについては [№ 104] の息子たちのリスト(上注426)にも言及がある。

846) ウラジーミルとログネダの息子のイジヤスラフ [08] については、[№ 76] と [№ 104] (上注424参照) のリストに言及がある。死没した時には20歳代前半だった。

847) 「ムスチスラフの」(Мстиславль)は *HI-M* 全写本と *Н4* の読みだが、*ПВЛ* 諸写本は Изяславль (イジヤスラフ [08]) (直前に言及がある。上注846参照) になっている。ポロツク公族の系譜からみても後者が事実と対応しており、本来の読みだろう。*HI-M* の読みは、その編集過程での誤記が伝わったものと考えられる。

6512(1004)年

6513(1005)年

6514(1006)年

6515(1007)年

これらの者たちが聖母教会へ移された<sup>848)</sup>。

6516(1008)年

6517(1009)年

6518(1010)年

6519(1011)年

ウラジーミル [06] の皇妃 (цесарица) 神の僕<sup>849)</sup> アンナ<sup>850)</sup> が逝去した。

6520(1012)年

6521(1013)年

---

848) *HI-M* では全写本で *принесени си въ святую Богородицю* だが *ПВЛ (Лвр, Ин)* では, *си* が *святии* になっている。*святии* はどのような「聖人たち」であるか不明瞭であり, 文脈から見ても不自然である。*HI-M* の読み *си* を, 1000年～1003年の記事に記された4人の物故者(の遺体)と解釈すれば, 文脈的には自然である。実際, 聖母教会(十分の一教会)は最初期の公族たちの〈菩提寺〉の役割を果たしており, のちにウラジーミル [06] の遺体もここに安置された [Древняя Русь 2015: С. 237]。

849) *HI-M* の全写本で「皇妃」(цесарица)の前に「神の僕」(раба Божия)があるが, *ПВЛ* にはない。この語句は死者の冥福を祈る祈祷文などでは使われるが, 年代記記事としてはいかにも不自然であり, *HI-M* の編集段階での挿入によるものだろう。

850) ウラジーミルが洗礼の条件として妻としたビザンツ皇帝の皇妹「皇妃アンナ」(Анна цесарица)については上注294を参照。

参考文献

- Аникин Вып. 1-14 — Аникин А. Е. Русский этимологический словарь. Вып. 1–14. М., 2007–2020.
- Беляев 2001 — Беляев С. А. О названии церкви, в которой был крещён князь Владимир // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2001. № 2(4). С. 50–68
- Великий Новгород. Энциклопедический словарь — Великий Новгород. История и культура IX–XVII веков: Энциклопедический словарь. СПб., 2009.
- Вилкул 2009 — Вилкул Т. Л. Люди и князь в древнерусских летописях середины XI – XIII вв. М., 2009.
- Вилкул 2012 — Вилкул Татьяна. О происхождении «Речи Философа» // Palaeoslavica XX/1, 2012. С. 1–15.
- Водолазкин 2006 — Водолазкин Е. Г. Краткая Хронографическая Палея. Текст. Выпуск 1 // ТОДРЛ. Т. 57. СПб., 2006. С. 891–915.
- Гимон 2012 — Гимон Т. В. События XI – начала XII в. в новгородских летописях и перечнях // Древнейшие государства Восточной Европы, 2010 год Предпосылки и пути образования Древнерусского государства. М., 2012. С. 584–703.
- Гиппиус 2008 — Гиппиус А. А. Крещение Руси в Повести временных лет: К стратификации текста // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2008. № 3. С. 20–23.
- Голубовский 1884 — Голубовский П.В. Печенеги, торки и половцы до нашествия татар. История южно-русских степей IX–XIII вв. М., 1884.
- Горский 2016 — К вопросу о формировании системы посадничества на Руси // Древнейшие государства Восточной Европы. 2014 г. М., 2016.
- Горский 2019 — Горский А. А. Русское средневековое общество: Историко-терминологический справочник. СПб., 2019.
- Домбровский 2015 — Домбровский Д. Генеалогия Мстиславичей: Первые поколения (до начала XIV в.). СПб., 2015.
- Древняя Русь 2015 — Древняя Русь в средневековом мире: Энциклопедия /Под общей редакцией Е.А. Мельниковой и В.Я. Петрухина. М., 2015.
- Древняя Русь: Хрестоматия Т. 5 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 5: Древнескандинавские источники. М., 2009.
- Етимологічний словник 1985 — Етимологічний словник літописних географічних назв Південної Русі / Відп. ред. О.С.Стрижак. — К.: «Наукова думка», 1985.
- Карпов 2017 — Карпов А. Ю. Русская церковь X–XIII вв.: Биографический словарь. М., 2017.
- Книги Георгия Монаха 2006 — Матвеев В., Щеголева Л. Книги временные и образные Георгия Монаха. В двух томах. Т. 1, Ч. 1.: Интерпретированный текст Троицкой рукописи. М., 2006.
- Колесов 2004 — Колесов В. В. Древняя Русь: наследие в слове. В 5 кн. Кн. 3: Бытие и быт. СПб., 2004.
- Коллинс 1997 — Самуэль Коллинс. Нынешнее состояние России. // Утверждение династии. М., 1997. С. 185–229.
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X–XVI вв. М., 2006.
- Львов 1968 — Львов А. С. Исследование Речи Философа // Памятники древнерусской письменности: Язык и текстология. М., 1968. С. 333–396.
- Мадуров 2018 — Мадуров Д.Ф. Серебряная Булгария. Основные вехи истории. СПб., 2018.
- Милов 2006 — Милов Л. В. Византийская Эклога и Правда Ярослава (к рецепции византийского

- права на Руси) // Милов Л. В. Последам ушедших эпох. М., 2006. С. 87–99.
- Милотенко 2008 — Милотенко Н. И. Святой равноапостольный князь Владимир и крещение Руси. Древнейшие письменные источники. СПб., 2008.
- Миллер 2000 — Мюллер Рассказ «Повети временных лет» о крещении Владимира Святославича // Мюллер Л. Понять Россию: историко-культурные исследования. М., 2000. С. 60–70.
- Никольский 1906 — Никольский Н. К. Материалы для повременного списка русских писателей и их сочинений (X-XI вв.). Корректурное издание. СПб., 1906
- Оболенский 1875 — Оболенский М. А. Исследования и заметки по русским и славянским древностям. СПб., 1875.
- Павлов 1878 — Павлов А. Критические опыты по истории древнейшей греко-русской полемики. СПб., 1878.
- Палея Толковая 1892 — Палея толковая. По списку, сделанному в Коломне в 1406 г. Труд учеников Н. С. Тихомирова. М., 1892.
- Палея Толковая 2002 — Палея Толковая / Пер. А. М. Камчатнова. М., 2002.
- Петрухин 1999 — Петрухин В.Я. Гостомysl: к истории книжного персонажа // Славяноведение. 1999, № 2. С. 20–23.
- Петрухин 2002 — Петрухин В.Я. Христианство на Руси во второй половине X – первой половине XI в. // Христианство в странах Восточной, Юго-Восточной и Центральной Европы на пороге второго тысячелетия. М., 2002. С. 60–132.
- Петрухин 2014 — Петрухин В. Я. Выбор веры в евразийской истории. Хазария и Русь // Калинина Т.М., Флёрв В.С., Петрухин В.Я. Хазария в кросскультурном пространстве историческая география, крепостная архитектура, выбор веры. М., 2014.
- Плетнева 1990 — Плетнева С. А. Половцы. М., 1990.
- Понырко 1992 — Понырко Н. В. Эпистолярное наследие Древней Руси. XI – XIII вв. М., 1992.
- Попов 1875 — Попов А. Н. Историко-литературный обзор древне-русских полемических сочинений против латинян (XI–XV в.). М., 1875.
- Поппэ 1996 — Поппэ А. Митрополиты и князья Киевской Руси // Подскальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988–1237 гг.). СПб., 1998. С. 443–511.
- Похилько 2019 — Похилько Н. Исповедание Михаила Синкелла. Славянский перевод с "подобосущной" терминологией // Zeitschrift für Slavische Philologie. V. 75(2019). I. 2. P. 297-346
- ПСРЛ Т. 1 — Полное собрание русских летописей. Том 1: Лаврентьевская летопись. М., 1997.
- ПСРЛ Т. 2 — Полное собрание русских летописей, Том 2. Издание 2-е. Ипатьевская летопись. СПб., 1908.
- ПСРЛ Т. 3, 1879 — Полное собрание русских летописей. Том 3, Вып.2 Издание 2-е. Новгородские летописи (так названные Новгородская вторая и Новгородская третья летописи) СПб., 1879.
- ПСРЛ Т. 5, вып. 1 — Полное собрание русских летописей: Том 5. Издание 2-е. Софийская первая летопись. Л., 1925.
- ПСРЛ Т. 6 — Полное собрание русских летописей: Том 6, Софийская первая летопись старшего извода. М., 2000.
- ПСРЛ Т. 42 — Полное собрание русских летописей. Т. 42: Новгородская Карамзинская летопись. Текст подгот. А.Г. Бобровым, З.В. Дмитриевой. СПб., 2002.
- Роменский 2017 — Роменский А.А. Империя ромеев и «тавроскифы». Очерки русско-византийских отношений последней четверти X в. (Нартекс. Byzantina Ucrainensia. Том 5). Харьков, 2017.
- Рыбникова 1961 — Рыбникова М.А. Русские пословицы и поговорки. М., 1961.



- Сазанов 2011 — Сазанов А.В. Крещение князя Владимира в Корсуни: текст и археология // Вестник Московского института лингвистики. № 1 / 2011. С. 128–149.
- Савельева 1985 — Савельева О. А. «Плач Адама»: Круг источников и литературная семья памятника // Памятники литературы и общественной мысли эпохи феодализма. Новосибирск, 1985.
- Сухомлинов 1856 — Сухомлинов М.Н. О древней русской летописи, как памятнике литературном // Ученые записки II отделения Академии наук, кн. III, СПб. 1856. С. 1-230.
- Сендерович 1996 — Сендерович С. Св. Владимир: к мифопоэзису // Труды Отдела древнерусской литературы. СПб., 1996. Т. 49. С. 300-313.
- Славянская энциклопедия -2 — Славянская энциклопедия: Киевская Русь — Московия в двух томах. Т. 2, М., 2003.
- СРНГ Вып. 21 — Словарь русских народных говоров. Вып. 21. М., 1986.
- Тихомиров 1960 (1979) — Тихомиров М. Н. Начало русской историографии // Тихомиров Тихомиров М. Н. Русское летописание. М., 1979. С. 46–66. (Впервые напечатан в журнале «Вопросы истории». 1960. № 5. С. 41-56)
- Хронограф 1691 — Анисимова Т. В. Хроника Георгия Амартола в древнерусских списках XIV–XVII вв. 2009 (Приложение 2: Хронограф особого вида в списке 1691 г. (РГБ. ф. 895 [Владимирское собр.] № 36.) С. 330–389.
- Черепнин 1965 — Черепнин Л. В. Общественно-политические отношения в Древней Руси и Русская Правда // Древнерусское государство и его международное значение. М., 1965.
- Шахматов 1940 — Шахматов А. А. Повесть временных лет и ее источники // Труды Отдела древнерусской литературы. Т. 40, 1940. С. 9–150.
- Шахматов 2002 (1908) — Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 1: Разыскания о древнейших русских летописных сводах. СПб., 2002. (текст "Разысканий о древнейших русских летописных сводах" публикуется по изданию 1908 г.)
- Шахматов 2003 (1908а) — Шахматов А. А. Корсунская легенда о крещении Владимира // Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003. С. 305–379.
- Шахматов 2003 (1908) — Шахматов А. А. Один из источников летописного сказания о крещении Владимира // Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003. С. 296–304.
- Шахматов 2014 — Шахматов А. А. Жития князя Владимира: Текстологическое исследование древнерусских источников XI–XVI вв. СПб., 2014.
- Щапов 1976 — Древнерусские княжеские уставы XI–XV вв. / Подг. изд. Я. Н. Щапов. М., 1976.
- Юшков 1949 — Юшков С. В. Общественно-политический строй и право Киевского государства. М., 1949.
- Янин 2003 — Янин Л. В. Новгородские посадники. изд. 2-е, переработанное и дополненное. М., 2003.
- Янин 2013 — Янин Л. В. Очерки истории средневекового Новгорода. изд. 2-е. М., 2013.

Poppe 1976 — The political Background to the Baptism of Rus' (1976) // The Rise of Christian Russia II. London, 1982.

イブン・ファドラーン — イブンヴァドラーン, 家島彦一訳注『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（東洋文庫, 2009年）

栗生沢 2015 — 栗生沢猛夫『〈ロシア原初年代記〉を読む』, 成文社, 2015年。

田中 1995 — 「キエフ国家の形成」(田中陽兒), 田中陽兒, 倉持俊一, 和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史 1—9～17世紀』山川出版社, 1995年, 59-92頁。

ノヴゴロド第一年代記(1) — 中澤敦夫「『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈(1)」『富山大学人文学部紀要』(76号, 2022年2月), 113-219頁。

バシレイオス 1996 — 山村敬(訳)『聖大バシレイオスの『聖霊論』』(南窓社, 1996年)

ハディース(中) — 牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成 中巻』(中央公論社, 1994年)

ハリス 2018 — ジョナサン・ハリス『ビザンツ帝国 生存戦略の一千年』(白水社, 2018年)

ヘイムスクリングラ(二) — スノッリ・ストゥルルソン, 谷口幸男訳『ヘイムスクリングラ—北欧王朝史(二)』(プレスポート, 2008年)

プリエートニェヴァ 1996(1976)— S. A. プリエートニェヴァ, 城田俊訳『ハザール 謎の帝国』(新潮社, 1996年)〔原著は Плетнева С. А. Хазары. М., 1976〕

宮野 2012 — 宮野裕「中世ロシアのウラジーミル聖公の教会規定 — 写本系統樹の検討及び試訳」『岐阜聖徳学園大学紀要・教育学部編』51, 2012年。

ロシア原初年代記 1987 — 國本哲男他訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会, 1987年。

※ 年代記とその写本の略号については, [ノヴゴロド第一年代記(1): 212-213頁]を参照。

## 〔後記〕

本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の継続である「『ノヴゴロド第一年代記』講読会」の研究活動の成果である。講読会の参加者は次の通り。宮野裕(岐阜聖徳学園大学教育学部教授), 岡本崇男(神戸市外国語大学名誉教授), 今村栄一(名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院, ウズベキスタンサテライトキャンパス, プロジェクト調整員), 草加千鶴(創価大学非常勤講師), 伊丹聡一郎(明治大学大学院博士後期課程)。

本稿は, 2021年度JSPS科研費, 基盤研究(C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」(19K00469, 研究代表者:中澤敦夫, 研究分担者:宮野裕, 岡本崇男)の助成を受けて行われた研究に基づいている。

